小説

実験区域

大野正重

- １章・・・・・・密室からの漂着
- ２章・・・・・・獲物の匂い
- ３章・・・・・・警務隊本部
- ４章・・・・・・ガードレールをまたいで
- ５章・・・・・・診察室の砲煙
- ６章・・・・・・深手を負って
- ７章・・・・・・査問委員会 Ⅰ
- ８章・・・・・・査問委員会 Ⅱ
- ９章・・・・・・背に刺さる矢
- １０章・・・・・密室への離陸

（伏せろ。ヘリコプターの音がする。伏せてないと・・・着陸したな・・・ああ、またあの叫び声。・・・百人か・・・二百人以上はいる。共産軍だ。気をつけろ。攻めてくるぞ・・・ンターイ、ハンターイと言っているようだ・・・日本語によく似てやがる・・・それにしても、この土はずるずる滑って・・・ふとんみたいな・・・俺の身体をこんな頼りないふとんみたいな土しか隠してくれねえとは・・・光った！ロケット砲だ。伏せっ！）

勢いよく引いたカーテンの背後から、せきとめられていた光が、奔流となって雪崩れこんでくる。午後の安静時間が終わったのだ。窓を一杯に押し開いてから、カーター軍医は、背後のベッドをちらりと見た。
「ダイジョウブ。・・・シズカニネ」
ベッドの上に、小さな日本人がへばり着いて、カーターに何かささやいている。「フセ、フセ」と言っているようだが、カーターには何を意味するのか分からなかった。この日本人の眉毛は、焦げてほとんどなくなり、そのせいで、顔の小さい割には、額が馬鹿に広く見える。いつかテレビドラマで見た、宇宙人にそっくりだ。この男もベッドの上で戦闘中なのだ。かわいそうに。ベッドの上で、毛布に爪を立て、できることなら毛布の下に滲み込んでしまいたそうに腹ばいになり、上目であたりの様子を伺っている、あわれな日本人。
「シズカニネ」
カーターは、優しく聞こえるように気をつけて言った。
柵の向こうから、群衆の上げる声が、続けざまに二度、三度と聞こえてくる。この野戦病院を東京から追い出そうとする日本人達の声。皮膚の色は争えない。奴等は・・・黄色い肌の奴等は、結局親類なんだからな。それで俺達を憎んでるんだ。
ヘリコプターの爆音がまた、近づいてきた。来たぞ、今日は馬鹿に多いな。足のもげた兵隊、手首にのなくなった兵隊、かわいそうな兵隊達がまた来たんだ。ママーッ、と悲鳴を上げながら手術を受けるために。
カーターは窓を閉めて、日本人の顔の右側に手を触れた。至近弾の爆風によるやけど。現地の手当てでほとんどなおりかけているが、軽いひきつれの残るのは仕方あるまい。しかしこの男、俺達を何だと思っているんだろう。身を固くして、じっと俺の様子を上目でにらんでいて。
鈍い炸裂音が、遠くでした。ガス弾でも発射して、群衆を散らしているのかな。カーターは耳を澄ました。突然、下からカーターの手が払いのけられて、毛布をけ返した日本人が、ベッドから飛び下りると、床にはいつくばって頭を抱えた。
「オー・ソーリー」
夕日の直射が、患者を刺激しているのだ。カーターは、ゆっくりカーテンを閉じた。
「ダイジョウブ・・・シズカニ」

小さな男を床から抱き上げると、手足をばたつかせて抵抗する。ベッドに放り出して毛布をかぶせ、上から背中を二、三回、優しく叩いてやると、男は急にもがくのを止めて、手を合わせて叫んだ。
「タスケテ・・・タスケテクレ・・・」
うんうんとうなずくと、カーターは他の患者の状態を調べてまわる。
（しまった・・・捕虜になったのか・・・逃げなくちゃ・・・助けに・・・どうして助けに来ないのかなあ・・・俺はこうやって、がんばって戦っているのに・・・いや捕虜なんだ・・・捕虜はいやだ・・・銃はどこに置いたっけ・・・思い出せない・・・銃さえあれば、あんな奴撃ち殺してやる）
「コロシテヤル」という日本人の怒鳴り声に、カーターは一寸振り向いた。
（殺されるんだ、俺は・・・・銃殺かな・・・・首をしめられて・・・・笑ってやがる、あいつら。西洋人だ、ソ連人か・・・・畜生、俺のことを話してんだな、どうやって殺そうか相談してるんだ・・・・逃げなくちゃ、逃げようよ、おい、逃げるんだ）

「ニゲルンダ」と呼びかけられた患者は、うるさそうに、顔の前で手を振ると、くるりと背中を向けた。
「ニゲヨウ。ユウグンハスグソバダ、ナ、タノム。ニゲテクレ・・・タノムカラ、コノトオリ」と反対側のベッドに走り寄って手を合わせたが、相手は黙ってあごを動かしただけ。次のベッドに飛び付き
「ニゲヨウ。コロサレルンダヨ、オレハ・・・」
とわめき始めた日本人を、カーターが方を抱きすくめるようにして、ベッドへ引きずり込み、
「シズカニ・・・ダイジョウブ・・・アシタネ、アシタ。ダイジョウブ・・・シズカニ」
と耳のそばでささやき、病室を出た。

（明日だと・・・明日俺を殺すんだな・・・そうはさせないぞ。見てろ・・・逃げてやるからな・・・俺の銃はどこだ・・・どこにやったんだっけ・・・銃があったら・・・逃げてやるんだ・・・逃げてやるさ・・・お前達なんかみんな殺してやる。みんなだ・・・奴は出て行ったな。窓からだ・・・窓から逃げてやる。・・・窓だ。窓にきめた）

注射器を持って入って来たカーターは、病室の窓によじのぼろうとしては滑り落ちている日本人を見つけた。彼は振り返って、連れてきた助手に肩をすくめて見せ、日本人を指さした。助手二人は、日本人を両側から抑えて、カーターの所へ連れてくる。こう興奮していたんじゃ、まわりの患者にも影響する。まあ、三時間も寝かせれば、大分おとなしくなるだろう。飯までは待てないな、この様子じゃ。

（逃げるんだ畜生・・・注射なんか・・・殺すつもりだな・・・畜生・・・殺される、殺される・・・助けてくれ・・・俺は・・・・助けてくれ・・・助けてくれえっ）

「シズカニ・・・ダイジョウブ」
大声をあげてもがきまわる日本人の腕。小さい割には筋肉がよく発達しているのな、しかしやっぱり臭いな、東洋人の臭いだ。甘酸くすえた臭いだ。下水の溜りから出てくるような臭いだ。どうも好きになれないよ、この臭いは。黄色い肌の臭い。
「タスケテクレーッ」
と言う悲鳴がだらしない尾を引いて消え、助手の腕にガックリと身体をあずけた日本人の右頬を、カーターは診察する。薬を塗りガーゼをかぶせる。無理矢理薬で引きずり込まれた眠りの中でも、日本人は小刻みに身体を震わせていた。

（暗いなあ・・・目を開いていても・・・見えない・・・何も・・・見えない。輸送機に乗っているのか・・・沈んでく、身体が沈んで・・・飛行機はごめんだぞ・・・もう絶対にごめんだ・・・何の音だ・・・グチャ、グチャ・・・肉が潰れる音だ・・・肉だ・・・俺の肉が潰れて・・・殺される・・・グチャ、グチャ・・・飛行機はごめんだよ・・・飛行機は・・・ああ暗い、暗い・・・エアーポケットに落ちてるのかな・・・灯だ・・・俺を呼んでいる・・・鬼火だな・・・地獄の火だな・・・いや、ひょっとして・・・そう、ベトナムの火だ・・・着陸信号だ・・・見えない・・・もう嫌だよ俺は・・・グチャ、グチャ・・・潰れたのは三元の腕か・・・三元しっかりしろ・・・腕が潰されてるのか・・・血の泡が出てるな・・・動くなよ・・・動くな・・・グチャグチャいうじゃないか・・・肉が潰れるじゃねえか・・・ブザーだ、危険信号だ・・・出口は・・・見えない・・・暗い・・・逃げなくちゃ・・・）

インターホンのブザーが鳴って、カーターを呼び出している。また手術だ、どうして人間て奴はこうこわれやすくできてるんだ。ボンッ、それで手足がちぎれ、内臓が潰れ、縫ったり包んだり。ボンッ、それで頭の神経がずれてわめいたりもがいたり・・・さあ急ごう。死の海へ溺れかけている命を、また一つ釣り上げるんだ。アメリカ人の命を・・・臭いニグロやジャップじゃないとなお良いが・・・＜死の海に溺れて・・・＞俺は詩人だなあ。ママがよくそう言ってた。お前は詩人みたいだよって。＜人類の黒い汚辱＞と言った時だったかなあ。メアリーの家のパーティでスピーチをした時だ。＜ニグロは人類の黒い汚辱の・・・＞汚辱のシンボルだったか、サインだったか・・・黒い汚辱、黄色い汚辱・・・汚辱ばっかりだ、この世界は・・・＜黒人が黒い汚辱のシンボルなら、白人は白いかさぶたに過ぎない＞そうだ、そう言ったんだ、俺は。俺はいつだって人種平等主義なんだが、好き嫌いは別さ。

（明かりだ・・・出て行ったのは奴だ、人殺しめ・・・死にゃしねえぞ・・・注射ぐらいでくたばってたまるか・・・腕も、足もやられたな・・・重くて動かない・・・あの明かりの方へ行けばなんとか・・・ああ、グチャ、グチャか、いいかげんに肉を潰すのはやめてよ・・・なぜこんなに頭が重いんだ・・・死んだのか俺は・・・あいつ、顔の前でお化けみたいに手を振ってるあいつ・・・誰だ・・・気味が悪いや・・・やめろったら・・・俺は逃げるんだ・・・馬鹿な奴・・・殺されちゃうぞ・・・

お前は幽霊だからもう死なないのか・・・そいつはいいね・・・逃げなくちゃ、おさらばだよ・・・あばよだよ・・・バイバイだよ・・・月だな・・・お月様だ・・・脳の芯がジーンと鳴って・・・良い気持ちだ・・・逃げなくちゃ）

注射後三時間四十分して病室に入って来たカーターは、カーテンが風に翻っているのを見る。窓は開け放され、月光が射し込んでいる。日本人のベッドは空になっている。
「外に出すな、見せるな、絶対に」
と怒鳴ったウェリントン大佐の声が耳によみがえる。インターホンを立て続けに押すと早口で、
「日本人が逃げた」
と怒鳴る。
どっちだって良いさ、あの変な臭いがする奴がいようといまいと、意気込んだり怒鳴ったりするのは、もっともっと偉い上官や将軍達のすることさ。奴の逃亡は、少なくとも俺の責任じゃない。きっと薬の効果が弱くって、三時間は眠らなかったんだ。薬が弱かったんだ。

（ほら、探してやがる、見つかってたまるか・・・・カーテンにみんな映ってるよ・・・・銃はどこだ・・・銃は・・・有った・・・狙って、バズーンあたた・・・・顔を出してこっちを見てやがる・・・もう一発、バズーンまたあたった・・・・おい倒れろ、あたったんだぞ、戦争ごっこじゃないんだぞ・・・鉄条網だ・・・下を潜るんだ・・・・穴をほって・・・エンヤコラ・・・・母ちゃんのためなら・・・柔らかい土だ・・・うまく行くぞ・・・・）

在日米軍司令部からの連絡で、奥平誠は、野戦病院を訪れた。そして、思いも寄らぬ椿事発生を知らされた。奥平は昨日の夕刻張川一尉から命令されていた。
「明日引き渡される隊員の姓名と傷病の程度を確認してくること。」
所持品には「オノサワ」という名称入りの水筒と、古びたノートの入った雑のうがあり、その他、名票や認識番号表は持っていない。という米軍からの通知であった。野戦病院に収容された隊員がオノサワならば、それは小野沢正吾という姓名であり、写真はこれ、と記された紙片も受け取っていた。
奥平は病院近くで、デモ隊の騒乱に出会った。デモは正門と通用門近くで最も激しく、彼はデモを見物する群衆の中に混って、病院へ入る機会を待っていた。デモは下火になりながらも、時々思い出したように激しくなった。奥平のいる歩道の人混みからも、アスファルトの破片が飛んだ。奥平の足は投石のあった方へ近づこうとしていた。と、向こう鉢巻をしてニッカボッカーをはいたニコヨン風の男が妙にすばしこい動作で、ごめんよ、ごめんと人混みをすり抜け、アスファルトの飛んだあたりへ近づいて来る。
「私服だ、デカだぞ」
というささやき声が奥平のすぐ後ろでした。自分のことかとギクリとして振り返ったが、人々の視線はニコヨン風の男と、もう一人ジャンパー姿の若者の上に集中していた。

群衆は肩と肩を寄せ合って、私服の行く手を妨害しようとしていた。底意地の悪い肩と肩を両手で引きはがして突き進もうとするのだが、なかなか手間どって進めない。ひんぱんに群衆の足払いが飛ぶらしく、がくっ、がくっ、とニコヨンの顔が傾く。次第に私服の目は血走って来た。群衆の悪意にさらされて、私服であることを隠そうとせず、
「おい、どけ。邪魔すると逮捕するぞ」

と怒鳴るのだが、怒鳴られた群衆はそっぽ向いてそしらぬふりで対抗した。
ニコヨンの視線の示すあたりを辿った奥平が、今しも自分の傍をすり抜けようとしているトックリセーターこそが、私服の狙う獲物であることを了解した時、反射的に走った彼の右手は、トックリセーターの手首を捕らえていた。ピクリッと立ち止まったトックリは、捕らえられた手首からだらりと力を抜いて、
「離せ」
と低い声で言った。奥平はトックリセーターと肩を接触させて並んだ。握った手首を周囲から見られてはならない、と彼は判断した。
「静かにしろ」
とトックリセーターの耳もとでつぶやくと、一段と力を入れて手首を握り直した。トックリは額にもこめかみにも汗を滴らせていた。奥平は自分の捉えた獲物の、ほのかな汗の匂いに、憎悪を覚えた。トックリがいきなり捕らえられた手を振り切ろうとした時、奥平は軽く手首の逆をとった。
トックリが痛さに洩らすうめき声は、奥平の憎悪を幾分和らげた。
ニコヨン姿の私服が、十分トックリを捉え得る所に進んで来た時、奥平はトックリの手を放し、同時に、いかにも偶然そうなったように、獲物のつま先を踏みつけた。トックリはつんのめってニコヨンの手に落ちた。その時、トックリから手を離したのは、奥平にとって幸運であった。トックリに手錠をかけようとしたニコヨンは、四方から伸びる手で、引き戻され、かきむしられ、一旦手に入れた獲物を手放さざるを得ない状態に陥っていた。八方から浴びせられる憎しみとさげすみの罵詈雑言に、ニコヨンは、なす術を失って悄然と立ちつくしていた。
「よう、アメリカのお巡りさん、アメリカから月給貰えよ」
「お前ら誰の税金で雇われているんだ」
「犬、犬、人殺し」
「それでも日本人か、お前は」
「どっちが悪いか、家に帰ってカアチャンによく聞いてみろ」
自衛隊警務官という奥平の職業が、この群衆の手によって露わにされていたら、と考えると、奥平は群衆の中でもまれながらホッとしていた。
「デモ隊は常に少数派である。少数派の集団でしかない。何故なら彼等少数派は、デモに参加しない圧倒的多数の国民大衆と対置されるべき存在だからである。自衛隊にとってこの少数派集団は適正集団である。なぜなら、デモに参加しない大多数の国民の利益を護る為に、自衛隊は存在するからである」

第一師団長の書いた文章を奥平は覚えている。
ニコヨンへの憎しみとさげすみは、また彼へ向かっても投げられる筈のものだ。何故なら奥平は、適正集団の真中に、たった一人で紛れ込んでいたのだから。彼の味方は、ゲートの彼方に、鉄条網に囲まれて静まりかえっていた。
奥平がその静かな領分に入れたのは、それから一時間近く経過してからだった。そしてそこで、彼は思いもかけないことを聞かされたのだった。「オノサワ」という日本人は三十分前に病院から逃亡した、と。
傷病状態や遺留品を見聞しながら、奥平は別の事を考えていた。早く「オノサワ」を追わねばならない、と。「オノサワ」を、日本の警察も、米軍のＭＰも、誰も追わないだろう。追わねばならぬ理由がないのだ。米軍病院から日本人が一人いなくなった。それだけのことだ。
日本の警察にも、米軍野戦病院にも、彼を引き止める権利は無い。にもかかわらず、いや、だからこそ、それが追わねばならない事態であることを、奥平は直感的に了承したのだ。
奥平誠が野戦病院のゲートを出ると、その敷地を一周しようと思ったのは、自分の立場をそのように考えたからだった。追う者は自分以外に無い、と。明日になれば「オノサワ」は、巨大なごみ箱である東京に溶け込んでしまう。今なら何かの手掛かりぐらいは発見できるかも知れない。
「オノサワ」は果たして小野沢正吾なのか。
もしも、小野沢正吾であるとしたら、なぜ、米軍の野戦病院に居るのか。隊員が正規の訓練中に傷病を起こしたのなら、自衛隊の中央病院に収容されていなければならない。米軍野戦病院に運び込まれるルートは全くない筈だ。
フラフラと一人でキャンプ地に迷い込んだとしても、米軍はその場で放り出すに違いない。どんな事情の下に、自衛隊員が米軍野戦病院に収容され、治療を受けたのか。奥平がそう考え始めたのは、歩き出してしばらくしてからだった。
＜自衛隊の米軍従属＞というデマコギーを、一般国民が信用したら、それは、デモ攻勢を激化させる原因にはなっても、決して下火にさせる材料にはならないだろう。
「我々は手不足で、逃亡した『オノサワ』を探し出しているひまはない」
と冷然と言い放つ米軍将校のことばに、奥平は憤りに近いものを覚えた。そんなに忙しいなら何故日本人を病院に入れたんだ。お前達はそれで良いだろうが、こっちはそんなのんきなことを言ってるわけにはいかないんだ。お前等がしっかり「オノサワ」を掴んでないから、面倒なことが起こりかけてるんだ。それがわからないのか、お前達は自分達さえよけりゃそれで良いのか・・・だが奥平は、黙ってゲートを出た。
抗議して何になる。相手は米軍なんだ、日本軍じゃないんだ。何よりも先に「オノサワ」を探し出すこと、そしてそれが小野沢正吉かどうかを確かめること、それが重要なのだ。
右手にぶら下げたオノサワの水筒で、ベルトの止め金を軽く叩いて、コツコツとゆるい調子を取りながら、奥平はキャンプの外周を回り始めた。ゲートの前は商店が立ち並んでいるので人通りも激しかった。

だが、ゲートを外れるとすぐに住宅街が立ち並び、急に街路がひっそりとしてくる。時たま通る車のライトが、キャンプの柵にそって歩く奥平を照らし出す程度で、人通りは殆ど絶えていた。
奥平は一、二度柵に近寄って地面を調べようとした。何も見えなかった。月の光では、地表の痕跡を見つけ出す助けにはならない。遠いキャンプの灯や、暗い上に逆光である街路灯は、月の光よりもなお役に立たなかった。
しかし、奥平は歩き続けた。
「ゲートからの連絡では、『オノサワ』らしい人物は通過していない」
と、米軍将校は言ったのだ。
それが事実だとすれば、「オノサワ」は、この果てしもなく続く柵のどこからか抜け出したのだ。
柵は貧弱だった。外から忍び込んで盗るべき物もないし、中からの脱走を警戒する必要もない場所であることを、何よりもこの貧弱な柵が証明していた。鉄条網はまばらに張ってあるだけで、支柱の傾いているものも珍しくなかった。
奥平は、歩くことに疲れを覚え始めた。今見た所から「オノサワ」が逃げたかもしれない、あっ、ここからも簡単に抜け出せる、などと心を砕きながら歩くことは、銃器を背負っての行軍よりも、はるかに苦しい行軍だった。彼の歩みは、ただ失望を踏み固めるためのものにしか思われない。不安と焦りがくるぶしに重くからみついた。
それを踏み砕くようにして、彼は足を前へ前へと進めた。柵へ近寄ろうともせず、暗い地面をすかして見ようともせず、彼はただ前へ前へと歩を早めた。ごくまれに、通行人とすれ違う時、それが男だと彼は歩みの速度をおとして、その男の顔をそれとなく観察した。
　彼は、今や「オノサワ」脱出の痕跡ではなく、「オノサワ」その人を探しているのだった。「右側面の火傷及び精神分裂」という米軍の報告だけを頼りに、痕跡の発見よりも、さらに絶望的な当人の発見にとりかかっていた。

彼は思い出していた。あのヨンパチ行軍の時、四十キロの荷をかついで、八十キロの距離を行軍した時、二十五キロの所で落伍した俺に、隊友はあからさまな羨望のまなざしを送った。
「うまくやったな」
と口に出して言う奴もいた。捻挫した足で四十キロを背負っての行軍、もう二度とそんな機会は来ないに違いない。もう少し行軍したかったが、俺は自分で落伍を申し出た。捻挫してから三キロ余り持ちこたえたんだ。そしてもう、四十キロの荷を背負っては、足のふんばりが利かなくなったからだ。足を見た軍医に、
「もっと早く申し出なきゃいかん。骨折する所だったぞ」
と言われた時、俺は嬉しかった。あれなんだ、あれが生き甲斐ってもんなんだ、俺の・・・・。

中島は大きくハンドルを回して、帰り路からはずれた。彼は田代の家へこの男を預けようと思った。田代久夫は、医大時代の彼の同級生だった。田代精神病院の後継ぎである久夫と、彼は学生時代かなり親しくしていた。久夫の家へも何回か遊びに行って、両親とも顔なじみだった。事情を話してこの男を収容して貰おう。
それにしてもこのお客さん、竹の棒で俺の頭をなぐりゃしないだろうか・・・やけどらしいな、右の頬のガーゼは・・・おとなしくしてくれよな、変にあばれ出したら、二人共おだぶつだぜ。おっと、床に突っ伏して頭をかかえ込んだな・・・当分そうやってくれていると有難いんだが・・・うむと・・・やれやれ追突する所だったぜ・・・冷汗が出るよ。・・・それにしてもこのお客さん、どこの病院から抜け出して来たんだろう。まさか家庭療養じゃないだろうなあ・・・拾ったのが野戦病院の辺りだから、あの近くの大きな病院というと・・・Ｋ病院か・・・しかし・・・かなりあるぜ・・・人に見つからないであそこまで来られるなんて・・・それにしても、Ｋ病院の近くじゃ警察の検問もなかったなあ・・・車に乗ってるとは思わないかも知れんなあ・・・。このまま警察署の前に横づけした方が手っ取り早いんだがどうもまだ・・・顔の赤いのが醒めきってないようだ・・・酔っぱらい運転で油をしぼられるのはもう御免だからなあ・・・それに警察で立会人だ届出人だってごたごた書かされるだろうし・・・俺が医者だとわかったら・・・引取手が来るまで面倒見てくれと言うかも知れないし・・・そうだ、凶暴性のある患者なら、もう脱走のニュースが流れているかも知れない・・・ラジオを入れるか・・。

グッと固い物を背中に押しあてられ、中島は、カーラジオのスイッチから思わず手を離した。
「電波を敵にキャッチされるぞ・・・逃げるんだ・・・もっとスピード出して」
竹の棒だとわかっていれも、それがいつ頭のてっぺんに振り下ろされるかわからないので、中島は一旦停車して脅迫者に頼んだ。
「危ないから、そいつを捨ててくれよ」
「逃げるんだ・・・敵はすぐ後ろまで迫っているんだ・・・早く車を出せ」

奥平は、背後の軽いクラクションの音に振り返った。プゥッと一度だけの音だったが、周りの静かなこの辺りでは、なにげなく人を振り向かせる位の効果はあった。
今しがた奥平の姿を正面から照らし出して走り去った乗用車が、二十メートル程度で停車していた。胸が痛くなるほど、彼の心臓は強く波を打った。男だ。車のライトを浴びて、片手に竹の棒を握り、自動車の前に両手を挙げて立ちふさがっていた。右の頬から、上半分がはがれた白布がぶらさがっている。

「オノサワ」だ。
奥平は走り出そうとし、反射的に街路灯の柱に身を隠した。停った車から男が下りて来て、妨害者に話しかけるのを見たからだった。妨害者は一言二言叫んで、頭から車の中へ這い込んだ。車は妨害者を乗せたまま走り出した。車の後を追って走った奥平は、辛うじてナンバーを（品川・に・１７８２）と読み取ることができた。奥平はタクシーを待った。
だが、タクシーはついに来なかった。尾灯の赤い星がふっと消え、その闇の中に生じた穴を埋める用に、果たして今の男は「オノサワ」なのだろうか、という小さな疑念が湧いた。いや、九分九厘間違いない。彼は、その疑念を強く拒絶した。だが、キャンプ周囲を一周すべく、彼の足は前へ前へと歩み始めていた。あれが 「オノサワ」なら、明日、車の持主を調べればすぐわかることだ。あれが「オノサワ」でなかった万一の場合を考えて、一周りしておこう。

中島満は酔う程飲んではいなかった。が、病院の帰り際に、コップに二杯ほどのビールを飲んでいなかったら、突然車の前に現れた酔漢を、たやすく同乗させるような、軽率な真似はしなかったかも知れない。
「助けてくれ・・・俺は殺される・・・」と男が叫んだ時、男の片頬の白い布が目に映った。
「よし・・・乗れよ、逃してやらあ」
と気軽に乗せたのだが、乗せた相手の精神状態が異常であることに、すぐに気がついた。中島は医者だった。正直に言えば、無給医局員だった。
「司令部へ行ってくれ・・・アメリカのじゃないぞ・・・日本のだ。・・・おい、危ない、敵だ・・・気をつけろ」
リアシートでは、男が、絶え間なくしゃべり続けた。そして、手に持った竹の棒を座席の背に構えて射撃の姿勢をとり、対向車に狙いをつけては、パン、バスーンと口で発射するのだった。
よほど興奮しているとみえ、中島が話しかけても、返事をしない。この分では、入院患者に違いない。病院関係者が家族に引き渡すまで、一時どこかに収容しなくてはなるまい。このまま降ろして捨てていくわけにはいかない。どこかの病院に収容した上で、警察にでも連絡しないと、本人はもちろん他人にまで迷惑を及ぼすだろう。現にこの俺がもう迷惑しているんだから。
「わかったから、そいつを引っ込めてくれよ、・・・そうしないと敵に追いつかれちゃうぞ」
「ああ・・・銃は大事だからな」
脅迫者は何を思ったのか、彼の大切な銃を胸に横抱きにすると、仰向けに座席に倒れこみ、トロンとした目を車のあちこちに走らせた。
「困っちゃったなあ」

中島がハンドルにのせたあごを左右に振って田代の家に行こうか、警察を探そうか、それともどこかの病院に渡すか迷っていると、
「日本へはいつ帰れるんだ、俺達」
沈みきったお客さんの声がした。
中島の身体は一瞬こわばった。この男の狂いの原因について、田代の意見を聞きたいと、ふと思った。精神科のある病院をあてもなく探すより、田代の家へ行った方が、確実に早い距離でもあった。
田代は中島から事情を聞くと、すぐに患者の観察にかかった。
「君、名前は・・・なんていうの」
「・・・・・・・・」
聞かれた方は、あらぬ方を眺めたまま、田代の声が耳に入らない様子である。
「年は・・・いくつです・・・君の年・・・さあ」
「・・・年？」
田代は物おじにしない。患者を握りとっている。それは開業医としての生活で身につけたものに違いない。開業医の相手は、要するに客であり、大学病院の相手は、病気であり患部だ。
「舌をえーっと出してごらん・・・舌を・・・・」
と患者に自らの舌を出してみせる田代。俺だってそんなことはするさ。が、どっか違う。
同じ医者のやることだ。大して違いはないのにどこか根本的な所で、田代と俺とは違っている。俺が医局に残り、田代が開業医になった、その違いかもしれない。
「今のところ落ち着いているようだなあ・・・しかしかなりひどいぼけ方をしてるぜ・・・」
何を聞いてもはっきりしないので、問診を切り上げた田代は、中島の方に向き直った。
「誰かに追われているってんで、えらい勢いで俺の車に逃げ込んだがな・・・」
「うーん、よくある奴だよ・・・誰かに殺されそうだとかさ・・・食物に毒が入っているとかね・・・こないだなんざあ、たった二歳の娘が自分ののどを噛切ると思い込んでる親が来たがねえ」
「どうだいここへ預かって貰えるかい。親父さんは・・・」
「親父は関西の学会へ出かけているんだ。・・・預かるのはいいけど・・・君が身元引受人になるかい・・・なに、一時の事だけどさ・・・」
「なるよ・・・ただね、俺は、その男が鉄砲構える真似をしたり、ロケットだとか、爆発だとか・・・そんなことばっかり車ん中で言い通しなのが気になるんだが・・・」
「この頃は割りと多いんだ。その手のが・・・テレビの影響なんだろうねえ・・・戦争ものと、それにプロレスだねえ・・・家の看護婦が一人、こないだ患者に逆エビ固めを食いそうになって、えらい騒ぎだったよ」
ホッとすると同時に中島は気抜けした。この男をここまで運んで来たのは、もちろん医者としての義務からだが、何か特殊な事情の下に精神異常を来した男かも知れないという期待も陰で強く働いていないとは言えなかった。ニュースでも、精神異常者の逃亡を知らせるものはなかった。

「明日にでも、君から警察に知らせといてくれ。見つけた場所や時間なんか聞かれるだろうから」
しきりに泊まって行けと勧める田代に、下宿で女が待ってるからと断って、帰途に着いた中島は、ホッと溜息をついた。俺は飲むと、どうしてこうオッチョコチョイになるんだろう。下らん気ちがいにつき合わされたあげく、身元引受人なんぞになって・・・みろ、同級の田代はもう一人前の医者面をしているじゃないか・・・しかしあいつと一杯やりたかったなあ、車さえなけりゃ・・・左江子が来てなきゃなあ、ついてない、ついてない・・・。
　通り慣れぬ裏通りは暗く、幹線道路への道がなかなかわからなかった。帰りがけに田代に近道を聞いたのがどこかで一、二本道を間違えたらしい。えい、この道でも走ってるうちにゃどこかに出るだろう。まったく、穴ぼこだらけのひどい道路だ、街路灯さえ満足についてない。
左江子の奴、帰っちゃえば良いのに、ちゃんと粘ってやがる。
「また、どっかで飲んでるの、早く帰ってきてよ、管理人の小母さんとこでテレビ見せて貰ってるから」
まったく、あの女ときたら、図太いっていうか・・・、世間知らずっていうか・・・また、管理人のババアがスケベったらしい目で俺を見て、中島さん、そろそろ結婚しなさいよ、いい娘さんじゃないの、なんて言いやがるだろう。結局、左江子と結婚なんて、笑わせるな。あんなにアレの好きな女と結婚なんかできるもんか。
「今日、デモに行っちゃってさあ、ううん、あたしは三派じゃないわよ、でも友達にね、三派のファンがいて、一緒に行こうって言うからさ・・・石ぶつけてやったわよ、スカッとしちゃった。一寸こわくなったから途中で逃げちゃったけどさ・・・」
あいつもオッチョコチョイだ、何も電話でそんなこと言わなくたっていいのに、あしたあたり管理人のババアが、中島さん、あんた三派全学連なの、なんて聞くにきまってるぜ、おせっかいババアめ。
デモ・・・そういや、　あのあたりか、あの患者を拾ったのは、たしかキャンプの辺りだ。ふん、デモなんて・・・・何度やったって同じことさ。・・・こっちが泣こうと喚こうとやるだけのことはやられちゃうさ。ぎゅっと押さえ込んで、メスで切り、膿をかき出し、引っぱって縫い合わせ・・・日がたちゃあ病人の方でもそんな苦痛は忘れちゃうんだ・・・外科手術みたいなもんさ。左江子がデモに・・・笑わせるよ、まったく・・・。
左江子は腫れた右足を、水で冷やしていた。
「妙なポリ公に会っちゃってさあ」
首をすくめて舌を出す左江子に、満は、
「真っ赤なミニなんてはいてやがるから、ポリさんだって頭に来るんだよ」
「そんなんじゃないんだ・・・あたし・・・」
「なんだい・・・妙に神妙じゃねえか、サア公らしくないぜ」
「うん・・・ミツ坊医者なんだから、早く正式の手当をしてよ」
と左江子は急にはしゃいで形の良い右足を前に投げ出した。

「おあいにく、大根を扱うのは八百屋だよ、医者の仕事じゃありません」
「そうね」
と左江子はおとなしく足を引っ込めた。
「何だい・・・どうかしたのかい。そんな傷はほっといても直るよ。心配すんな」
「うん。・・・これ、ポリ公にけっ飛ばされたんだ」
「わかってるよ」
「そのポリ公・・・あたしの高校の同級生だったんだ」
「へえ、同級生、・・・向こうは気がついたのか」
「うん」
「わかってけったのかい。・・・ひでえ奴だなあ」
「あたしが石を投げたらすっ飛んで来てね、それまでは全然わからなかった、そばに来たら佐藤君なんだ」
「佐藤ってのがそのポリ公か」
「うん」
「それで・・・・」
「あたし、びっくりしちゃった。高校ん時、よくラブレターくれたのよ」
「その佐藤って奴がか」
「そうーそいで、あたしの顔見て、突っ立っちゃってさあ、目えまんまるくしてんの・・・あたし、警官なんかやめちゃいなさいよって怒鳴ってやった」
「へへっ、サア公が・・・びっくりしたろう佐藤ウジは」
「真赤になっちゃって・・・・泣きそうな顔してさあ、あたしの肩をつかんで、ヤメテクレって小さい声で言うの・・・そいで肩をゆするもんだから、三派の男の子がゲバ棒でガツンと鉄帽を叩いて、・・・その時よ、あたしを離してその子を捕まえようとしたのね、大きな靴で正面からけっとばされちゃった」
と、傷の上を撫でていた左江子は、
「あたし、今晩は下宿に帰ろうかなあ」
ポツンと言った。
「どうして・・・もう遅いぜ、泊まってけよ」
満の身体は先刻から左江子を求めていた。
「そのつもりで来たんだけど・・・」
「サア公、そのポリ公が好きなんだろう」
「ミツ坊、さては、やいてんな」
左江子は遠慮のない声で笑った。だからこの女は嫌いなんだ、と満は舌打ちをしたかった。
「高校の時はそんなに好きじゃなかった。でも、なんだか悪い事をしたみたいで、嫌あな気分なんだ、あの泣きそうな顔思い出すと」
「気にすんな、向こうだって今頃、悪いことしたって後悔してるさ」
「そうかなあ」

「だからさ、早く寝ようぜ」
と手をスカートの中へすべり込ませる。
「エッチ。だからお医者って嫌い」
と言いながらも、左江子はスカートのホックを外しにかかる。結局はこの女と結婚することになるのかも知れないなあ、と思いつつ、満は左江子の裸身を引き寄せた。

十分もすれば外来診察が始まる、忙しい時間だった。
「中島先生、この方が御面会です」
と看護婦が渡した名刺に、自衛隊警務官 奥平誠とあるのを見て、満は首をかしげた。
「何のようだって？」
「直接お会いしてお話したいそうです」
「弱っちゃうな、忙しいのに・・・じゃ、一寸会うか」
と扉を開くと目の前に、肩幅のガッシリした、色の黒い男が立っていた。
「奥平です。一寸二人だけでお話したいことがあるのですが、どこか適当な所は無いですか」
満は病院の前のコーヒー店に奥平を誘った。
「早速ですが・・・」
向き合って腰を降ろすとすぐに、奥平が身体を乗り出した。
「あなたの車のナンバーは確か・・・」
「品川・に・７１８２ですが、それが何か・・・」
奥平はホッとしたように、厚い唇の端に笑いを浮かべた。
「それじゃ昨夜、あなたは車で野戦病院の傍を通られましたね」
「それがどうかしましたか」
満はムッとした。
「僕はこれから忙しいんですよ。お話は簡単に願えませんか。・・・何か、僕の車が人でも引っかけたって言うんですか」
「とんでもない」
と奥平は手を振った。
「とんでもありません。・・・実は、野戦病院から・・・いや野戦病院の辺りで、あなたの車に乗った男がいたでしょう」
「ああ、あの人ね。自衛隊の人なんですか、丁度よかった、どうしようかと思ってましてね・・・しかし、僕が拾ったって良く判りましたね、見てたんですか」
奥平はそれには答えなかった。奥平の無言は、満の中に疑念を生じさせた。
＜見てたのかこいつは、何故＞
「事情があって、ある人を探しているのですが、昨夜の人がその人ではないかと思いまして・・・」
「人を探しているんですね・・・しかしあの人は精神分裂症らしいですよ、御承知でしょうけど、あんな人を外に出しちゃいけませんね」

「はあ、申しわけありません」
「で、あの人を引き取って下さるんですね。どこの病院です、自衛隊だと三宿の中央病院ですか、病室の管理をもっとしっかりしなくちゃね」
「はあ。・・・あの、私共の探している者かどうか確認してから、引取らせて頂きたいんですが・・・・」
「結構ですよ、お会いになった上で確認して下さい」
「まことにどうも、お手数をおかけして相すいません」
奥平は腰を掛けたまま、棒を折るように会釈をした。
「じゃあ、あの人を預けた病院の方へ連絡しときましょう。それからと・・・ついでにあの患者の名前と・・・収容していた病院を教えて頂きましょうか。向こうの記録に必要でしょうから」
満はメモ用紙を取り出して奥平の前に置いた。しかし、奥平は手を出そうとしなかった。
「さあ、この紙にお願いします」
と指で押しやると、
「申しわけありません。名前は申し上げたくないんですが・・・」
かすかに頭を下げた。後で調べられるような手がかりを残すな、と厳重な注意を今井から受けている奥平は、小野沢という名前も、その他の偽名も使うわけにはいかなかった。奥平という自分の名前が相手にわかっている以上、小野沢だけを偽名で連れ出しても無駄だった。相手がこちらの要求を受け入れてくれるのをひたすら待つしか方法が無い。
「言えないとおっしゃるんですか・・・」
疑惑とも当惑ともつかぬあいまいな情念が、満の脳をひっきりなしに通過した。
「はあ」
「困ったな・・・と何か、身体に特徴がありますか、あなたが探している人に」
「右ほほに小豆大のほくろがある筈です」
「他には・・・」
「この写真ですが・・・」
「駄目ですよ、これじゃあ・・・あの人は顔にかなりやけどがあるんです。特に右側がひどい。ほくろなんか消えちゃっているでしょうし、人相も変わっている筈です。大体似てないですよ、この写真に。・・・別人だな」
「当人に会って確かめたいのですが・・・」
「何を確かめるんですか、・・・名前なんか言いやしないですよ。昨日の晩二人がかりでずい分聞いたのに言わないんだから」
「そうですか、言いませんでしたか」
奥平の顔にわずかな安堵の色が流れた。
「それで、二人とおっしゃると」
「田代って僕の友人の精神科の医者ですがね」
「田代・・・田代なんとおっしゃる方ですか」

奥平は万年筆を取り出してメモ用紙に記入する構えを見せた。
「困るな・・・患者の名前も、あなたとの関係もわからないし、・・・たとえ、当人だとあなたがおっしゃっても、田代はあの人をあなたに渡さないだろうな、・・・あの人隊員なんですか本当に・・・」
「それはちょっと何とも申し上げられません」
奥平はすでに観念していた。命令を守る限り、小野沢を自分の手で引取ることは、おそらく不可能に違いない。この若い医者の言うことに理がある。どこの誰と判明しない患者を、そのまま引き渡すことは、自分が医者でもできかねるだろう。 だがせめて、あいつが小野沢かどうか、いやどこにいるのか、それを突き止めなくてはなるまい。
「あの・・・どこの病院にいるのか、それだけでも教えて頂けませんか」
「無駄でしょうね、お教えしても。それに僕がお断りします。別に官僚主義で言うんじゃないけど、僕はあの人の身元引受人になっているんです。後で面倒なことになると嫌だから。患者の身元を証明するようなものを持ってもう一度いらして頂けませんか、医者としても、身元引受人としても、その位の責任はありますからね。僕仕事がありますから、失礼します」
ぬるくなったコーヒーをガブガブと一息に飲むと、満は
「おい、勘定」
とウェイトレスを呼んだ。
「いや、私に払わせてください。私の用で来て頂いたのですから」
奥平は穏やかに、満の手から伝票を取ろうとした。
「じゃ、割り勘にしましょう・・・あなたの役には立てなかったようだから」
奥平は強いて自分が払うとは言い張れなかった。
「自衛隊におごって貰いたくないんだよ。それよかムダ弾でも撃たないように、せいぜい税金を使ってよ」
と嫌味たっぷりに言われたのは蒸発した一士の友人、十八、九の工員を訪問した時だった。
奥平は大またに出て行く若い医者の後姿を見送りながら、ゆっくりコーヒーを飲んだ。砂糖を入れ忘れたコーヒーは、冷え切って、舌一ぱいに苦味が広がった。
「田代・・・か」
口の中で「田代」とつぶやいてから、彼は店の電話帳を借りて、医師の欄を探し始めた。
昼頃、田代精神病院の電話が鳴った。
「俺だ、中島だよ。昨日の患者どうだい」
「どうって・・・相変わらずだ。お前の方で何かわかったかい」
「その事なんだがなあ・・・変な奴が来てなあ」
「変なやつ・・・」
「自衛隊の警務官とかって奴でね。俺が昨日あの患者を拾ったこと知ってんだよ」
「そうか、それで自衛隊の隊員なのか」
「それがどうもはっきりしないんだ、名前もはっきり言わないし、・・・患者に会って探してる奴かどうか確かめたいって言ってるんだがね」

「ふうん、でも手がかりができてよかったじゃないか。元の所に戻してやれるからな・・・」
「うん・・・けど、その自衛隊の奴が本人だと言っても・・・誰がそれを証明するんだい。名前は言いたくないって言うし・・・」
「構わないじゃないか。渡した相手さえわかってりゃあ・・・とにかく、俺ん所でも、そう長いことは預かっていられないんだから・・・」
「それもそうだな・・・あんまり秘密めいたこと言うんで、そんなんじゃ渡せないって言ってやったんだが・・・」
「秘密めかした・・・軍隊なんてそんなもんだよ。特に自衛隊は世間の目がうるさいからな・・・えっ、何」
電話の向こうで誰かが話しかけたらしい。
「一寸待て・・・」
看護婦らしい女の声と田代の声とが入り混じって、電話口から小さく洩れて来る。
「もしもし」と再び田代の声が満を呼び出し、
「あのなあ、先刻、俺の回診中に変な電話があったってさあ。ああ、看護婦が受けたんだけどね、・・・昨日中島さんが付き添って入院した患者を引き取りたいって言ったそうだ。うん、看護婦が聞き返しても、中島さんが付き添って入院した患者としか言わなかったそうだよ」
「それで、どうしたんだ」
「うん、看護婦は君のことなんか知らないからね、患者の名前がわからなきゃ、返事しようがない、あなたの名前はって聞くと、電話を切っちゃったって言うんだ」
「あの自衛隊の奴に違いない」
「俺んとこだって教えたのかい」
「ああ、田代ってだけは教えたが、場所は言わなかったぜ」
「おかしいなあ、じゃなんで俺ん所に電話寄越したんだろ」
「うん・・・きっと、片っぱしから田代って精神病院に電話をかけたんじゃないか。東京だけに田代がいると決まっちゃいねえのにな」
「普通じゃないな」
「まったくだ、普通じゃないよ」
そのまま、田代も満も、しばらく互いの声を待った。
「どうしようか」
満は迷っていた。田代にとっては迷惑な患者になりそうだった。あの警務官に会わせて確かめさせようか。本人だと言ったら引き渡してしまえば、それで済んでしまうことだった。違うと言ったら、その時こそ、警察に連絡すれば良い。
「今晩、俺んとこに来ないか。もう一晩ぐらいは俺の病院に置いとけるから・・・一寸気になるものなあ。一緒に善後処置を考えようぜ。身元引受人なんだからな、お前は・・・」
「そうしよう。明日はと・・・非番だから今晩はゆっくり飲むか」
「お前は非番でも、開業医にゃ非番はないの。・・・けどまあ、いいだろ、付き合おう。お前と会うまでは、誰が来ても渡さないから・・・それでいいんだろ」

「オーケー」

２章 獲物の匂い

　「原本さん」
　議員会館の玄関を出ようとしたところで、進は呼び止められた。振り返ると、望田議員の秘書の土田浩二が急ぎ足に近づいて来るところだった。土田は、この二、三年来、望田祐介の秘書を務めていた。進とは、革新党議員の取材の時に何度か会って顔見知りになっていた。
　「うちのおやじ、何て言ってました？」
　「何って・・・・」
　「自衛隊の派兵の話だったでしょう」
　「なんだ、知ってたんですか。望田先生が秘密だ、秘密だって言うから、極秘事項かと思ってたんだが・・・」
　「議員のすることは、議員自身よりも秘書の方がよく知ってるんですよ。で、どうするんです、記事になりますか」
　「冗談じゃない。まだうわさというのも恥ずかしいようなもんですよ。あんなもの記事にしたら、うちの新聞の信用がいっぺんにゼロになっちゃう」
　土田浩二は一寸頭をひねった。二十七、八歳、中背だが、肉のない身体だ。眼鏡の奥でよく光る目が、何かを考えあぐねている。
　革新党議員望田祐介の話は、確かに意外なものだった。自衛隊がベトナムへ派兵されたらしい、しかも派兵された自衛隊は間もなく、全滅に等しい打撃を受けたようだ、という話の内容が真実なら、これは特ダネ中の特ダネに違いない。
　だが、それが真実である証拠は、何もないのだ。いや、望田祐介にしても、確とした証拠があれば、俺にそんな話を打ち明ける必要はない。国会質問の絶好の材料になるからだ。
　「君の方で、この事についての資料があれば、貸して欲しいんだが・・・・」
というのは、結局は、新聞社で調べてくれということなんだろう。
　大体望田の親父め、革新党議員のくせに葉巻なんぞふかしちゃて、感じが悪いったらない。
　「ハバナだよ、どうだい一本」だとさ。保守党の議員なら、吉田茂あたりのまねをするのも愛嬌ってもんだが。
　望田先生の選挙参謀を親父がやった因縁で俺の就職先を望田先生に世話して貰って、今度はそのお返しに、俺が望田先生の資料係になるってわけかい。地縁、血縁、金縁の支配する地方選挙ってのは、この間のうちの新聞の特集だったが、他人様をとやかく言える身分じゃないよ。
　しかし、話の出所が仮にも国会議員なんだから、もちろん、チーフにゃ知らせとかなくちゃ。
電話。まずい、土田のいる所じゃ。
　「原本さん・・・・いや・・・・」
土田が何か言いかけた。
　「何か？」
　「・・・・」
　「じゃ、失礼します。先生によろしくお伝え下さい」

進が車に乗り込むと、外から、
　「あの・・・・くわしいことはここじゃ言えないけれど・・・・自衛隊が行ったのは本当ですよ。望田先生に情報を提供したのは僕なんです」
と土田は早口に言い、くるりと背を向けて会館の中に入って行った。
　何を言いたかったんだろう。望田祐介の知らない何か確実な資料を、土田が持っているのだろうか、持っているかもしれない。土田はそれを持田議員に話してしまっただろうか。そんな筈はない。それなら望田は俺にあんなことを言う筈がない。では、土田は何を望田に話してあるのか、それが問題だ。
　しかし、どこまでが本気なのかなあ。望田の親父め、この間だってそうじゃないか。徴兵法の草案を保守党がまとめにかかっているらしいなんてヨタを飛ばしやがって。ＸＸとＯＯが中心で、メンバーは二十五人だなんて、数時まで並べてさ、こっちはソレとばかりに保守党の控室に雪崩れこんで取材しようとしたら、これがどうもつじつまが合わない。どうして、あんなすぐばれる嘘をつくんだろう。
　気になるな。気になる。望田の狸親父の言いぐさなら、適当に聞き流すんだが・・・・土田君だ。あの顔が気になるな。
　「・・・・本当ですよ。自衛隊が行ったのは本当ですよ」
か。やっぱり彼は何か知ってるなあ。本当だったら・・・・どえらい騒ぎになるぜ、こりゃあ。電話、電話と。
　「ちょっと、電話のありそうなとこで止めてよ」
　「えっ電話ですか。ちょっと前に煙草屋があったけど、バックするのは難しいなあ」
　ちぇっ、運転手まで俺をなめてやがる。そうだ、電話を探してるひまに、記者クラブに着いちゃうだろう。
　「じゃ、いいや。クラブへ行って」

　「ふうん、望田議員がねえ、そんなこと言ってたか。本当なら社会部の方で何かキャッチしてるだろう。聞いてみよう。あ、これからね、王子の野戦病院問題について防衛庁の記者会見がある。一寸聞いてきてくれよ。その間に社会部に問い合わせとくから」
　早口でまくし立てる野島礼二を見ていると、進はいつ富美子のことを切り出していいのか途方にくれてしまう。今度富美子に会えば、また「なにさ、まだパパに言ってないの。早く言ってよ。弱虫ねえ」となじられるに決まっている。
　切り出そうと思えば、いくらでもそのひまはあるのだが、進にはどうしても、「チーフ、お嬢さんと結婚したいんですが・・・・」と気軽に話してしまうことができない。取材結果の報告のように、何気なく言ってしまえばいい。何気なく自然に。
　そうは思ってみても、野島の顔を見ているうちに、富美子と自分が結婚するなどということが、とても現実のこととは思えなくなってしまうのだ。まあ、言おうと思えばいつだって言えるんだ、今じゃなくたって。
　そう思って、もう二月近くになった。しかし、今日も言い出せなかった。こんな柄の悪い人間の

集まっている所で切り出せる話じゃないんだ。いずれ機会を見つけて・・・・ああ、また今日も言い出せなかった。
防衛庁の見解は五分で終わった。例によって質疑応答がそれに続いた。
「・・・・伝染病患者は、米軍当局で厳重にチェックするわけですし、騒音問題、風紀問題にも出来る限りの努力を約束しておりますが、政府としては、米軍当局の誠意ある処置を重ねて要望したわけです。地元からの要望である、病院移転については、東京都との関係もありますが、今の所考慮致しておりません」

という次官の説明に、
　「明後日、大規模なデモが計画されておりますが、これについて次官はどうお考えですか」
という質問が出た。
　「三派全学連を中心としたデモが計画されていることは私共も承知しております。しかし米軍病院の問題は、外交上の問題でありまして、政府が安全保障条約の条項に従って米軍に提供しているものでありますから、問題があれば政府間の交渉によって解決を計るべきものであります。不法なデモによって日米間の友好関係に支障を来たすようなことがあれば、事は甚だ重大でありますので、そのようなことの無いよう、国民各位にお願い申し上げる次第であります」
　「次官、騒音問題や風紀問題について、米軍は具体的にどんな処置をとるとお考えですか」
　「えー、病院の周囲の学校や幼稚園に防音ガラスを張ってヘリコプター等の騒音を防ぐわけです」
　「それは立川の場合と同じで、ほとんど防音の役に立たないんじゃありませんか」
　「立川の場合は、ジェット機の発着が主ですが、王子の場合はヘリコプターですから、効果の点は期待できると思います」
　「もう病院の傍に、売春婦が出没しているという噂がありますが、米軍はどう処置するんですか」
　「そのような事実は私はまだ知りませんが、そういうことであれば米軍が善処するはずです」
　「もっと具体的に、どうするつもりか判りませんか」
　「何分、米軍のことですので、向こうがどうするつもりかそこまでは・・・・」
　例によって例の如く、さっとメモを取りながら進は苦笑いをする。次官ぐらいじゃ、放談食言の類を期待するのは無理とわかっていても、揚げ足を取られまい、言質を取られまいと、そればかり気を使いすぎて、こまかいこと、具体的なことは何一つはっきり言わない。しかし、防衛庁の見解発表は久しぶりだから、こんな記事でも、一段ぐらいにはなるだろう。
　部屋へ戻るなり野島が指の先で、小さくおいでおいでをして彼を呼んだ。
　「先刻の件ねえ、社会部の方で君の話をもっと聞きたいんだとさ。いや望田さんの情報についちゃ、社会部で何もキャッチしてないらしいんだ。しかし何かひっかかりがあることがあるらしい。電話じゃ何だから、直接部長に会って望田さんだとか、あの秘書のことなんか話してくれ。・・・・おっと、記者会見のメモはそこに置いとけよ。俺が原稿書くから・・・・」

　「ふーん、すると情報の出所はその土田って秘書なんだから、そこを攻めれば、ある程度のことはわかるってわけか。しかしなあ、相手は議員秘書だからなあ。・・・・なあ、どうだろう。君がだなあ、その土田って秘書にもう一度会ってだな、ニュースソースを叩いてみたら・・・・」
　社会部の部長は、進の話を半分も聞かないうちにそう言い出した。俺は、何故あの時、車のドアーを開けて土田を追わなかったか、と進も考えていたのだ。
　「おい」
デスクが声をかけると、待っていたように、一人の記者が近づいてきた。その男から受け取った封筒を、

「見ろよ、この投書」
と進に投げて寄越した。
「何ですか」

「うん、自衛隊員の恋人らしいんだが、大分前から恋人の居所がわからなくなったと言うんだ。まあ、読んで見給え」
投書は安っぽい便箋に鉛筆で書かれていた。一字一字力いっぱい鉛筆を紙に押しつけた跡が、字の所にくぼみを残している。幼稚な字で、たどたどしい文章だった。投書には次のように書かれていた。

前略
突然お手紙をさし上げてすいません。新聞社さんに書くなどは初めてで、いろいろ考えてみたけど、いい知恵もないので、やっぱし書きます。私とケンちゃんは婚約しました。去年の三月です。ケンちゃんは自衛隊に入隊したのです。私は「ミドリ」という洋装店の売子です。始めは中学の同窓会でケンちゃんと会ったのです。それからデートしました。週に一回ぐらいデートしました。二人でお金貯めて、お店を出して、結婚しようと約束しました。
私は洋裁店がいいと思ったけど、ケンちゃんはパーツ屋がいいのです。パーツ屋というのは自動車の部品屋のことです。ケンちゃんは毎月貯金のお金を送ってくれました。一万円のこともあり、一万二千円や、七千円だけのこともありました。でもきっと送ってきてくれました。
けれども、この七月からいきなり送らなくなりました。ケンちゃんに手紙で聞いても返事がないのです。それで習志野の自衛隊へわざわざ行って聞きましたが、山田健二（ケンちゃんの本名です）なんて隊員はいないと言われました。私はケンちゃんから来た手紙を見せて、ここから出した手紙じゃないのと言ってやりました。自衛隊の人は、調べてやると言ったまま、手紙を取り上げて、今になっても返してくれないのです。
私は自衛隊はだめだと思って、交番のおまわりさんに、ケンちゃんのことを調べてもらいました。でも、おまわりさんには、自衛隊のことはわからないのだそうです。私は困っているのです。
本当にケンちゃんはどうしたのでしょう。きっと私のことが嫌いになったのだと思います。ほかのきれいな女の人とデートしているのかも知れません。
それならそうと言ってくれれば私はあきらめるかも知れないのです。ほかの人が好きになったのならしかたがありません。テレビや週刊誌の女の人のようにギャアギャアバタバタあばれたりなどしたくありません。
でもケンちゃんのお金が七万円も貯金してあります。このお金をどうしたらいいのでしょう。ケンちゃんはどうしてお金を置いてったのでしょう。いしゃ料だと文子さんや冷子さんは言うけれど、私はいしゃ料などもらいたくないのです。
私だってその位の貯金は持っているし、それに、ケンちゃんがくれると言ったわけでははありません。それに、ケンちゃんのハンコがないのでおろせないのです。お金のことはどうでもいいけれど、私はケンちゃんがどうしているか知りたいのです。
どうして自衛隊ではケンちゃんのことを知らないと言うのでしょうか。ケンちゃんはちゃんとした隊員だったし、私にうそをつくような人ではありません。私にうそをつくような人が、七万円も置きっぱなしにするはずがないと思います。私はどうしたらいいのでしょう。どうかケンちゃんを探してください。本当に私は困っているのです。

かしこ

大曽根年子

東京ヘラルド新聞社様

進が読み終わるのを待ち構えていた部長が身体を乗り出した。
「どう・・・・読んだかい」
「いや、ひどい手紙ですねえ」
「なんのなんの、近頃まれにみる名文だよ。リアルじゃないの。・・・・ほらそこんとこ・・・・これこれ・・・・テレビや週刊誌の女の人のように、ギャアギャアバタバタあばれたりなど・・・・よう言ってくれはったってとこだよ」
「そう言えば妙に生まじめな所がありますね・・・・このお金をどうしたらいいのでしょう、なんて」
「そうなんだ、そこなんだ。気まぐれやいたずらじゃ、こうはいかないってとこがあるな。・・・・自衛隊員の蒸発は、ここ三年来、ずっと上昇しているんだ。ならしてもざっと年間三百から四百人が蒸発してる。そのうちの一人だろう、ケンちゃんもなあ。が、これが万一、万一だよ、望田さんの情報に関係があったとしたらどうなる」
「計画的な蒸発？」
「うん、ほれ自衛隊ではそんな隊員は知らんと言ったと書いてあったろう、気にかかるねえ」
デスクは大いに興味を刺激されたらしいが、しかし、俺としては、明日は非番なんだ。富美子とデートの約束してしまったし、社会部の取材につき合うのはできれば御免をこうむらせて戴きたいもんだ。
「調べるんですか」
「うん、一通りやってみる価値はありそうだ。この投書の主の所には支局からもう行かせたよ。習志野の自衛隊にも行かせてある。でなあ、君に土田って秘書にあたって貰いたいんだ。望月さんと君は面識があるんだから。何とかうまく行くだろうからな」
ああこれじゃ明日の非番もおじゃんだ、やれやれ・・・・チーフに了解とらなくちゃ。国会もひまなことだし、チーフは俺を社会部に時間貸しするにきまってるようなもんだが・・・・。
「おい、野島のおやじさんなら、俺から断っておこう」
と進の外した電話を、部長が取り上げた。別の電話で議員会館の土田に電話をかけた進は、
「もうお帰りになったようです。誰方も電話にお出になりません」
という交換手の声に思わずチェッと舌を鳴らした。今日中にひょっとしたら片が付くかも知れないという一縷の望みが、これで完全にちょん切れて・・・・待てよ、党本部に帰ったのかも知れない、きっとそうだ、よし、党本部へ・・・・
「もしもし、こちら東京ヘラルド新聞ですが、望月先生の秘書の土田さんをお願いします」
「はい、しばらくお待ち下さい」
電話が切り替えられる音がする。いるぞ、いるぞ、いつもなら「土田は議員会館の方へ出かけております」と言われるんだが、つないだ所をみるとまだ・・・・
「もしもし」
と電話の向こうで男の声がする。
「もしもし、土田さんをお願いしたいんですが・・・・」

「はい一寸お待ちを・・・・土田さあん・・・・えっ、帰っちゃった、帰っちゃったの・・・・もしもし、土田は今帰ったばかりのようです」
「そうですか・・・・あの、土田さんの御自宅の電話番号はわかりませんか」

「ええっと、土田さんとこは電話がないんです」
「そうですか、どうも・・・・デスク、革新党だけあって勤務時間は厳しく守っているようで、もう土田さん帰っちゃったようです」
部長はふんふんとあごでうなずきながら、何か別の事を考えているようすだったが、うん、とひとりでうなずくと、
「なあ、あした土田さんとこに行ったら、その足で警務隊本部へ行ってくれ。警務隊の本部だったと思ったが俺の大学の後輩で、張川って奴がそこで、一尉だか二尉だったか何かやってる筈だ。こいつの意見を叩いてみてくれ。それとなくだ。そうだ。自衛隊中堅の国防意識についての企画とか何とか言って奴の様子を見てくれ。もし奴が何か知ってれば、何か反応を示す筈だ。サッカーを一緒にやってたんだが、感がいいんだか悪いんだか、サインを出すか出さないうちに、決まって奴が一番早く止まりやがって、それで敵に作戦を見抜かれちゃうことが多くてなあ。トリックパスでも、関係のないあいつがまっ先にカバーで走るんで、コースを読まれちゃって・・・・まあそんな奴だった。何か知ってりゃ、とぼけることはできない奴だよ」
「一尉・・・・ですか」
そんな下級将校に当たった所で、国家機密レベルの資料が取れるとは思えなかった。
「うん、そんなとこだ。・・・・何だ、うかぬ顔してるじゃないか。・・・・まあ行ってみろよ、何かしっぽがあれば、一番上の方かさもなきゃ下の方からはみ出すものさ」
「明日議員会館の帰りに寄ってみます。張川さんですね」
デスクはかかってきた電話を耳にあてたまま、左手を一寸上げて合図したきり、電話にかかりきりになってしまった。
翌日の午前十時半、議員会館に行ってみると土田は留守だった。望田祐介が
「今までいたんだが、ちょっと用事ができて二時間ばかり外に出たよ、まあ茶でも飲んでいかんかね」
と小太りに肥えた身体でインスタント紅茶を淹れたのである。
出直すより仕方がない、進は車を議員会館から有楽町へ回そうと思った。十一時に富美子と逢う約束である。昨夜電話で断っておけば、今こうして、断りに行かなくてもよかったのだが、あれから、社会部の部長や他の四、五人と共に飲屋を五、六軒梯子をして、下宿に帰ったのが二時過ぎだったのである。
車が議員会館を出た所で、四つ角を折れる時、タクシー待ちをしているらしい土田の、細長い顔を発見して、進は思わぬ幸運を掴んだような気がした。
「やあ、土田さあん」
窓から首をつき出して呼びかけると、気がついた土田が
「やあ、昨日は」
と口の中でつぶやくように言った。
「どこまで行くんです。・・・よかったらお乗んなさい。お送りしますから。・・・今あなたに会いに行ったとこなんですよ」
「そうですか、・・・やっぱり昨日のことですか」

「そう・・・まあ乗んなさいよ、車ん中で話しましょう」

土田は
「済みませんね」
と言いながら、嬉しそうな顔も見せず、ペタリと骨の抜けた座り方で、進の隣へもたれこんだ。
「どちらへ」
「月島なんですが・・・いいんですか、本当に送って頂いて・・・」
「気にしない、気にしない・・・月島なら丁度良い、ちょっと有楽町で人に逢いますが、二、三分あれば話が済むんで、それからお送りします。良いでしょう」
「悪いなあ、どうも」
くたびれてケバの立った背広の袖口やテカテカと油染みている衿が、体格のよくない土田を、一層小さくみすぼらしいものに仕上げている。
「何だか元気がないようだけど・・・身体の工合でも悪いんじゃないんですか」
「いや・・・別に」
「そうですか」
さあどこからソースを叩くか、端的に、あの情報は誰に聞いたんですかとやるか、それとも遠まわしにジリジリとやるか、さて・・・。
「原本さん、実はですね・・・」
「へえっ」
進は意表をつかれた。相手に口を開かせることばかり考えて、相手から何か話しかけられようとは全く予期していなかった。
「実は僕、例の自衛隊の一件を教えてくれた人の所に行く所なんですよ」
土田は頭をシートにもたせかけ、天井の一点をにらんだまま言った。
「誰なんです。どういう人ですか、その人は」
「若い女性、僕の婚約者です」
「土田さんの」
一瞬、からかわれているのではないか、と進は土田の顔をうかがった。土田はにこりともせず、天井の一角に目を据えたままだ。一言一言考えながらことばを口にしている感じがする。
「いや、正確に言うと・・・僕の恋人の姉さんかな、情報の出所は・・・アメリカのパイロットと結婚しているんですよ」
「じゃあ、そのパイロットから・・・」
「そうなんです。日本のアーミーを乗せたというんだそうです。そのアメリカ人がね」
ピリリッと背筋を電流のようなものが走った。いやまだわからない、まだ信用できないぞ、と抑えるのだが、こいつは本物かも知れん、本当臭いという気の方が強く頭を持ち上げてくる。
「ちょっと・・・そこの所を左に行って・・・来てるかなあ・・・一寸止めて」
待ち合わせの喫茶店へ行ってみると、富美子が奥の方から手を振った。腰を降ろすなり進は言った。
「仕事だよ、社会部の援軍を仰せつかっちゃった。車で前まで来たんだ。断りに寄ったんだよ。御免、どうする、一人で映画でも見てくか、それとも家へ送ってこうか」

そして注文を待っているウェイトレスに、

「いいんだよ、すぐ出るから、何もいらない」
と断り、そのついでに盆の上のコップをつかんで、ガブガブと水を飲みほし、「御馳走さん」と盆に返すと、ウェイトレスは呆れ顔をして、進の顔を眺めた。
「急ぐ仕事らしいわねえ。とにかく出ましょう」
「仕事」に関しては、富美子はあきらめが早いというか、あっさりききわけてしまう所がある。進はホッとする一方で、どこか物足りないなあ、といつも感じる。
「うちのチーフのお嬢さんです」
と土田を紹介して、進は車を月島へ向けるように指示した。
「ねえ、土田さん、さっきの話の・・・あなたの恋人のお姉さんは、これから行く所にいるんですか」
「さあ・・・一寸わかりません。御主人の勤務と関係があるらしくて、いることもあれば、いないこともあるんです」
「会わせて頂けませんかねえ、その方と・・・」
「いれば多分会えるでしょう・・・・どの程度彼女が知っているかは別問題ですが・・・」
このまま車で送っていけば、その女性に会えるかもしれない。で、会えなければどうする。
「土田さん、その女性は、お姉さんの方ね、普段はどこに住んでらっしゃるんですか」
「ええ、何でも八王子近辺のマンションにいるって聞きましたがね」
八王子か。一応デスクに連絡をとって・・・しかし、八王子に行くことになると、相手はその女ではなくて、アメリカ人ということになるな。苦手だなあ。それに、どこまでアメリカ人が話してくれるか疑問だ。疑問だぞこれは。
しかし、こんなにはっきりした情報の出所を知っている秘書の土田がいて、望田祐介が何故俺に調査の依頼じみたことを言うのだ。そこなんだ、昨日からひっかかっているのは。
「ねえ土田さん、妙なことを聞くようだが、望田先生は、これからあなたの訪ねる先を知ってるんですか」
土田は反射的に進の方に首を向けたが、すぐにまた天井を仰いでしまった。指で細かく自分の膝頭を叩いているのは、無意識の動作のようだった。
車は銀座四丁目の交差点を過ぎたあたりで前がつまり、ノロノロ運転している。
「原本さん、望田先生は、今大変な苦境に立たされているんですよ。次の選挙では党の公認候補を降ろされそうなんです」
土田は進の質問には、およそ関係のないことを話し出した。
「そんな話を聞いたことがありますよ。でも地方支部では望田先生の支持勢力がかなり強いんでしょう。ささくれだった掌で選挙事務所の看板を書いていた父親の姿を、進は思い浮かべた。
「今の所はね、しかし他派からの切り崩しが激しくて、選挙までにどう変わるか分かったものじゃない」
「それで」
「つまり、望田先生としては国会活動を通して、党内の地位を動かぬものにしなけりゃならないんです。自衛隊の問題で政府保守党に打撃を与えれば、先生の名前がクローズアップされて、党

としても簡単に先生を降ろすわけには行かなくなるでしょう」
「そりゃあそうでしょうね・・・だから土田さん、あなたが一生懸命望田先生の国会質問の材料を揃えているってわけでしょう」

「まあそうですが・・・しかし・・・今度の情報の出所は、先生には話してないんです」
築地に入ったあたりで、車はギッシリと詰まり、先へ進めまくなった。
「勝鬨橋が開いているわよ、珍しいわね」
と富美子がフロントグラスをすかして前の方を見た。
「何だって今頃開くんだろうね、この忙しい時間に」
運転手は握り拳で軽くハンドルを打ち、はずみでクラクションが軽く鳴った。中空にはね上がった、鉄とコンクリートの巨大な塊が、今にもゆれ出しそうな不安定な姿勢で、頭の上にのしかかってくる。
「僕は今度の問題を望田先生の口から国民全部に明らかにして頂きたいと思っているんです。けれど、望田先生にそれが出来るかどうかが問題なんですよ」
「というと、土田さんは出来ない、と思っているんですか」
土田はそれには答えず眼鏡を外してハンカチで何回もレンズをこすった。しばらくして土田がひとり言のように言った。
「例え望田先生には出来なくても、何とかして国民の前に明らかにしなくてはならない問題だと、僕は思っているんです」
「何故、望田先生に出来ないとお思いになるんですか」
「それは」
その時車が動き出した。運転手が後ろを向いて、
「佃大橋の方を回ります。これじゃ橋が閉じても、一寸やそっとじゃ通れそうもありませんからね」
と断った。前を行く車も次々に左に曲がって佃や永代へ出ようとしていた。
「原本さん、冷子さん・・・彼女の名前ですが・・・冷子さんに会ってくれませんか」
「姉さんの方ですか」
「いや、妹の方です。姉さんは照子と言うんです」
「僕は・・・できれば姉さんの照子さんの方にもお会いしたいなあ」
築地から佃大橋を渡り目的地に着く迄に二十分近くかかった。
裏通りに車を止めて、土田と進は冷子の家へ向かった。富美子はその辺を散歩して来るわと言って、すぐ傍に見える橋の方へ歩いて行った。冷子の家は小さい路地の奥の二階家だった。標札には富沢と姓だけが書いてあった。
土田の声を聞き慣れているらしく、
「あら土田さあん、いらっしゃあい」
と奥から声がして声の後から小走りに出て来た冷子は、土田と並んだ進に気がつくと、顔中にこぼれていた笑いを、表情の奥に、すっと引き戻した。
プリント模様のスカートの上の白いエプロンで手を拭うところを見ると、勝手仕事をしていたらしい。髪に被っていたスカーフを取って、土田の紹介にあいさつする冷子を見て、進は、なかなか家庭的な娘らしいなと思った。
「お母さんは？」

と聞く土田に
　「ちょっと魚河岸までまで買物に行ったの・・・さあお上がりなさいな・・・原本さんも一緒に」
冷子はいかにも楽しげに勧めた。

「いや、今日はそうしちゃあいられないんだけど・・・じゃあちょっとね」
「本当にゆっくりしてらっしゃいよ。うんと御馳走するわよ」
軽口のように言いながら、冷子の目はひたむきな光を隠してはいなかった。
「駄目なんだよ、・・・仕事が忙しくて」
「そう・・・あんまり無理を言ってもいけないわね」
「照子さんはこの頃こっちに来ないの」
「あら、姉さんなら一昨日まで来てたのよ、どうして？」
「いや、この間話してた、ほら、ウィンドルさんが運んだ自衛隊のこと・・・何か言ってなかったかい」
「そうねえ・・・何も言ってなかったみたい。・・・ウィンドルさんて何でも照子姉さんに話しちゃうらしいわ。それをまた姉さんが家に来てあたし達にみんな話さないと気がすまないんですもの」
冷子はいかにもおかしそうに笑った。ウィンドル、という名前を、進は口の中で呟いた。ウィンドル、ウィンドル、忘れるなよ。
「ああ、そうだ」
と冷子が急に何かを思い出したらしかった。
「あのね、ウィンドルさんじゃなくて、他のパイロットの方らしいけど、ベトナムから日本の負傷兵を運んだ人がいるんですって。ウィンドルさん達の運んだ自衛隊はほとんど全滅したらしいけど・・・一人とか二人とか重傷を負って日本へ送られて来た人がいるんですって。米軍の兵隊と一緒に病院車に乗せて運んだんですって・・・いやあねえ、よその国に出かけて行って戦争をしたりけがをしたりなんて・・・」
土田は黙って何度もうなずいている。進は思わず見をのり出した。
「あのちょっと失礼ですが・・・・その自衛隊の負傷兵を運んだって話は、いつ頃のことですか、最近のことですか」
土田が身体をわずかに横にずらして、進と冷子が話しやすいように場所をあけた。突然進に話しかけられて、冷子は固くなった。
「はい、二、三日前にウィンドルさん、姉の夫なんですが・・・その人が話してたんです。さきおとといですわ、姉夫婦は一晩泊まってったんだから」
「さきおとといの飛行機で、自衛隊の負傷兵が日本に帰った、とそういうことになりますか。それとも、そういう話がさきおとと出て、隊員はもっとずっと前に帰っていたとか、そんなことは分かりませんか」
「さあ」
冷子は、土田の顔をうかがった。どこまで話していいのかしらと、その顔は土田に問いかけていた。
「どうなんだい、その点は・・・原本さんもその事を新聞記者として調べてるんだ。それで実は、今日ご一緒したんだよ」
「そう」

冷子の固い表情が少し解けた。
「ウィンドルさんさきおとといらした時は、一緒に飛んで来た友達の飛行機に日本の兵隊が乗っていたって話してたんです」
「一緒に飛んで来たって、確かにそう言ったんですね」
「ええ」
「お姉さんからのまた聞きじゃなく、ですか」
「原本さん」
「冷子さんは英語はペラペラですよ。外国資本の商社に勤めているんです。ウィンドルさんはこの家に来ると、冷子さんとばかり話しているんですよ」

冷子が嫌だわ、と小さく言ってうつむき、耳たぶをあかくほてらせているのが、進にはむしろ奇異なものに映った。変なことを恥ずかしがる娘もいるもんだ。
「ウィンドルさんて、アメリカの軍人でしょう」
「いや」
と答えたのは土田だった。
「彼は軍人じゃなくて、民間航空のパイロットですよ。米軍のチャーター機専門に操縦しているらしいですが」
なるほど、じゃわれわれにも気軽に会って話してくれるでしょうねえ」
「いや、どうしてどうして、彼等は口が固いですよ。ここで二、三度会って、少し話したことがあるんですが、戦争のことなんかこれっぽっちも話やしません。照子さんや冷子さんは、女だから警戒してないんでしょう」
いつの間にか、進と土田の前にビールが運ばれていた。まだ、ビールの出る時間じゃない。進は思わず冷子の顔を見た。
土田はすでに一杯目のビールを飲み干して、二杯目に口をつけていた。進はとうとうビールを口にしなかった。土田はまだ帰らないつもりらしい。俺が帰ったら、この家は二人っきりになってしまう。二人っきりになるのを待ってるのかも知れない。どうも、この家の雰囲気は普通じゃないな。外国商社勤めとかいうこの娘も、正体は案外別物かも・・・。秘密クラブか、偽装売春か、どことなくその気が漂っているようだ。そうとすれば、こりゃなかなか垢抜けた趣向だ。ニュースの出所がこことすると、こりゃ本当に、望田先生も国会に持出すには考えこむかも知れないな。
この二人、もちろん交渉済みってわけか。あの冷子の目。今はさっぱりと青空みたいに澄んでいるが、俺が帰ったとたんに、雌猫みたいにぬれぬれと欲望に曇るんだろうか。どうともなれ。さあ仕事仕事。
車に戻ると、ボンネットを磨いていた運転手が、
「原本さん・・・お嬢さんが先に帰るからよろしくと言ってましたよ」
とにやにやした。
富美子のことを忘れたわけではなかったが・・・と腕時計を見ると、そろそろ正午に近い。一時間半ほど冷子の家に居たことになる。
「なんだ、家に送ってやろうと思ってたのに・・・それで何か言ってなかった？」
「いいえ、何も」
進は、急に支柱を外された時に似た、妙に頼りない、うつろな自分を感じた。富美子を家まで送るということが、面倒臭い、わずらわしいという風な形で意識の底にこびりついていたのだが、それが急に除去されると、そのわずらわしさ、面倒臭さに、寄りかかり安心していたことを思い知らされてしまう。
「一度社に戻ってよ」
自衛隊に行く時に、カメラマンを一人同行する手筈になっていた。

「さて、どんなことをお話すれば良いんですか、何なりとどうぞ」
張川一尉はそう言ってから秘書の女の子に紅茶を命じた。浅黒い顔に濃い眉毛が盛り上がって、見るからに精悍な印象を与えた。卓上ではテープレコーダーが静かに回転して会話を記録している。
「まず、写真を一枚撮らせてください」
「どうぞ、こんな顔でよければ、何枚でも」
進はカメラマンの貝塚茂に指を立てて合図した。貝塚が写真を撮っている間進は、道々考えてきた質問を、手帳を出して読み返そうとした。だが第一項を健闘するひまもなく、写真撮影は終わった。しかたなく進は、
「では、まず警務隊の仕事の概要からお願いします」
と、メモ帳を出して用意した。
「そうですね、一口に言って、自衛隊のガードマンという所ですか。隊員の中にも泥棒がいたり強盗をする奴が出てきますからね。物品の盗難事故の捜査や取り調べも私共の守備範囲です」
「すると、旧軍の憲兵と比較して、仕事の内容は大分違うんですか」
張川は苦笑いをした。
「見学に来られた方によくそう聞かれるんですが、僕は旧軍の憲兵というのを知らないんですよ。何しろ、僕は昭和生まれのもんで、憲兵という腕章を巻いた兵隊は、子供の時によく見ましたが・・・まあ形式的には似ているかも知れないが、仕事の内容はかなり違うんじゃないでしょうか」
「ほう、張川さん昭和生まれですか、失礼ですが、何年生まれですか」
「四年です、あなたは二桁ですか」
「ええ、十二年なんですよ」
「ほう、そうですか。新聞社に入り立てですね」
場の空気が、何となく和やかになった。これは良い傾向だと進はひとまずほっとした。「インタビューは、敵に与える第一印象が勝負の鍵だ。敵に嫌われたら良い記事は出来ん」初めに配属された長野支局のチーフが、進を初めて怒鳴った時のことばで、忘れ難かった。
「いや、もう七年になります。ところで、張川さんは、どういうお考えから自衛隊に入られたんですか。差し支えがなかったらお話ください」
「そうだなあ・・・そう聞かれても・・・」
張川は、きれいに分けた頭をしきりに人差指でかいた。
「やはり独立国には軍隊がいるし、軍備が無いと他国から馬鹿にされますしねえ」
「ええ、張川さんの入隊の動機のようなものを伺いたいんですが・・・」
「いやあ、大したことないですよ」
張川は、はにかみを持てあまし気味に、わざとらしい大声で笑い声を立てた。
「集団活動が好きだったし、親父が軍人だったせいもあるかな。何となく入隊したくな

って・・・」

「憲法九条と自衛隊の関係をどう思われますか」

初めて、張川は緊張した表情を見せた。
「自衛隊が違憲だという一部の意見に、僕は反対ですね。国家がそこにある以上、軍備が無くて済む筈がない。国家に自衛権があるのは当然すぎる位当然の話ですよ。無防備非武装という意見は無責任です。もし外国が侵略して来たらどうするつもりなんでしょう」
「外国というと、ソ連や中国、それに北朝鮮などの共産圏が想定されていると思うんですが、自衛隊には、これらの国の軍隊の侵略を阻止するだけの実力が備わっていると思っておいでですか」
「そうですねえ・・・まず相手をどこの国に想定しているかということは、穏当を欠きますからなんですが・・・今例に挙げられたような国ですと、なかなか難しいですな。まあ一ヶ月間の防衛が出来れば、自衛隊の任務を完遂したと言えるでしょう」
張川はほとんど怒ったように目を光らせ、用心深くことばを選んで答えた。その答えは進が予備知識として与えられたものと、殆ど矛盾しなかった。つまらない問答をしているような気がして、進は、相手の意地をつつきたくて仕方がなかった。
「北海道に関する陸戦想定では、半月分しか弾薬の貯蔵がないということですが・・・」
「いや、そういうことは私にはわかりません。弾薬が半月分ということの出ている本は読みましたが、何しろ基盤が想定ですから、本当のところは誰にもわかりません」
一体どこから本題に切り込んだら、相手がしっぽを出すんだろう。まだ早い。ここで海外派兵の問題を持ち出したら、相手に警戒されてしまう。もう少しおとりの質問を続けるか。
「その後にある地図ですが・・・」
「これですか、これは東京地方の要警戒地区区分地図でしてね、治安出動に備えて、防備の必要のある所をこうしてピックアップしているわけです」
「大体どんな場所ですか」
「ご覧になるとわかりますが、国会、各省庁、放送局、銀行、それに水道電気ガス関係、重要基幹産業、鉄道関係といった所ですか」
「治安出動を取る条件のようなものは決まっているんですか」
「それは我々の判断ではなく、長官の命令によって出動するわけです」

次の質問が進の口からなかなか出なかった。シューシューというテープの微かな回転音だけが聞こえた。
おざなりの質問だから良いが、これじゃあ記事にならんぞ、いくら芝居でももっと迫力のある演技をしなけりゃ・・・相手に馬鹿にされたらおしまいだ。どこか痛い所を突かなきゃ駄目だ。相手があわてた所で、本音を吐かせる。・・・何が良い・・・あれでいこうか。
「治安出動演習を実際に見学して取材したいんですが・・・」
張川は言下に答えた。
「今の所、演習は部外者には公開しない方針です」
「何故ですか、直接国民に関係ある演習なら、公開して世間に理解させる必要があると思いますが・・・」

「今はその時期でないという考えでしょう。事実、部分的に興味本位で取り上げられたりすると、誤解されかねないですからね、事が事ですから」

「というと・・・」
「我々の演習は、銃火器を使用し、場合によれば銃剣刺突も用いる訓練です。警察の行う棍棒と盾だけのデモ規制とは質が違いますから、刺激もかなり強い。従って誤解も起こりやすいでしょう」
「同胞相打つ様をまざまざと想像させる、というわけですね」
張川はそれには答えず、煙草をふかしていた。
「今の問題と関連するんですが、自衛隊の銃口は国民に向けられているという意見がありますが、これについてはどのように考えておいでですか」
「それは誤解です。私に言わせれば、一般の国民は、余りにのんき過ぎるんですよ。侵略と言えばどこかの国が軍隊を上陸させ、航空機をもって攻撃してくるとばかり思っている。現実はもっと厳しい。ベトナムが良い例です。現代の戦争はまず間接侵略から始まる。侵略意図に同調した者が国民の間に潜入して社会を混乱状態に陥れ、その後から正規軍が侵入して来る。我々は間接侵略の段階でこれを食い止めなきゃならん。すでに間接侵略の先兵が、我が国にも上陸しているようなもんです。我々としては、怠りなくこれに備える訓練を積まねばならんのです。ここをよく国民に理解して頂くよう、あなたがたマスコミ関係の方に働いて頂きたいですな・・・」
「間接侵略の先兵と言いますと・・・」
「まあはっきり言えば、国内の急進分子ですな。暴力的な街頭デモなどで社会不安を引き起こすのは、期せずして間接侵略の導火線になりますからね。
進は、張川の熱っぽい調子に引きずり込またような形になった。
「しかし、そうなると思想的問題とか、表現の自由の問題がからんで来ますが」
「思想や主義主張は自由です。しかしそれが社会に実害を与えることになっては行き過ぎじゃありませんか。母国を他の国に売るような考え方を思想とか主義とか唱えることにも疑問が無いわけじゃありませんが・・・」
進が煙草を取り出すと、張川はカチリとライターを鳴らして進の前にさし出した。その物腰の柔らかさに、進はゾッとするものを覚えた。
「すると今盛んに行われている全学連のデモなどは・・・」
「そうです。学者先生や、マスコミの一部には学生の肩を持つような論調も見受けられるようですが、広く世界の現実を見なさいと一喝したい心境ですな、全く。韓国やベトナム、ハンガリーの現状を考えてらんなさい。すきあらばと我が国を狙ってるものが、まわりにひしめいているというのに、無防備だの非武装中立だの安保廃棄だのと、机上の空論も甚だしいですよ。自国の安全は自国民の手で守る、これですよ」
進は警備隊本部の入口にはってあったポスターの文句を思い出した。

「この国は君のその手で。」

部長の言によればもっと軽い感じの人物の筈だった。ところが実際に会ってみると、張川は、体格といい話しぶりといい、自信に溢れ、しかも言葉のはしばしに注意深く気を配っている。かな

りきわどい事を言ったようでも、よく考えると、紋切り型の大臣の答弁を一歩も出ていないのだ。こりゃあ難物だぞと進は舌打ちをしたくなった。

仕方がない、本題に入ろう。
「別の問題になりますが、最近ベトナム協会が行ったベトナム語講習会に数人の隊員が参加したという情報がありますが、ご存知ですか」
張川の太い眉が、ピクリと動いた。やがて
「さあ、そりゃあ、隊員が自発的に参加したんじゃないですかなあ。ご承知でしょうが、日曜、祝祭日は休みで自由に外出できるし、夜間も刻限までは自由ですから・・・」
おやと思う程、先程とはうって変わった歯切れの悪い返事が帰って来た。進の手元には、部長の寄越した資料がある。
「この講習会は平日の昼間しか開講されていないんですが」
張川はそれまで、少しも腰掛けた姿勢に崩れを見せていなかったのが、この時、両手をぎゅっと握り合わせて、トンと音を立ててテーブルの上に落とした。敵は動揺した、と進は見た。
「そうですか、あるいは、外報部の隊員を参加させたのかも知れません。北朝鮮・中国・ソ連など、どこの国の資料でも読みこなさなければ、外報部の仕事は出来ませんからな。それが何か・・・」
意外と落ち着いた返答だった。ここで立直られては仕事にならんぞ、進は勢い込んで畳みかけた。
「ベトナムに派兵する意志が自衛隊にあるんじゃないか、という意見がありますが・・・」
張川はいぶかしげに目を細めた。唇が固く結ばれ、目をしきりにしばたいて首をひねる様子が、進には意外だった。質問にたじろいで、逃げ道を探している顔ではない。
「ベトナムへねえ。・・・本気でそうお考えですか。・・・私見として言わせて貰えるなら、私はこう考えているんですよ。一国だけで平和を守ることは、現状では不可能ですから、隣接の自由主義国同志で助け合わねばならない。他の自由主義国の要請に応えて、我が国の自衛隊が力を貸す、こうならなければ、日本の安全保障は万全ではないとね。しかし、それには憲法の規制があります。今の段階では海外へ出兵することは無理です。できませんよ。第一あなた方マスコミが、黙ってる筈がありませんからね。しかしこれは記事にしないで下さいよ。あくまでも個人的な意見ですから」
俺をだまそうとしているんだろうか。それとも、本当に知らないのだろうか。もう少し突っつかなきゃ決められないぞ。
「これは仮定の問題ですが、もし今ですよ、自衛隊がベトナムへ派遣されたという情報を入手したら・・・あなたは有り得ることだとお思いになりますか、なりませんか」
「仮定ではお答えしにくいですが・・・私はそういうことは有り得ないと思いますね、現状では」
あっけない程明解な返事だった。
ドアーが開いて、厚い帳簿を抱えた隊員が一人入って来た。
「お話し中失礼ですが、先程言われた帳簿を持参しました」
「よし、ここまで運んでくれ、それから、奥平君、ちょっと」
「はい、何でしょう」

「この第三分冊の整理を一寸手伝って貰いたいんだが、時間がかかるんで今夜の外出は出来んかも知れないが・・・」
「わかりました。後ほど参ります」
下がろうとした奥平が、よろけて、テーブルに手をついた。茶碗がはね上がりスプーンが飛んで、テーブルの上に散乱した。リノリュームの破れ目にかかとを取られたらしい。

「失礼しました」
奥平は急いでタオルをしぼって、紅茶をかぶったカメラマンの膝のあたりをぬぐった・
「いいんですよ、どうせ仕事着なんですから」と遠慮するのを、二回、三回とタオルをしぼってはふく隊員の動作に、カメラマンはすっかり恐縮して「どうも、どうも」と頭を何度も下げた。
ここが潮時だ、と進は思った。結局無駄足だったんだ。こいつは何も知らないらしい。もっと別の所を、例えば幕僚とか司令とか、上層部に当たった方が無駄が省けたんじゃないか。何故部長はこんな中途半端な所にいる奴に会えなんて言うんだろう。しかし、あの部長の取材のカンは抜群だって評判だがなあ。ネタの出そうな所をズバリと当てちゃう。それに、自衛隊の戦力については、あの部長の企画の特集が前にあった筈だ。自衛隊についちゃ詳しいはずだがなあ。今度ばかりは部長のカンも外れたらしい。

張川健は、紅茶がこぼれてべとついたテーブルを、秘書を呼んでもう一度きれいに拭き取らせた。テーブルの上の名刺を手にとって眺め、
「東京ヘラルド原本進か・・・あれで飯になるんだから、新聞記者なんてのは気楽な商売だね」
「は？」
秘書がふり返ってけげんな顔をした。
「いや、いいんだ、こっちのことだ、それが終わったら、新聞記者が帰ったからすぐこっちに来いと奥平三尉に伝えてくれ」
「かしこまりました」
秘書はすぐに戻って来た。
「記者が帰ったら、直ちに隊長室へ出頭するようにとの隊長からのご伝言だそうです」
「隊長室？よしわかった」

張川健が隊長室へ入ると、隊長の大杉は手で脇の椅子を指して、待つように命じた。小肥りに太って、あごの下が二重にくびれかかっている。大きな目が顔全体の印象を愛嬌のよさそうな顔に見せている。記者のインタビューについての報告の要求だろう、と張川はテープを再生させる用意に立ち上がった。
「良いんだ、張川君、かけてくれ給え」
受話器を置く音と同時に、隊長の声がした。
「インタビューの細かい様子は後で聞かせてくれ給え。それより記者の質問の要点をごく簡単に聞かせて貰いたいんだが・・・」
「はっ、第一点は・・・警務隊の勤務内容について、第二点は自分の入隊動機のようなこと、第三点は憲法九条と自衛隊の関係についてです。第四点は・・・ちょっと失念しましたが・・・」
「メモはとらなかったのかね」
「はあ、テープを録っておりましたので」
「そうか、それで・・・・それだけかね」

「いえ北海道の陸戦想定と治安出動の条件について、それに海外派兵の可能性、ざっとこんな所でした」

「うん、その最後の項目のところだけどんな質問だったか、テープを再生してくれ給え」
やがて、テープから進の声が流れた。
「別の問題になりますが、最近ベトナム協会の行った・・・」
妙な部分を聞きたがるものだと張川は思い、進の声も自分の声もほとんど聞いていなかった。だから
「よし、そこで止めて・・・どう思うかね、この記者の質問を」
と大杉が問い掛けた時、何を聞かれたか咄嗟に判断がつきかねた。
「どう思うかとおっしゃいますと・・・」
「うん、この記者の質問に何か含む所が感じられなかったかな」
「そうですねえ」
含む所が全く無い新聞記者の質問など存在しない。といって取り立てて含む所があったとも思えない。張川健は返事に困った。
「ベトナムへ派兵したと仮定したら・・・などと言っておったようだが」
「はあ、近頃は方々の隊でよくそんな質問を記者からされるそうですが・・・」
「うん」
大杉はじっと考え込んだ。
「こりゃ面倒なことになるかも知れんなあ」
というつぶやきが、大杉の口から洩れたのは、しばらく沈黙が続いた後だった。
「何か、あったんですか？」
「うん」
有ったとも無かったとも答えずに、大杉はしきりに何か考えをまとめようとしているらしい。
「とりあえず、明日、王子の米軍野戦病院に誰か派遣しなけりゃならん」
「王子に何をしにいくんですか」
「患者を一人連れて来るんだ」
「王子から患者を、ですか。何故アメリカ人を連れて来る必要があるんです？」
「アメリカ人ではない。自衛隊の隊員だ。君に来て貰ったのはその事なんだよ。野戦病院に紛れ込んだと言うんだが・・・負傷している。至近弾の炸裂による顔面の火傷だそうだ。君はどう思う？」
張川は今度の質問にも答える用意が無かった。
「どう思うと言われますと」
「この紛れ込んだという隊員のことさ・・・」
「考えられないケースですなあ。どこの演習場で怪我をしたんですか」
「それが分からんのだ」
「そんな馬鹿な・・・何故分からんのです。口がきけん程の重傷なんですか」
「いや、傷も重いらしいが、口がきけん程ではなさそうだ。しかしその隊員は、精神に異常を来しているのだ」
「隊長」

張川には大杉の重苦しい表情が奇妙だった。

「それだったら中央病院に連絡して、直接引き取りに行かせたら良いじゃないですか。我々の出る幕じゃないですよ」

「君もそう思うかね」
大杉の表情は一層暗くなった。
「私も君と同じように考えたんだが、警務隊で極秘裡に受け入れろという上層部の命令が出ているんだよ」
大杉は立ち上がって、張川に近づき耳もとで小声で言った。
「対内局秘事項なんだよ」
内部部局、略して内局は、防衛庁長官直属の文官参謀達のことである。彼等は参謀でありながら、陸将とか海将、一佐、二佐などの階級を持っていない。要するに背広を着た、普通の役人なのである。しかしこの役人の手を経ずには、部隊を動かすこともできないし、作戦計画や予算の策定もできない仕組みになっている。当然、制服を着た軍人との間には考え方の違いがある。現地隊長幕僚間で事を処理して局長には報告しないケースが生まれてくる。これが「対内局秘」である。
「対内局秘事項なんだよ」
大杉はそう言って張川の目を見つめた。たかが怪我をした一人の隊員の処理に、内局秘とは大げさな、と思いながら、張川は思わず目をそらした。
「なあ、張川君、米軍が負傷兵を応じに運び込むルートは君も知ってるな」
「ええ、大体の事は知っていますが」
「ベトナムから横川へ、あるいは厚木へ、そこから王子へ・・・もし、その中にこの隊員が混じっていたとしたらどうなるかね」
張川ははっと気がついた。推理の歯車が急速に二つ三つ頭の中で回転した。
「すると、隊長、先刻の記者の質問は・・・」
「うむ、タイミングがよすぎるし、私でさえはっきりしないことを、知っている筈はないと思うが・・・・もし、万一何か知っていて、それを書き立てるつもりで来たとしたら、困ったことになる、と思ってな」
「まさか・・・しかし、隊長はその隊員がベトナムから運ばれたという確信をお持ちですか」
「それ以外に、王子へ入れられるルートは無いだろう。・・・それに、そういう空気が無かったわけではないからな。米軍から要請があれば、あるいは・・・」
後半分はほとんどひとり言のように、大杉は言った。ジェット機の爆音がガラス窓を震わして通り過ぎた。
「ずい分低く飛んだなあ」
大杉は窓の方をちらりと見た。ゆっくりと席にもどった大杉は、書類を揃えて張川の方へ出し、
「今言ったことは私の推測にすぎん。が万一推測が現実であった時のことを考えて、患者の受け入れは部外者には勿論、一般の隊員にも、事情が洩れないように、王子から連れて来たなどということが分からないように、命令通り極秘にやって貰いたい。これが受け入れの書類だ」
「わかりました。明日私が引き取りに出かけましょう」
「いや、君には明日、本庁に行って貰わなけれなならんのだ。・・・誰か他の者を行かせなさい。わかっているだろうが、余計な事は言わずに、人目につかんように、それだけ気をつけるよう

に注意してな」
「わかっています」
張川は卓の上から書類を取った。そのまま下ると思った張川が、卓の前に立っているのを見て、大杉は不審な面もちをした。

「何か？」
「はあ、隊長の推測のことですが、隊長は本当に何もご存知ないんですか」
大杉の眉間に深いしわが出来、ゆったりとしたほほの肉が、ぴりりと震えた。
「君は私が何か隠しているとでも思ってるのか」
「いや、とんでもありません、そんなこと」
「いいんだ。君はもし派兵が真実のことならば、私の所に連絡が来ている筈だと言いたいんだろう。はっきり言っておくが、私の所には、何も連絡が来ていない。あの患者が事実ベトナムから帰って来たのだとしたら、私はそのことについては完全にツンボサジキだった。だが、そうであっても、私はへそを曲げたりしないよ。誰がやったにせよ、やった気持ちはわかるからね。ただ事前に知らせてくれれば、もっとうまい手が打てたんじゃないかと思うがねえ。王子に運び込むなどというへまをやらずに済んだろうね」
「わかりました、私も隊長と同じ気持です。明日は奥平三尉を王子にやろうと思いますが」
「いいだろう。よく注意を与えてな。明日は野戦病院反対のデモがあるという記事を新聞で読んだが・・・デモについての調べはついているかね」
「はあ、三派系で推定千五百人、労組員が四千人。組織動員の推定はこんなものですが、一般住民の動向が正確につかめておりません。大したことは無いだろうという報告ですが」
「うん、十分気をつけてな」
しかし、張川の聞きたいことは、大杉が派兵についての事前連絡を受けていたかどうかではなかった。派兵が真実であるならば、その派兵された部隊と、その責任者を調査する必要があるのではないかということだった。
もし大杉が事前に派兵計画を知っていたならば、大杉も責任を問われねばなるまい。またもし知らなかったとしても、今後、調査に手を抜くようなことがあれば、やはり事後共犯としての追求を免れ得ない。
隊長には調査をサボる恐れが多分にある。それならば、俺が調査をしておかねばならない。俺は隊員をベトナムに派兵することにはむしろ賛成なのだが、人の目をかすめてこっそりやるのは反対だ。堂々と国会の審議にかけ、国民の世論を換気してから、公然と派兵すべきなのだ。陰でこそこそと、どぶ鼠よろしく部隊を動かしているようでは、一般隊員の士気にも関わる。派兵の事実を事実として自衛隊の歴史に留める為にも、責任者はきちんと罰せられなければならない。
自室に戻った張川は、待っていた奥平に患者受け入れの書類を渡し、明日王子病院へ行くように命じた。
「こっちの推定した隊員と、患者とが同一人かどうかを確かめることが第一だ。第二は病院に入った経路を当人の口から確かめること。しかし当人は精神が異常だというから難しいかも知れんが・・・米軍からも説明があるだろうが、それはそれとして当人からの情報が欲しい。もちろん入手した情報は俺以外には絶対に洩らしてはいかんぞ。・・・そうだ、傷がそれ程でなかったら、病院へ送り込む前に、俺も会いたいから、途中で連絡してくれ。俺は本町へ行ってるが、連絡があったら、何とかごまかして抜け出すから・・・そうだ、隊の車じゃなくてタクシーを使った方が良い。制服じゃなく、平服で行くんだ。米軍から受け取ったら、目立たない所、どこか

ホテルの一室でも一時借りて、そこから連絡してくれ。以上だが何か疑問の点はないか」

奥平は一寸考えてから、
「万一患者の身元の確認が出来ない場合でも、受け入れてよいでしょうか」
と言った。
「そうだなあ、とにかく日本人であれば受け入れて来い」
「じゃ、例の帳簿を片付けるとするか」
部屋の中程に置いた広いテーブルに並んで座り、張川が帳簿に印のついた箇所を抜き出し、奥平はそれをコピーにかけて複写をとる。
「こないだここに来た、今井という二士ですがね」
コピーをとる手を休めず奥平が話しかけた。
「うん、どうかしたのかい」
奥平は喉の奥で微かに笑った。
「ろくに短機関銃の操作ができないんです。いくら教えても、一所に玉がまとまらないんですよ」
「ふうん、・・・よっぽど不器用なんだな」
「いや、機関銃なんて狙って撃つもんじゃないと言い張りましてね、敵のいる方向に向かって引鉄を引きさえすりゃいいんだと射撃の教官と三十分も言い合いをしましてね・・・」
「近頃の若者はどうもへ理屈ばかり上手くなって・・・」
「教官がむかっと来たんでしょう、お前は何で警務隊へ来たんだ、警務隊へ来た以上射撃だけはしっかりやらなきゃ勤務できないぞと言いましたら、しぶしぶ引き下がったようですが、後で教官に聞きましたら、警務隊なら何かあっても第一線に立つことはないだろうと思って志願したんだと、ぬけぬけとしゃべっていたそうです」
「ぬけぬけと・・・か、いくつだい、その二士は」
「二十三だそうです」
若い者特有の自己中心的考えなのか、それとも、一般隊員間に、そういう防衛本能のようなものが鋭くなっているのか。もしここで、ベトナム派兵が事実と決まったら、そういう隊員達はどうするのだろうか。転職して行くのだろうか。
「張川さん、次の原本を渡して下さい」
と奥平に催促されて、張川は、ぼんやりしていた自分に気がつき、あわてて帳簿から原本を外した。

４章 ガードレールをまたいで

原本進は、社会部の部屋で、まだ乾ききっていない写真を机の上いっぱいに広げていた。
「ああそれ、どうだい、頭抱えて丸まっているのを警棒でぶちのめしているところ、毎度のことで珍しくないけど・・・じかに見てるとやり切れないよ、全く」
貝塚は自分の撮 影した写真の注釈を、早口でまくしたてた。
「これこれ、この写真撮るのに、菓子屋の二階を借りてね、その二階の手すりってのが腐ってて、もう一寸で落っこちるとこだった。でも、ほらデモ隊が機動隊を押し返してるとこさ、・・・両者の間十五メートルってとこか、この無人地帯に石の雨が降るんだ、何しろこんなコンクリートのかけらだから、まともに当たると大けがだよ」
進は、王子のデモの取材に、直接関係はなかった。しかしデモの動きが激しくなるにつれて、二人、三人とそちらへ動員されて、進の仕事は一時中断せざるを得ない状態になってしまった。
「そう、そう忘れてた」
何枚もの写真の注釈を終わってから、貝塚は、一枚の写真をつまみ上げて進の前へ投げ出した。
「これ、見覚えないか」
「何だい、どれ」
「これ、この男性」
進は指で示された男の横顔を見た。輪郭がぼやけているが、確かに見覚えのある顔だった。
「うーん、どっかで見たぞ、この顔は」
「もっとしっかり見て・・・困ったなあ、昨日会ったばっかりなのに・・・」
「昨日って言うと・・・ああ、そうか、警務隊の張川さんの所で・・・へえ、警務隊ってのは、デモの取締りまでやるんだねえ」
「いや」
と貝塚は目を光らせた。
「このお人はデモの取締りはやってなかったぜ・・・て言うのはねえ、俺達はデモも機動隊も全部引きあげるまで現場にいたんだよ。そしたらさ、このお人がのこのこ米軍病院に入って行くのを見たんだ。どうも、始めから病院に用があったらしいぜ」
「病院に・・・」
進の元には昨日の冷子の話の概要が、原稿にまとめてあった。飛行機からすぐに病院へ運ばれた日本の負傷兵、というところに、赤線が引いてある。欄外に入院先を確かめることと書き込んである。
今日の午前中、この原稿をもとにして、これからの取材の方針を部長と相談した。もしベトナムから帰って来た自衛隊員がいるのなら、まず第一にその隊員を探し出さなければならぬ、ということになった。どういう病院に入りそうか、自衛隊の病院をまず探るべきだ、と部長が言い進も異論がなかった。
だが取材の段取りをつける間もなく、王子のデモの第一報が飛び込んで来て、部長は記事の書き直しにかかりっ切りになってしまった。そこへ病院と言われたので、進は、反射的に今取材中の

事との関係を思い浮かべてしまった。

米軍病院に負傷兵が収容されることはあるかもしれない。しかし、それと警務隊員と何の関係があるか。もしあるとすれば、隊員の見舞いかそれとも受取りか・・・・それはどうもこっちの都合の良いように考え過ぎる。
冷静に公平に考えると、警務隊と米軍病院との間で、負傷兵とは全く関係のないことで連絡を取る必要が、絶対にないとは言い切れない。がまあそれもそう頻繁に行われはしないだろう。とすると、四分六ぐらいで・・・いや七三ぐらいの割で、狙いの筋かも知れないと言えるだろう、外れるかも知れないが、ひょっとすると・・・部長に話してみよう、何て言うか。
「そうだなあ・・・、こっちだってどこの病院てあてが無いんだから、さしあたりその米軍病院の線を洗うのも、一つの手だな。遅いか早いかで、いずれ一度は探りを入れなきゃならねえ所だからな。そのベトナム帰りが出て来なけりゃさ。・・・まあ慎重にやってくれよ、相手が相手だからな・・・米軍のことじゃないよ、警務隊の方だよ。・・・表面づらがおとなしいからって安心するなよ」
「しかし部長」
「何だ、用があるんならさっさと言えよ、こっちの忙しいのはわかってんだろう」
「どうも・・・しかしね」
「新聞の文章には、しかしだの、それ故だのってえのはいらないんだよ。用だけ言ってくれ」
「病院を取材しましょうか、それとも、警務隊の方に的を絞りましょうか」
弾ね返しに部長が怒鳴った。
「警務隊」
その間も部長は原稿を書く手を休めなかった。
「わかりました」
進は席に戻って、これからの取材の要領ををメモにまとめてみた。ベトナム帰りと関係ありと仮定すると、始めに書き、考えられる取材行動を箇条書きにあげていった。
一、警務隊員を取材する
少し考えてその下にXをつけた。正面から取材を申し込むわけにはいかない。（あなたは米軍病院に何しに行ったのですか）とは聞けたものではない。
二、警務隊員の行動を密かに監視する
その下にも進はXをつけた。 貝塚が見た後で、警務隊員が負傷兵を連れ出してしまっていたら、尾行しても何にもならないと思ったからだ。が、すぐにそのXを消した。連れ出した後かどうか断定はできないし、連れ出した後でも、調査や確認の仕事で、負傷兵の所へ通う仕事がないとは言えない。いや、むしろあると考えた方が自然だ。
頼りない話しだと思い、溜息をつきたくなった。もしこれが、あの事件と関係が無かったら、全くの骨折り損ということになる。思うまいとすると、なおその時の疲労感が想像されてしまう。それに、もし関係があったとしても、この隊員ばかりが負傷兵と接触するとは限らない。今日はこの男だったが、明日は別の男が負傷兵の所へ行くかも知れない。
「何をぼうっとしてんだい、浮かない顔だぜ」
貝塚がパイプのやにを掃除しながら言った。

「何でもないよ、一寸仕事の段取りを考えてるとこだ」

「段取りって、おや、原本氏、まだそこにいたのかい。世の中は太平でいいね、段取りとは恐れ入りました。・・・ぼやぼやしないで隊員を尾行するんだよ。仕事しながらひまがあったら、段取りでも免状取りでもなんでもやってくれ」
と怒鳴ったのは部長だった。
「そこのカメラ屋さん、・・・もちっと迫力のあるのが撮れないかね、どれもこれも、いつか見たような奴ばっかりじゃないか。この前のネガ使ってるんじゃないだろうな」
貝塚にも罵言を投げかけた。
「ああいけねえ、そういやあ、こないだのネガ、カメラに入れっ放しだった」
慣れたもので、貝塚は平気でまぜっ返している。電話を受けた貝塚が、
「おい、原本さんへ、婦人ファンからでした」
と突き出した。富美子からだった。
「昨日はどうしたんだい。家まで送ってこうと思ってたのに・・・」
「御免なさいね、一寸用を思い出したもんだから・・・あのね、一寸待って・・・」
富美子の声が、受話器の向こうで自動車の騒音を冠って、聞きとれなくなった。
「あのね、今日会えないかしら、仕事忙しい？」
「うん、これからまた外回りだ。一寸無理だな、今日は」
「あの、あたしの方も一寸急な用なのよ。お金を貸して欲しいの、できるだけ早く」
「金？」
進は部長をうかがい、貝塚に目を走らせた。
「今はどこだい。・・・王子の近くの・・・えっ、何て言うほねつぎ、よしわかった。まさか君が骨折したわけじゃないだろうな・・・そう友達ね、わかった」
とりあえず、金を持って行くより仕方がない、と進は思った。仕事中であることを承知の上での電話だ。よほど急な事態に違いない。
骨つぎはすぐにわかった。表通りから少し引っ込んだ路地の奥だった。門構えがあるが、柱は薄鼠色に変色している。看板の文字もはげ落ちたままだ。
ガラスの格子戸を開けると、富美子が長椅子に座り、ほっとしたように唇をほころばせてこちらを見た。
「良かった。早かったじゃない・・・」
「どうしたんだい、一体」
富美子は、小さい声で困ったなあ、と言った。
「電話で話した通りなんだけど、友達が怪我して・・・警官にやられたのよ、デモに行ってて腕が折れたらしいのよ、・・・今手当してるんだけど、・・・その治療費の持ち合わせがないの、あの人健康保険証持ってないから弱っちゃった」
「君も、デモに行ったのかい」
富美子は微かに笑っただけで、答えなかった。
治療室の扉があいて
「太田さんの付添の方、一寸」

と中年の女が富美子を呼んだ。

”あれ、畜生、野郎だったのか”
富美子と一緒に病室を出て来たのは男だった。
"友達、友達って言うから女とばかり思ったのに”
表情が硬くなるのが、自分でもわかった。
富美子は、まるで無関係なゆきずりの人間を見るように、進を見捨てて、腕をギブスで固めた男の身体を支えながら、廊下を曲った。どうして、何の為にデモなんかに出かけたんだ、という疑問が、その時になって、進を襲った。
一等席で火事見物をしているうちに、自分の懐がくすぶり出したような気がした。記事の取材で熱中することはある。自分が、当の事件の当事者になったと思うほど打ち込むことも珍しくない。しかし、それも結局は記事にするまでのことだ。総理大臣が殺されようと、検事総長が汚職をしようと、デモで野戦病院が潰れようと、要するにそれは、記事にすればそれまでのものなのだ。
勝手に芝居の幕が揚がり、進行して幕が下りる。こっちはそれを見ていて報告しさえすればいい。どれ程夢中になろうと、観客は舞台に出ることはない。
が、今進を襲った疑問は、知らぬうちに、自分が舞台にのせられているのではないかという危惧を伴っていた。一人の男がデモで怪我をし、その逃亡を黙認した上、治療費まで立て替えとなると、赤新聞の一段ぐらいは埋める記事になりそうだ。
いやそうじゃない、そんなことを恐れているんじゃない。例えば富美子が俺を見た顔、済まないでもなければ、恥ずかしいでもない。当然・・・そうだ当然のように”友達”を支えながら、俺の存在を無視した顔、それが恐ろしいんだ。
いや、それだけではない、富美子が、”友達”と一緒にデモに参加していたということ、富美子がそういうことをすると、自分が予想もしなかったこと・・・。
進の座っていた長椅子の、すぐ横手のドアが開いて、そこから急に富美子が現れた。
「ご免なさいね、忙しいところを時間とらせちゃって・・・」
頬が上気して薄紅くなっている。少し小首を傾げたようにして、俺の言葉を待っている、これはいつもの富美子だ。
「怪我の様子はどうなんだい」
「それが、二、三日入院しないと駄目らしいんですって・・・動くと骨に響くから静かにしていた方がいいんですって・・・一万円ほど持ってる？」
「ああ」
進は一万円札を財布から抜き、
「余ったら返して貰うとして・・・余分に持ってた方が良いんだろ」
五千円余分に渡した。
「有難う、助かるわ・・・父親に言うわけにはいかないし・・・」
父親に言えずに、俺に言えるというのは変じゃないか、と進は思った。
「どんな人なんだい」
「どんな人って・・・原本さんの知らない人よ」

富美子はふふふと忍び笑いをした。

　進の奥歯がきりりと鳴った。そんな笑い方をするな、それじゃあんまり俺を馬鹿にし過ぎやしないか。
「これで保証金の払いを済ませてくるわね」
「そうしろよ」
富美子の後ろからゆっくり窓口に近づき、入院書類に記入される名前を、進は、横から眺めた。太田和人という名前か、グラフィックアーティスト連盟勤務、二十八歳、俺と同い年だな。
「ねえ、太田さんに会って頂けない。入院費を借りたんだし、太田さんだって、あなたにお礼を言いたいと思うわ」
「うん、しかし、もうでかけなくちゃ・・・一寸だけ・・・じゃないと変に思うわよ、お金だけわざわざ届けに来て、会わないで帰っちゃうなんて・・・」
　「わかった、じゃ一寸だけ会ってから行こう」
どうも、どこかいつもと違うな、やっぱり。仕事の邪魔をするなんてこと、一度だって無かったのに、今日のこの粘り方は普通じゃないぞ。
それに、富美子の体の線というか輪郭が、今日は特に際立っているような気がする。いわば俺に対する境界線みたいなものが、身体の表面に張りつめていて、俺を弾ね返しているような感じだ。
狭く薄暗い廊下を先に立って歩く富美子の首筋の白さを、掌の中で握り潰せたらと進は思った。胸がしめつけられるように痛んだ。富美子の胸の中を知りたかった。そこにはまだ俺の占める場所が残っているのだろうか。無かったとしたら・・・そんな馬鹿なことがある筈がない、俺達は結婚するんじゃないか。
病室とは言っても、普通の部屋と何の変わりも無い部屋だった。四畳半の部屋の隅に、子供用の座り机がおいてあり、その上に漫画の本が二、三冊積んである。たった一組の布団で部屋が一杯になっている。太田は目をつむって横になっていた。頬の辺りにも、青黒いあざが浮き出し、そのまわりが腫れて、腐り切った果実の肌を思わせた。
「太田さん、・・・こちら原本さん、父親とご同業、あなたの治療費のスポンサー」
「ああ、どうも・・・本当に有難うございました」
と和人は、血の気の引いた顔には似合わない、元気な声で答えた。
「いや、困った時はお互いさまですよ。痛みますか」
「ええ、まだ一寸、・・・大したことはないんですけど・・・」
「原本さん」
と富美子が二人のあいさつの間を割った。
　「こちら太田和人さん、高校の先輩なの」
明らかに、太田と進を、意識して平等に扱おうという態度だった。それが進にはこたえた。婚約者という特別の立場を封じられたとしか思えなかった。
「よろしく・・・絵を描いてるんですよ。アルバイトにデザインをやったり、絵の塾を
開いたりしてるんですがね・・・絵はお好きですか」
　「いやあ、特別に好きという方では・・・」たった今、嫌いになったよ、と言えたら、どんな

にせいせいすることか。

「この手が心配ですよ、まさかとは思うけど使えなくなったら・・・と思うとねえ」
「大丈夫だって、お医者さんが言ってたじゃない、心配しないで」
一体、どうしたんだ、富美子は。そんな風に優しげに、その男の顔をのぞき込んだりして。話が逆じゃないか。闖入者はそっちだ。邪魔者はお前だ。
進は一人で接骨院を出た。ひどく疲れたような感じだった。車を、
「芝浦にある警務隊本部へ」
と命じた後、進は目を閉じて横になった。
だが疲れているのは身体ではなかった。脳か神経かそんなものが、束になって耳の後あたりの頭蓋骨に、ギシギシと身体をこすりつけている。進は瞼に力を入れた。そうやれば、重い痛みもいくらか抑えられそうだった。
言葉になる以前の、胎児のようなものが、浮き上がっては今にも溶けそうな肌をちらりと見せて、また白く濁った闇の中に没して行く。あれは・・・と追おうとすると、疲れに似た痛みが行く手を妨げる。
あれは・・・一体・・・土田じゃないのか、そうだ・・・太田というあの男は・・・いや富美子は・・・少し、ほんの少し眠れたら、頭がすっきりするんだが、・・・風を引いたのかなあ廊下の向こうに富美子が歩いて行く・・・俺に背中を向けて・・・こっちを見ずに・・・
「着きましたよ、・・・原本さん、眠っちゃってんのか、のんきだねえ・・・原本さあん」
ふっと目を開いた後で、進は自分が眠っていたことに気がついた。頭はもうほとんど痛みを残していない。
奥平が果たしてこの建物にいるかどうか。知る方法は、まず無い。待つより他仕方がないか。いや電話をかけてみよう。一昨日の写真ができたから何とか・・・。
いない。奥平は外出中でございますか。今日はもう仕方がないな。とにかくとにかく部長に報告しとこう。
「ああ原本君か、どうだいそっちの様子は・・・なに、警務隊員は出かけた後だってまずいな・・・部長、部長は今会議中だ・・・とにかく一旦こっちは帰って来てくれ。のんびりしちゃいられなくなった。今晩中にまわれる所はまわっておかないと、どっかに抜かれるぞ」

「あの原本ってブンヤ、変な顔してたね」
天井を向いたまま、和人がつぶやいた。
「あたし、あの人と結婚しようと思ってるのよ」
「ふうん」
和人は黙り込んだ。和人は富美子の知らないもう一人の女のことを思い浮かべていた。
「前に付き合ってた、何とかって男性はどうしたんだい」
「別れた。結婚するはずだったけど・・・あたし恋愛してるつもりだったのに、お友達と張り合ってるだけだったみたい・・・何も知らなかったのよねえ。・・・あたし、いつも思い出すんだ、ほらいつか高校の時、二人で古径の絵を見に行った時、太田さんはさっさと国会前のデモに行っちゃって・・・あたし、後から行ったのよ」

「へえ」
和人の目が、大切な忘れ物を発見した時のように明るく輝いた。

「でもね、お堀端のガードレールを乗り越えられなかったの」
「どうして」
「どうしてって・・・そうね、何かこの向こうに世の中があるんだって思ったわ」
「世の中・・・何だいそりゃ」
「うん、あたしにもわかんなかった。たださ、例えば本屋さんのお店の中だって世の中でしょ。本のページをめくる音や、インクの匂いや、立ち読みする人や、・・・でも本屋の御主人の座っている後ろの方にも、もう一つの世の中があるでしょう」
「世の中の裏面てとこかい」
「うーん、裏面じゃないと思う。とにかくもう一つあるのよ。本屋の御主人の後あたりの薄暗い所にある世の中よね。そんなもんが、あのガードレールの向こうにぶちまけられてるように思ったのよ」
「何だかよくわからないが、世の中の真実が見えたってことか」
「真実？真実なんて目に見えるもんじゃないでしょう」
「見ようと思えば見えるさ、いくらだって」
「そうかな、あたしにはわかならない。でもあたしは、あの時、太田さんは向こう側へ行っちゃったし、あたしはこっち側に残されちゃったと思ったのよ」
「そんなこと、君は今まで言わなかったじゃないか」
「言わなかったんじゃないの、わからなかったのよ」
和人はわからなかったのよという富美子のことばに、重いひびきがこめられていることを感じた。それは新鮮な驚きだった。
「あっち側もこっち側もあるもんか。みんな同じだよ」
「そうなのよね」
と、富美子は響きのように和人のことばに続けた。
「そんな簡単なことが、あたしにはわからなかったのよ」
それはそういうものなのかも知れない、と和人は思った。女にとっては、経験とは、そういうものなのかも知れない。
が何にせよ、正面切って、「わからなかった」と言われると、自明のことと考えて来た自分が、どこか間違っていたような気さえしてくる。
「君、男性と本当の付き合いをしたことがあるのかい」
富美子のことばに付着している経験の重さが、和人に、それを聞かせずにはいなかった。
「ええ」
富美子は、和人の目をまっすぐに見て答えた。
「あるわ。・・・でも駄目なのよ、どうしても」
うっと和人は息がつまるような気がした。断固として妄想を拒否する響きを持ちながら、そのことばは、あらゆる妄想を挑発せずににはいなかった。
和人の目の前にある、富美子の膝と腰から目をそらした。聞くのではなかったよいう後悔の念と、今なら富美子を自分のものにできるという考えが、同時に和人の頭に浮かんだ。

「あたしは、何でも知りたい、何でもやってみたいって夢中だったんだけど、何かいつも向こう側にいっちゃうみたいだった。でも今日わかったのよ、あたしはこっち側にいたんじゃないってことが・・・歩道でデモ見てる人達が沢山いたわよね。・・・あれを見てたらおかしくなっちゃって・・・何を今まで勘違いをしてたんだろうって・・・でも無駄じゃないのよね、遠回りでもないのよ、ガードレールなんて始めから無い、あっちもこっちも無い、そういうことは、あたしにはとても大切ねことなのよ」

「ここだね」
という太い男の声と同時に、突然病室の障子が開いた。首をまわしてその方を見た和人の顔が引きつった。
「デカだ」
と富美子にささやき、済まなそうに目を伏せた。接骨医と共に二人の背広姿の男が立っていた。
「警視庁のものですが、身分証明書をお持ちですか」
和人は目をつむったままだった。
「百人会青年反戦同盟の副議長、太田和人だね」
和人が黙っていると、刑事は医者に念を押した。
「無届けデモ、及び凶器準備集合、公務執行妨害の容疑者として逮捕状が出ている・・・先生このまま連行してもよろしいですか」
「腕さえ動かさなければ、構わないと思いますが・・・」
脅えた医師は、刑事の顔色を伺いながら答えた。
「腕が折れているんですよ。熱も少し出ているようです。今連行するのは人権侵害じゃありませんか。・・・先生、もう一度よく診て下さい。この人絵描きさんですから、腕が駄目になっちゃったら取り返しがつかないんです」
と富美子は立って、二人の刑事と向かい合った。
「あなたは、太田とどんな関係の方ですか」
と背の高い刑事が、冷たく粘る視線を富美子に向けた。
「余計なことを言うんじゃないよ。何も答える必要はないんだ」
と和人が言った。
「ほう、女を盾に使おうと言う訳か。あまりいさぎよい態度じゃないな・・・どうする」
と二人の刑事は廊下に出て低い声で相談を始めた。
「今のうちに帰れよ、それから事務所の方へ電話しといてくれ、あっちにも手がまわったかもしれないけど」
と和人がささやいた。ふたたび入って来た刑事は、
「着物を着換えなさい」
と言った。和人が寝たままでいると布団をはいで抱え上げようとした。
「無茶よ、やめなさいよ」
富美子は刑事の腕を掴んで離そうとした。

「邪魔すると公務執行妨害で逮捕するぞ」
振り向いた刑事の目玉に、富美子は、思わず爪を立てていた。

当直医師の息子が交通事故を起こしたので、中島満はその代理の内科当直に当てられた。田代に連絡すると、患者に異常はないし、自衛隊らしい所からも、何の連絡もないということだった。田代との相談は一晩のびることになったが、仕方がなかった。その日は睡眠薬自殺未遂の患者が一人と、外科に交通事故が二人入院して、どれもかなりの重症だった。のべつ呼び立てられて、宿直室で横になれたのはやっと夜中の一時半を過ぎた頃だった。

当直の看護婦を呼んでビタミンの注射をさせ、茶を淹れさせた。身体は棒きれのようにくたびれ切っているのだが、頭の芯は火がついたように火照って、眠れそうになかった。

満が手提げカバンから出したのは、一枚のビラだった。満の勤務する病院の医師の中で、昨日のデモに参加した者が何人かいて、その連中が持ち帰った、というより捨て忘れたものを拾っておいたのである。ビラに書かれていることが気になったのだ。

自衛隊遂にベトナムへ・・・、それを読んでいるうちに、満は、昨日自分の車の中でひとしきり戦争ごっこをやった、あの患者を思い出さずにいられなかった。そして今朝の奥平とかいう警務官の訪問だ。インターンの学生が、満の机の上にビラを置きっぱなしにするまで、満はほとんど例の患者の事を思い出すひまがなかった。ビラを見てからは、そのことばかりに注意が向かっていく。

それは、必ずしも、インターンの学生が熱っぽく議論を交わしていたような意味で、自分の関心を惹きつけているのではない。

ビラの内容は満にはまったく信じられなかった。診療の合間に、夕刊の見出しをちらと見、ラジオの定時ニュースを一度聞いたが、それらしい報道は少しも伝えなれなかったからだ。

ただ、自分が偶然拾った精神病患者の症状に、このビラの内容が、何か関係がありそうな気がした。ビラを見たのがきっかけで、被害妄想に陥る症例が無いとは云えない。もしあの患者がデモに参加していたということがわかったら、患者の身元を知るのに役立つことはもちろん、治療の方法もはっきりするに違いない。

今後ああいう患者を出さないためにも、症状や誘因を発表しておく方がいい。それに、その方が田代のためにもなる。田代の手で学会に報告させてやりたいなあ。やっぱり自衛隊に引渡すべきじゃないなあ。

ドンと扉の閉まる音が遠くでした。ひたひたと廊下を走る音が近づいてくる。満は腰掛けたまま懐中電灯と聴診器をガウンのポケットに押しこんで、近づいてくる足音に耳をすませた。扉が乱暴に開いて、

「先生、中島先生、十号室の南田さんの様子が変わりました」

と看護婦が息を切らせている。

死ぬな、それとももう死んだかな、と満は看護婦の顔を、患者のそれであるかのように診断した。十号室は睡眠薬か。もうこれ以上は処置なしだな。

「カンフル」

満が言う前に、看護婦はすでにアンプルを切り始めている。

十号室の患者は、すでに呼吸が止まりかけていて、看護婦が患者の胸に覆いかぶさって人工呼吸をしていた。難病かおきに、患者はホーッと溜息に似た長い呼吸をするが、すぐにその呼吸が微かになっていく。患者の身体の周囲には、じとじとした胸の悪くなるような臭気が濃く立ちこめている。

患者のまわりには、親や兄弟が息をつめて見守っている。時々息を吹き返すのを見て、一喜一憂してるに違いない。死んだも同じ症状だとは思っていないだろう。全く、こういう患者を扱う時が一番辛いよ。「ご臨終です」と言うと、申し合わせたように、信じられない、まさかそんなこと、と言うような顔をするんだから。

自分の親や兄弟だけは、絶対に不慮の死に遭遇しないと思い込んでいるんだなあ。信じようと信じまいと、死という現実だけは動かせないのになあ。おっと、目が動かなくなったぞ・・・やっぱり瞳孔が開いている。もう一度、俺が人工呼吸をしてやろう。これから後は、生き残った奴へのサービスだ。

一度、満の手の下でわずかに息を吸った肺も、二度目には全く反応を示さなくなった。

遺体の始末を看護婦へ命じて、満は宿直室へ引きあげる。死亡診断書を書くために、患者のカルテを調べた。起き抜けに田代の所へ行く為には今晩書いておかなきゃならん。薬はほとんど消化されきっていた。胃洗浄では極少粒が散見されただけらしい。心臓の衰弱が甚だしい。

おまけに身体が貧弱で、抵抗力が非常に弱いときている。排泄器官が失調している。つまりたれ流しだ、全てのデータが、ただ一つの帰結を示している。死。それでも、死が現実のものとなるまでは、それを受け入れられないんだなあ。自分が望まないものは、信じるわけには行かないんだ。

なかには、病人の死を待ち構えてる奴がいないでもないがなあ。長患いの老人の家族なんて、胸の中じゃあみんな病人の死を待ち望んでるのかも知れない。「先生、もうやめて下さい。可哀想で」と言った女がいたっけ。病人の娘だということだったが・・・何辺も蘇生術を施す俺達の働きに対して可哀想だというのか。

死に切れない病人が気の毒だというのか、それとも生き返られてはまた何日か面倒を見ねばならぬ自分達が堪らないのか。涙を流しながら、やめて下さいと言われた時には驚いたが、女の涙って奴は、天秤の錘みたいなもんだからな。一方で母親の死を望んでいながら、そいつと涙が釣り合って帳消しになってるかも知れないんだ。

カバンからウイスキーを取り出し、びんの口からのどに直に流し込む。胃の底がチリチリと縮んで、せり上がってくる。うねうねともがいてる脳神経をねじ伏せ、眠りの中に引きずり込むには、まだ少し、ウィスキーの量が足りない。ままよ、今晩はもう大丈夫だろう、やっちまえ。

翌朝、満が田代の所に着いたのは、十時をまわった頃だった。田代は回診中だった。待合室で田代の回診が終わるのを待つことにした。病棟と住居はかなり離れていたから患者と会う為には病棟にいた方が都合が良いと思ったからである。三坪ばかりの板張りの室に、ソファを三つ並べた待合室は、別に珍しいものではなかった。

一番奥にあるソファに、二人の先客が座っていた。十七、八の若い男と、年配の婦人だった。コの字に並んだソファの真ん中に、小さい丸いテーブルがあり、その上に、週刊誌や少年漫画雑誌が積んである。積まれた雑誌類の腹は、どれも、手垢で薄黒く汚れていた。その一冊を若い男が読んでいた。男は時々、顔を上げて、深呼吸をするように、ハァー、ハァーと大きく息を吐いた。始めは胸でも苦しいのかと思ったが、二度目のハァーハァーの時によく見ると、頬の筋肉が微

かに震えているのが判った。笑っているらしい。

「おーい、これ、おーい、これ」
と若い男がしきりに漫画を叩いて、付添いらしい女に示そうとしていた。女は、満の方にちらと視線を走らせてから、
「どれどれ、ほんとに面白いね」
とのぞき込むふりをして相槌を打った。男はハァー、ハァーとほとんど唸り声か悲鳴に近い声をあげ始めた。
「こいつは馬鹿だよ。おい、こいつは間違ってるよ」
と男は漫画の本をこぶしで叩き続けている。
「ほんとだねえ。間違ってるねえ」
と付添いはうるそさそうに答えながら、垢で微かに照りの出ているあわせの衿にあごを埋め、ふと本を見て、
「ＸＸちゃん、本がさかさだよ」
と上下を逆に持ち損えさせた。男は付添いのするなりになっていたが、すぐにまた本を逆に回して、ハァー、ハァーと吐息を洩らし始めた。
「こちらでお待ちになって下さい」という看護婦の声がして、待合室のドアーが開いた。ドアーの方を頭にして横になっていた満は、外来の患者だろうと思った。向かいのソファに腰を掛けたその男に、やあと声を掛けられ、その男が、昨日の警務隊員だと知って、満は思わず起き直った。
「いや、昨日は・・・突然お邪魔して・・・」
と奥平は照れたように笑った。
「病院にうかがったらこちらだということなので、失礼だとは思いましたが、またお邪魔に上がりました」
つけられていたのだと思うと、満の背筋を百足のはいのぼるような感覚が走った。
「例の患者に会わせて頂こうと思いましてね、一目会えば、それで問題は解決するんですから。私どもも、隊員であるのか無いのかを確認する義務がありますから」
「そりゃ、お会いになりたければ、会ったって構いませんよ」
受けた不快感への反発と、避け難い脅えによる硬直に堪えて、満はやっとそれだけを答えることができた。
「どうも」
奥平はソファに深く腰を掛けた。奥にいる二人には目もくれず、まっすぐに正面を向いたその顔が、満を眺めているのか、ただ正面を向いているだけなのか、満にはわからなかった。黙っていることが、満には苦しかった。
「奥平さん・・・でしたね。自衛隊には、ああ言った、戦時性の精神分裂症が多いんですか」
奥平は正面を向いたままの顔を微かに傾けた。
「いや、多くは無いでしょう。私は病院勤務ではないので、よく知りませんが・・・」
「じゃ珍しい方ですか、ああいう患者の発生は」
「多分そうでしょう」

女は、けげんそうな表情で、満と奥平を交互に観察していた。

奥平の腰を下ろしている側の窓は、庭に面していた。その窓の下から男の顔半分が現れて、待合室の中を見まわした。奥平は窓に背を向けて座っているので、その男の出現に気づかず、満だけがその顔を眺められた。
満は初診の患者か、そうでなければ、患者の付添いが、中の様子を探っているのだろうと思った。窓の顔は奥平の後姿を認めると、すっと沈んで消えた。顔が消えると満は再び奥平と向かい合う事の重苦しさに堪えねばならなかった。
追跡者に追われた犯罪人の憂鬱は、こんなものに近いのだろうと満は思った。その圧迫感を満は払い除こうとした。俺には尾行される理由は何もない。俺はこいつに追いまわされることは、何もしていない。尾行する方が間違っているのだ。
だが、尾行はすでに、俺の目前で完遂され、動かし難く決定的なものとなってしまった。その帰結として奥平は俺の前に座っている。獲物を狙ったのは奥平であり、狙われ、射止められたのは俺だ。それが証拠に、俺の瞳孔には、奥平の部厚い胸や、角張ったあご、吊り上がり気味の目、とにかく奥平だけしか映らない。奥平の絵姿をを切り抜いて、俺の目玉にペタリと貼りつけたようだ。
「あの・・・ちょっとお待ちになって頂きたいんですが・・・先生におうかがいして参りますから・・・」
「いや、いいんです」
という押し問答が入口から聞こえてきた。やがて待合室に入って来た二人の男を見るや、奥平が弾かれたように立ち上がった。
「やあ、また会いましたね。東ヘラの原本です」
と入って来た男の一人が、奥平に笑いかけた。さっき窓からのぞいた奴だ、と満は気づいた。
奥平は黙って立ったまま、男の心中を見抜こうとするように、じっと見据えていた。
「こいつは間違ってるよ、おい・・・」
奥のソファでは、また若い男が漫画を叩き始めた。
「奥平さん、今日はあなたにインタビューに来ましたよ・・・此の間は張川さんでしたけどね」
奥平は唇をきっと結んだままだったが、太い溜息が、満の所まで聞こえた。
「ここに、例の負傷兵を入れたんですか、なるほど、ここなら一寸気がつきませんねえ。で、病人はどこにいるんです。会わせてもらえるんでしょうねえ。・・・黙ってないで、何とか言って下さいよ」
奥平はゆっくりと腰を降ろすと、目を閉じ、口を開く気配を見せなかった。
「こいつは馬鹿だよ、おい・・・」
若い男が叫び続けている。女は、脅えた目で、奥平と原本を見つめている。その傍の引戸が開いて、中から田代が姿を見せた。
「おう、今日は満員だなあ。・・・やあ、待たせたらしいな。すまん」
満はちょっと手をあげてそれに応えた。田代はすぐ横の若い男に声をかけた。
「どうだい、お母さんの様子は、また具合が悪いのかい」

男は漫画雑誌を投げ出して、
「ええ、この所大分良かったんですが、二、三日前からまたいけない風なんですよ。死んだ親父の幻覚が見えるらしいんです。親父の死顔にいっぱいウジがたかってるとか、ほっぺたの肉が落ちて、白い骨が見えるとかって・・・」
と答えた。

「いかんなそりゃ。まわりで気をつけてあげなくちゃ・・・チョット待ってくれよな、すぐ診てあげるから・・・」
田代が言うと、男は素直に腰をかけた。満は事態がよくわからなくなった。ああやるのも療法の一種なのか、それとも話のように、女の方が患者なのか。満が見つめているのに気がつくと、若い男は、ニヤリと笑ってみせ、ペロリと舌を出した。
名刺を渡した原本は、しきりに病人に会わせることを要求していた。
「そんな筈はない。現に、ここにこうして、奥平さんがいるじゃないですか。何も知らない者が、こんな所にいるわけはないでしょう」
進は、予想以上の結果が出そうなので、気負い立っていた。
「ですから、私はこの、奥平さんかどなたか知りませんが、この方から患者をお預かりした覚えはないんですよ」
やや憮然とした面持ちで田代はやり返している。
「一寸・・・新聞社の方のようですが、私こういうもんです」
自分の持込んだ患者を、新聞社でも狙っているらしいことは、満は、原本と奥平のやりとりから察しがついていた。
「何から話したらいいのかな・・・とにかく、この自衛隊の人は、ここに患者を運び込んじゃいませんよ。運び込んだのは僕なんです。もっとも、その患者が、あなたや自衛隊の方が探してる人かどうか、そこまではわかりませんけど・・・この自衛隊の人は、僕の後をつけてここに来たんですよ」
「あなたが・・・患者を？」
原本は改めて名刺を見た。
「中島さんですね、失礼。・・・どういうことなんです、それは」
「それよりも、どうしてあなた方があの患者を追い回すのか、それを聞かせて貰えませんかね。わけのわからん電話などかけられて、こっちもいささか迷惑ですし、患者は患者ですっかりおびえているんですよ」
と田代は原本と奥平を交互に見た。
「練習中に事故を起こし、事故現場から迷い出した隊員かどうか確認する義務が私共にはあるので、こちらにうかがっているのです」
奥平は原本をにらみながら、一語一語はっきりと力をこめて言い切った。
田代は、聞き終わると、うながすように原本に視線を移した。
「僕としちゃあ、取材上の秘密をしゃべりたくないんですがね」
と原本は言った。
「そうですか。私共としては、お預かりした患者を、みだりにマスコミの前にさらすことはできません。患者の人権を侵害するような行為は法律で禁じられていますからね。しかるべき理由が無いのなら、このままお引取り願うより仕方ありませんね。もっとも、身元引受人が承知されるなら、構いませんが・・・身元引受人は今の所、この中島君になっているんだが・・・どうする」

「一寸待って下さいよ」
原本の声はうわずっていた。

「僕の知ってることで、他に差し支えのないことをお話しましょう。でも、ここじゃ一寸まずいんですよ」
奥のソファーの二人に原本はすばやく視線を送った。
「そうですか、じゃあっと、・・・診察室でも使うとするか」
田代は看護婦を呼んで、原本を案内させようとした。すると、立ち上がった奥平が原本の後に続いて歩き出した。
「困るなあ、あんたが一緒じゃ」
原本は、立ち止まると奥平と向かい合った。
「何がですか。私だって、中島さんや、田代さんのお話をうかがったっていいでしょう」
奥平の目が険しく光っている。
「原本さん、そう神経を立てることは無いじゃありませんか。奥平さんもどうぞ・・・私の方で納得がいけば、患者を診察室に連れて来ますから・・・」
原本は不服そうに唇をゆがめたが、くるりと向きを変えて、看護婦の後について歩き出した。奥平も無言でその後に続いた。
「どうなってんだ、あの連中は」
二人が出て行くのを待って田代が聞いた。
「うん、俺が奥平って奴につけられていたらしんだな・・・」
「それは大体わかったが・・・あの新聞記者はお前の知り合いか」
「全然・・・今日はじめて知ったんだ」
「まずいよなあ」
田代が顔をしかめると、小鼻から頬へかけて、深いしわが刻まれ、肉が引きしまって頬骨の出た顔に、一種、酷薄さを含んだ陰が浮かんだ。これ以上は田代に負担をかけるわけには行かんなと、満は感じた。
「テッヘッヘッヘ、ほーんとに間違ってるよ、こいつは・・・」
突然若い男が叫んでやかましく足踏みを始めた。
「なあ、桧川君、一寸止めてくれないか」
田代の声はいらいらしていた。
「あれは患者なのかい」
満は田代の耳許でささやくように聞いた。田代は、
「あれか」
と遠慮なくあごで奥のソファーをしゃくると、
「桧川君、・・・君が患者かどうか僕の友人が知りたいそうだ。・・・君自身がどう思っているか言ってみろよ」
「そうね」
と若い男は真顔になって、満をにらんだ。
「多少どっか狂ってると思いますよ・・・」
「ウッハッハッ・・・まあ、精神病患者は、おおむな自分は正常だと信じているってのが定説だ

ったけど、この患者は自分で症状を認めているんだぜ」
「患者なのか」

「勤め先での応対も、病院での俺との応対も普通の人と変わったところはないね。だがこの待合室に来ると、奴はああやって気が狂うんだな。気が狂ったまねをすると言った方がいいかな・・・。無理ないよ。病気のお袋を二十歳の若者が一身に背負い込んでいるんだからな。たまにゃ狂いたくもなるだろう。・・・それが病気かどうかは俺にもわからんねえ。自分で何かを発散させているつもりでも、つもりが段々本物になりつつあるかも知れんし・・・近頃の狂いっぷりがパターン化して来た所を見ると、かなり病的なものかも知れんぞ・・・。おい、気をつけろよ」
　若者はふんとひとつ肩をゆすっただけだった。
　「ちょっと妙な客が来てるんで、お母さんの診察が遅れるかも知れないけど、待ってろな」
「もうずい分遅れましたよ」
と若者はそっぽを向いたままつぶやいた。
　「どうせ、今日は一日会社を休んだんだからかまわないんですけどね」
 桧川がちらとこちらを見た、その目の底に、冷たいひらめきを満は見た。
　「早くお願いしますよ、どうしたんですか」
 待合室の扉から、原本が首を突き出した。
　「ええ、今すぐ行きます。一寸打ち合わせをしてたんですから・・・」
 田代がそう言っても、原本の首はなお引込もうとせずに、田代と満を疑わしげに、にらんでいる。田代は扉の近くまで行って、
　「もう少し、ほんの五分程待って下さい」
と内側から扉を押して、原本の首をしめ出した。
　「お前の心構えを聞いとこう。それによって、こっちの出方を考えようぜ・・・」
「それなんだけどなあこれ見てくれ」
 満は、四つに折り畳んだビラをポケットから出し、開いて田代に渡した。読み終えた田代は、
　「で、このビラがどうかしたのか」
とけげんな目つきをした。
　「例の患者を拾ったのが、王子の野戦病院のすぐ横なんだよ」
「王子の？」
 田代の表情が変わった。
　「まさか・・・王子の患者じゃないだろうなあ」
まるで満をなでるような語気に、満は驚かされた。
「そんなことはないだろう。俺は、あの患者が、このビラを見て発病したんじゃないかと思ったんだが・・・どうだい、そんなケースはないのかい」
「ないね」
 田代の声は怒気を含んでいた。
　「ビラを見てというよりも、事実戦闘の場にいたとした方が病状の説明はよくつくよ。音に対する過敏な反応、光に対してもそうだ。ビラが原因なら、音や光に関係ないだろう」
「あの患者がデモに参加していたとしたらどうなんだい」

「まあ、とにかく、お客さんをいつまでも待たせるわけにも行かんから、・・・行こう。話はあとだ」

二人が室を出ようとすると、後ろから、
「先生、大先生はいつ帰って来るんですか」
と桧川が声をかけた。
「明日だよ」
と田代が答えると、桧川は返事もせずに横を向いた。
「あの婆さん、田舎で親父と小学校が同級だったというんで、ああやって来てるんだが、親父は嫌がるんだな。なれなれし過ぎるというんだな。息子の方はそれを察して親父のいない時を狙って、婆さんを連れてくるんだよ」
診察室へ行く途中の廊下で、田代は得意そうに笑った。満は、桧川の目の冷たいひらめきを思い出した。
「診察室に入ると、待ちかねた原本が、すぐに椅子から腰を浮かした。
「まあ、楽にして下さい」
と言ってから、田代は二人いた看護婦に座を外させた。
「私共が問題にしているのはですね。こちらにいる患者さんが、ベトナム帰りじゃなかろうかと言うことなんですよ。というのも、ここにおいでの奥平さんの方が事情にくわしい筈なんだが、あの王子のデモが荒れた日に、あなたは野戦病院に行ったはずだ。違いますか。他からの情報で、私達は、ベトナムから自衛隊員が負傷して帰って来たことを知っているんですよ。だから、何かその辺につながりがあるのではないかと思って、奥平さんをつけまわしたってわけですよ」
原本は早口でまくし立てた。
「信じられませんね、ベトナム帰りなんて」
田代は微かに首を横に振った。
「今時、信じられるものなんて、何もありゃしませんよ。ところで、中島さん、例の患者に会わせて下さいよ。一体、あなたとその患者とは、どういう関係なんですか」
「別に、特別な関係なんてありませんよ。あの辺を通りかかったら、車に乗せてくれと言われたもんでね・・・」
「どの辺ですか」
「例の王子の野戦病院のすぐ脇ですよ」
「ちょっと、野戦病院のどの辺ですか、正門付近ですか、それとも南の方」
「さあ、どこの門だか、僕はよく知らないけど」
「で、いつですか、その患者を乗せたのは」
「デモ当日の晩ですよ」
「ここに、略図でいいですけど、その時の地図を書いてみて下さい」
満は道路の図は楽に書けたが、どこで車を止めたかがはっきり思い出せなかった。
「私としては、早く患者を確認したいので、よろしくお願いします」
地図を前に、空をにらんでいる満を横目に見ながら、奥平が言った。
「そうしましょう。すぐ連れて来ます」

「ちょっと、待てよ」
と満は、室を出て行こうとする田代を呼び止めた。

「先刻の原本さんの話に出て来た、ベトナム帰りがどうのこうのという、あれは本当なんですか、奥平さん」
「私は、ただ上官から命令されて、隊員を保護するためにここへ来ているだけです。おたずねには答えられませんね」
「否定しないんですね」
「いいえ、お答えするだけの資料も情報も手もとに持ち合わせていない、というだけです」
「これ、資料になりませんか」
満は、先刻田代に見せたビラを、奥平の前に拡げた。奥平は手を出さず、一目見ただけで、
「これは悪質なデマですね。自衛隊に悪意を持つ集団が、故意に行うひぼうです。資料にはなりませんね。・・・そういうビラをお持ちの所を見ると、あなたがたもあのデモに参加されたんですか」
と細い目を鋭く光らせた。
「とんでもない。デモなんて、行くわけないじゃありませんか。この忙しい時にハッハッハッ」
満は、おやと思った。冗談にまぎらしてはいるが、田代は逃げ腰なのではないかと思ったからだ。田代は、人に逃げ腰を見せるような卑屈な生き方を軽蔑していたはずではなかったか。

医大に入学した当時、半年ほど、一緒に練習したボート部で、満は田代と知り合ったのだった。尻の皮が破れて、パンツにベットリと血がにじむほど漕がされた後で、ボート部伝統のしごきが、部室で行われた。
「〇〇のオールは浅過ぎる。椅子をやれ。おい、その椅子、力が入ってない」
と四年生が怒鳴る。背を真直にして、膝を椅子の形に上体を保つ姿勢は、普通の時でさえ、一分と保つことは苦しかった。練習の後では、涙が出る程身体の節々が痛み、下肢の感覚が無くなる。怒鳴られた一年生は、
「申しわけありません。気合を入れて下さい」と四つん這いになる。
二年生か三年生か、オールの切れ端で、まだ血の乾いてない尻を、力まかせにひっぱたく。ふりかぶったオールが自分の肩越しに見え、目をつむって観念する。ビューっとオールの風を切る音がして、その音が永遠に続くように思われた後、目の前が真紅に染まり、鼻の奥がつんときな臭くなり、自分では力を入れているつもりでも、いつのまにか手足がのびきって、ガマ蛙よろしくへたっているのだ。
田代も最初は例外ではなかった。ただ、ヒエ〜ッと悲鳴をあげてのびきってから、畜生、と怒鳴ったので二発目をくらったのが、他の一年生とは違ったところだった。
しごきをやる時期は上級生の機嫌次第だったが、一月に一度の時もあれば、二月近く無事に過ぎることもあった。
満や田代にとっては二度目のしごきのとき、田代は上級生に抗弁した。
「調子は合っていました。きちんと呼吸を合わせていたんだから、遅れたなんてことは絶対にない。無茶ですよ」

「お前は、先輩に漕ぎ方を教えようってのか、それとも教わろうってのか、どっちなんだ」

「物を教えるってことは、なぐるってことと同じなんですか。なぐられてまで、教えてもらうほどのことでも無いと思うんですがね、たかが舟を漕ぐくらいのことで・・・」
と声を震わせながらも、はっきりと言い放った。
「貴様あ、たかが舟を漕ぐくらいとは、よくも言いやがったな。根性が腐ってる。叩き直してやらなくちゃならん。やれっ」
四年生の声に応じて、四、五人の部員が手に手にオールの切れっ端を持って田代に迫った。それに応じて立ち上がった田代の手には、いつの間にか、ジャックナイフが握られていた。背中を丸め左腕を上げて顔をかばった田代の構えには、例えオールに打たれても、ふところに飛び込んで相手を刺そうという意図がありありとうかがえた。
その時は、他の三、四年生が止めに入って、けが人を出さずに済んだが、このことのために、却って田代は上級生につけ狙われることになった。
それから間もないある日、着替えをしているちょっとのすきに取り囲まれ、部室に引きずり込まれる所を満は見たが、中で何が行われたのかははっきり判らない。田代もそれは話さなかった。が、田代の頬は赤く腫れ上がり、目のふちの青黒いあざはしばらく消えずに残っていた。
田代はそれきりボート部へ顔を出さなくなったが、そのうち、空手着姿の田代を見かけるようになった。空手部に入ったのだと田代は言ってから、
「いやはや、ボート部なんて子供みたいなもんだよ。しごきの時は、お前、しめられちゃうんだから、一つ間違うとあの世行きだよ」
と言いながらも、それを苦にしている様子には見えなかった。
満が三年になった時、すでに現役を退いて専門のコースの最上級生になっていたＯＢが、右腕を吊って漕艇の練習を見に来たことがあった。
「田代にやられた」とその先輩は簡単に言っただけで多くは語らなかったが、うわさでは、田代に手をついて謝れと要求され、争ってけがをしたあげく、結局詫びを入れたのだということだった。部員達は色めきだったが、当のＯＢが、話はついたのだと言って、仕返し沙汰になることを抑えた。
満は、田代が空手部に入った理由が、その時はじめてわかったような気がした。
（俺は大学に残って、じい様達の鼻毛のちりを掃除するのはまっぴら御免だね。親父は大学に残れと言うんだが、家にいりゃ若先生若先生で通るんだから、医局なんかに入る気は全然しないね。根性が卑屈になったら、いくら腕がよくっても、人間としちゃつまらないんじゃねえか）と豪語したのは、インターンの時だった。皆が何とかして母校の医局に席を得ようと懸命だった時だけに、田代の言葉は多少きざに聞こえた。が、きざだと思い込みたがる自分が卑小なのではないかと、ふと胸の裏側に痛みを覚えさせるほどの力も、その言葉にはあった。

「デモに行こうと行くまいと、あなたには関係ない話じゃありませんか」
満はつとめて冷静さを保とうとしたが、激しい動悸で声が上ずった。
「そうですとも、もちろんです」
奥平は目をそらしながらつぶやいた。

「何だ、中島。お前は一昨日は病院に行っていて、デモには行かなかったんだろう。誤解されるようなことは言わん方がいいんじゃないのか・・・とにかく、連れて来ますよ。ちょっと待ってて下さい」

不自然だと、満には思われる笑顔を、田代は奥平と原本に見せた。目尻も口もとも卑しく崩れていた。
室に入って来た患者は、三人を見て、入口ですくんでしまい、田代が後から押すと、扉に両手でしがみついた。火傷のない方のひげがきれいにそられているのが、かえって痛ましかった。
「カメラはしばらく遠慮して下さい」
田代は、カメラを構えたカメラマンに大きく手を振って撮影を禁じた。
奥平は、つかつかと患者に近寄ると、いきなり手首を握って部屋の中に引込もうとした。
「やめなさい、患者に手を触れちゃいけない」
と満は叫んだ。奥平は聞こえなかったように患者の片手を扉からもぎ放し、もう一方の手首を揺さぶりにかかった。
「田代、何故黙って見てるんだ、君は主治医じゃないか。止めさせろよ」
しかし田代は動こうとしなかった。
満は患者と奥平の中に割って入った。
「医師の許可もなく、患者に勝手なことしちゃ困るじゃありませんか」
「私共は、操作については、警官と同じ権限を与えられています。操作の邪魔をすると、あるいは公務執行妨害罪であなたを告訴するようなことになるかも知れませんよ」
「奥平さん」
近寄った原本が奥平の肩を叩いた。
「あんた無茶言っちゃいけないなあ。どうしてあんたに一般市民に対する捜査権があるんですか。・・・それとも裁判所の捜査令状でもお持ちなんですか。・・・この患者の様子を早く知りたいのはお互い様なんだから」
奥平は患者から手を離した。
「隊員の捜査のつもりで失礼しました。それに、こちらの先生がお困りの様子なので、手をお貸ししようと思って・・・」
奥平は笑おうとしたようだったが、笑い切れずに頬を引きつらせた。
「親切ずくで告訴されるんじゃ、たまったもんじゃないけどね」
これくらいいじめておけば、取材を邪魔するようなことはないだろう、と原本は思った。
「ところで、どうです。我々が手をお貸ししましょうか」
「いや大丈夫です。あまり多人数で無理をすると興奮しますから・・・中島、君ちょっとそっち側の手を軽く握ってやってくれ」
田代はちらちらと奥平の方を伺いながら患者の右腕を抱えた。患者の手は冷たかった。汗か油がぬるりと湿って、爬虫類の肌を思わせた。満は一度握った手をあわてて放して、ズボンの尻にこすりつけた。そして、掌には触れないように手の甲を軽く抑えた。だがそこは、一層冷え切っていた。
ふと、満が顔を上げると、田代の視線にぶつかった。満は反射的に、患者の掌を力をこめて握り直した。悪寒が背筋からつま先まで、神経繊維を震わせて通過した。ああ、初めての解剖学の実習の時に、やはりこれと同じような悪寒を感じたっけ。俺はもう、死体の解剖には慣れっこなっ

ている筈だがな、と患者の顔を見た。患者は案外素直に、しっかりした足取りで歩き出した。
　満は、自分の握った手が、生き物の手であるよりも、死者の手であるほうが、ずっと自然だと思った。生き物の所有する死者の手は、死者の所有するそれとは、全く異質な不調和な感触を持っていた。

原本は
「質問をしていいでしょうね」
と言うなり、返事を待たずに、
「名前と年齢、出身地をどうぞ」
と患者に浴びせた。
患者は原本と向かい合っている。視線は原本の顔に当っていた。しかし原本は患者が自分の顔を見ていないことに、すぐ気がついた。
患者は自分の顔を透視して、もっとずっと後の遠い所を眺めているような目付きをしている。原本はどうしたものかと言いたそうに田代の顔を見た。田代は首を横に振った。
「駄目なんですよ、何度やっても、こっちの問に答えてくれない」
「ふうん・・・」
と溜息をついた原本は、すぐ思い返して、
「君は自衛隊の隊員だろ、な、そうだろ、何とか言ってくれよ・・・」
と質問を再開した。患者は聞こえているのかいないのか、外からは全く変化が見られない。
「君の家族はどこにいるの、奥さんが心配してるよ。・・・駄目だ、全然反応なし。田代さん・・・この顔から何か推定できますか」
「さあ、私はその方の専門家じゃないから・・・はっきりしたことは言えないが・・・かなり深い組織まで破壊されているようですね」
「と言いますと・・・」
「まあ、ちょっと湯をかぶったとか、火に煽られたというのとは違うように思えます」
「火傷ですね、爆発、例えば大砲とか、ナパーム弾の焔でやられたということになりますか」
「僕はそういう火傷の症例を見たことがありませんから、何とも申し上げられませんね」
「推定で結構なんですが・・・」
「先刻も申し上げたように、僕は外科専門じゃないから、推定も何も、無責任なことは言えないんですよ。・・・がまあ、一概に爆発物による火傷とばかりも言えないと思いますよ、薬品類による火傷でも、付着の仕方ではかなり深くまで組織がやられることがありますからね」
「そのガーゼを取って傷を見せて貰えませんか」
「傷を？見てどうなさるんです」
「どうするかは僕の方で決めます。新聞社ってとこには変なのがいるんですよ。写真でも持っていけば、うん、これは何とかだろう、なんて医者まがいの診断をする奴がいないとは限らないんです。・・・どうです、見せて貰えませんか」
すぐには返事をせず、満を見た田代の目に、困惑の色が露わだった。
「僕が治療しようか」
満はそう言ってから、まずかったかなと思った。すでに田代が手がけている患者を助けてくれとも言われぬうちに肩代りを言い出すのは、言われた田代にすれば、無能と極めつけられたと取るかも知れない。
「いや、いいよ。僕がやる。ただフラッシュをたかれると、この患者が興奮するんじゃないか

と思ってね」

「ちょっと、ちょっと・・・それじゃいつ撮らせて貰えるんです」
カメラマンの貝塚がファインダーをのぞきながら、講義した。
「フラッシュを見ると興奮するんですね」
と何かを考えながらのように、一語一語ゆっくり聞いたのは奥平だった。田代はこれにもすぐには答えなかった。
「一般にどういう症状の時に、そんな反応が現れるものですか」
重ねて奥平が聞いた。
「もちろん、強烈な光や音を伴って、発病の誘因が構成された場合が多いと思います。例えば、戦場での恐怖からの発病などにこの例が多く見られる、とものの本には書いてあります。大砲の音や、爆発の光や・・・」
「ちょっと・・・戦場による以外の例はないんですか」
田代はふっと説明をやめて奥平の表情をうかがった。
「ありますが・・・」
「どんな場合ですか」
「戦場類似の場合・・・つまり薬品工場の爆発とか・・・火事場とかいろいろあって一概には言えませんが・・・」
「つまり、その症例からさかのぼって誘因を決定することができるものかどうか、それを教えて下さい」
「そりゃ不可能ですよ、絶対に。やはり傍にいた者が発病当時の状況を言ってくれなくちゃ、症例だけじゃ決定なんてとても・・・」
「できないんですね」
と奥平は念を押した。
「そうとも言えないんじゃないかな」
満は田代が何故もっとよく、症状の全てを語らないのかわからなかった。
「僕が車に乗せた時は、この人の頭の中は完全に戦闘状態だったようですよ」
「ほうそれを、具体的に言うとどんな風でした」
原本は目をぎらつかせた。満はできるだけ詳しく話した。
「なるほど田代さんは今の話についてはもちろんご承知なんでしょうが、どう考えておいでなんですか」
「それだけでは、なんとも・・・」
原本は後ろにいる貝塚に、そっと合図をした。貝塚は微かにうなずくと、だらりと下げていたカメラを、素早く構えて、シャッターを切った。
フラッシュの光がひらめいた瞬間、膿盆の転がるかん高い金属性の音とガラスの割れる音に、室中の空気が逆立った。原本と満が突き飛ばされて尻餅をつき、その間を、獣の唸りに似た声を上げて患者が走り抜けた。
満は胸を押されて腰を落としながらも、患者の行方は見失わなかった。患者は診察台の下に転がり込んで、うつぶせになり、頭を抱えた。室の中の視線は、しばらく診察台の下に凍りついた

ままだった。やがて、
　「伏せろ、ロケットだぞ、伏せるんだ」
という患者の押し殺した低い声だけが、しんと静まった室の床を這い上がって来た。

二発、三発と続けてフラッシュをたいて診察台の下を狙う貝塚を、田代も満も止めようとしなかった。
「こりゃあ、本物じゃないか」
と原本はつぶやいた。奥平は患者の前に屈み込んで、肩をゆすった。
「小野塚か、え、小野塚なのか」
という問いかけは、患者の焦点を失って見開かれた目の中に吸いこまれたままだった。まるで沼みたいな目をしている、と奥平は思った。
（この男が小野塚であることは十中八九間違いはない。だが、連れて帰ることはできない。連れて帰れば、原本の言う事を認めたことになる。しかし、このまま残して新聞記者の自由にさせることは、それ以上にまずい。こいつが小野塚でなければ良いんだが・・・何としてでも連れて来いという命令だったが・・・無理だ、俺の手にはもう負えない）
「ちょっと、電話を拝借しますよ」
原本は急いでいた。いつ他社がここを嗅ぎつけてやってくるか、恐らく時間の問題だと思われる。患者の状態だけでも部長に知らせれば、あるいは、夕刊トップ記事に組まれるかも知れない。
『自衛隊ついにベトナムへ出兵』いや、そこまでは書かないな、『自衛隊員、謎の発狂、頬のやけどは戦傷か？』まあこんな所だろう。ミステリー仕立ての三面記事だ。
原本の目の先を、見出しの活字が点滅した。
（なに、患者を突き止めた、本物か、間違いじゃないのか・・・名前は、所属部隊は何もわからないのか・・・）
しばらく部長の声が止んだ。
（その取材はそれまでにして、社に帰って来いよ。わけは後で話す、とにかく帰って来いよ。それからな、野島の親父さんの娘がパクられてけがしたとよ。王子のデモの事らしい。野島の親父さんが抜けるとあっちが手薄になるから、早速行って貰わなくちゃならんのだが・・・まあ、早くこっちへ来てくれ）
原本は通話の切れた受話器を、しばらくそのまま見つめた。
「何、言ってやんだい、今中止にして、他社に抜かれたって俺のせいじゃねえからな」
話の通じない機械に、原本は口を近づけて怒鳴った。
「おい、中止だよ。引き揚げろってさ」
「おいよ、用意はできてるぜ」
貝塚は、電話の様子ですでにそれと知って、さっさとカメラをショルダーに詰め終わっていた。
「私も失礼します」
と言いながら奥平は患者から目を離さない。
「いつまでも意地を張ってないで、引き取って面倒みてやった方がいいと思うがね」
ショルダーを肩に掛けながら、独り言のように貝塚が言った。
「氏名も確認できませんし、症状も、演習時のものと合致しないようです。一応私共の捜査もこれで済みましたので・・・」

顔は田代に向かっていたが、それが自分に向けられたことばであることは、原本にもピンときた。

「その言い訳で他社さんが納得されるといいですがね」

努めて感情を殺していた奥平の顔に、この時始めて血が上った。深く暗い所から何かが噴き上げて来て、奥平の血を激しく逆流させた。奥平は奥歯を噛んで、侮辱に堪えた。原本のことばなど、何程のことでもないと、分かっていってるのに、一度切れた傷口は容易に閉じようとしない。税金泥棒、政治馬鹿、低能集団、同世代の恥辱、とあらゆる機会に投げかけられた罵言が、どろりと黒い伏流となって出口を求めていて、原本のことばはその流路にパイルを打ち込んだのだった。今に見ていろ、いつかきっと・・・いつかきっと・・・
くるりと原本に背を向け、奥平は室を出て行った。

「すげえ目をしてたなあ、おおこわ、一朝事ある時にはには、まっ先に東ヘラの記者達が射殺されんじゃないのかね。くわばらくわばら、さあ、俺達も引き揚げようぜ」
ドッコイショとショルダーを肩に掛けた貝塚が、のっそのっそと室を出て行く。原本は満へとも、田代へともつかず、じゃあと会釈をして貝塚に続いた。

「何て勝手な奴等だ、言いたい放題、やり放題じゃないか、あれじゃ・・・田代どうするんだ、この患者」
　嵐の過ぎ去った後に、膿盆や時計皿が散らばった診察室の中央で、田代はぼんやりと腕組みをしていた。
満は這いつくばっている患者を、台の下から引き出した。よろよろと立ち上がった患者を見る田代の顔は、当惑し、うんざりし、弱り果てていた。
「昨日、親父から電話があってな・・・Ｔさんと会ったんだとさ、向こうで」
Ｔ教授の講義は、満も一年間受講した。
「へえ・・・知りあいなのか」
「ああ、Ｔさんが、俺をアメリカの大学病院に紹介したいと言ってるらしいんだ」
「アメリカに君を」
「おかしいか、俺じゃ」
「いや、べつに・・・」
だが、やはりおかしい、と満は思う。Ｔ教授の下には、外国留学の順番を、一日千秋の思いで待ちわびている数十人の医局員がいる筈だ。それらの人間を差しおいて、田代を紹介するということは、つまり田代の親父がＴ教授に、何がしかのものを積んで、頼み込んだとしか思えない。
　患者が部屋の真中に座り込んで、ガラスの破片を拾い始めたのに気がついて、田代は看護婦を呼んだ。
「アメリカの入国審査って意外に厳しいんだってなあ・・・こんどのことで、自衛隊とにらみ合いをしたくないんだ、わかるだろう」
「わかる、でもそんなことで入国拒否なんて心配はないよ。ずいぶん左がかった作家がアメリカへ行ったって、新聞に書いてあったぜ」
「そうか」
田代の憂い顔が、やや明るくなった。

「な、とにかく、もう一晩だけ、何とかここにおいてくれよ」

放っておけば、行路病者として警察に引渡す以外に道はないのだが、そうすることに、何か引っかかるものがあった。
「それは、まあ、かまわんが・・・しかし、俺としては・・・」
「わかってる・・・君には絶対迷惑をかけないようにするから・・・な」
満は決意した。
「じゃ明日までだな、親父が帰ってくる前に始末を頼むぜ」
「済まん」
満は急いで車に乗った。今から行けば、病院の昼休みに間に合うだろう。行って話そう。俺が反戦同盟へ行き、お前はアメリカへ行くってわけだ。買いかぶってたんだ、お前を。空手修業も、結局の所、卑屈な生き方の一部にしか過ぎなかったってことか。
シートに触れる腰の骨が、ふわりと浮きそうで落ち着かない。恐れてるんじゃない。慣れないだけのことだ。俺は興奮してるんだ。とにかく、俺は慣れない世界へ向かってるんだ。はみ出しかかってるんだ。変な気分だ、まったく。

６章 深手を負って

社会部の徴用を解くから、すぐ野島の許へ帰れ、部長は原本にそれだけしか言わなかった。取材したメモをすっかり源した後で、
「後は誰がやるんですか」
と聞くと、
「まあ、何とかなるだろう」
という答だった。
自分の取材が遅れているので、部長が業を煮やして、担当を外したとばかり思っていた原本は、部長の答えが意外だった。後任の担当がまだ決まっていないらしい。決まっているなら、自分と今後の取材について打ち合わせが必要なはずだ。取材を打ち切るのか、何故だろう。
部長は、渡したメモにざっと目を通しているようだった。打切りか、継続か、それを聞かないうちは動けないぞ。原本は手近の椅子を引き寄せようとした。部長は黙って、原本の顔を見つめたまま、メモをピンで止め、
「気狂いを相手に、派兵は確実だとか、ベトナム帰りに違いないなんて、二度と言うな。新しいネタが出るまで国会へ戻っていろ」

国会の記者クラブは閑散としていた。二十日後の臨時国会召集まで、仕事らしいものはない。各省庁づめの記者の方が忙しい季節だった。
望田に会うことを考えると気が重い。取材に失敗したからではない。今でも、あらましは思い出せる。書類にして望田に渡すことはできる。だが、何故かどうも、気が進まない。部長の言うとおりかも知れない。
「原本君、ご苦労だったね」
後ろから声を掛けられ、振り返ると、くたびれた表情の野島が立っていた。小鼻から目のふちにかけて、薄く脂が浮いている。
「ああ、どうも・・・社会部失格で追返されてきました。またこちらで使ってやってください」
「それじゃ、こっちはまるで失格者のたまりみたいに聞こえるじゃないか」
「そういうわけでもないですよ、優秀なチーフがおいでになるから・・・ところで、富美子さんの具合は如何ですか。夜にでも、病院にうかがおうと思ってたんですが・・・」
「いいんだ・・・はい、これ。富美子が借りたそうだね」
野島は札入れから、一万円札を抜き出した。
「君にもとんだ迷惑をかけちゃって・・・不出来な娘を持つと、親父は恥をかくよ」
「しっかりして下さいよ。娘がけがをしたくらいで、しんみりしないでさ」
手近の椅子に馬乗りになった原本は、その背であごを支えた。
「進ちゃんよ・・・富美子のけがって言うのはなあ・・・」
自分のひじかけ椅子を引き寄せ、ああ、よいしょと小さなかけ声をかけて腰を落とす野島が、常

よりも、ひとまわり小さく見えた。
「富美子は、流産したんだよ」
「へっ、・・・まさか・・・」
思わず、椅子の背を握りしめて、野島の口元を凝視した。

「全く、馬鹿な娘だ、ふっふ」
野島の顔が歪んだ。
「子供の父親は君なのかい。近ごろよくデートしてたろう。ちゃんと知ってたぞ」
「チーフ・・・そんな・・・」
「冗談だ。わかってる、君じゃないって。君じゃないから、俺としては、やりきれないんだよ、実は・・・」
「チーフ、僕は、お嬢さんに」
結婚を申し込んでいるんです、と白状しようとしたが、野島は唇に指を当てて、押し止めた。
「娘のことは、もうよそう・・・なるようになるさ、父親なんて、娘にゃ全く手も足も出せねえんだからなあ。ありゃまた愚痴だ、ところで、君も、あんまりがっかりするなよ」
「えっ」
何の事かと一瞬迷った原本は、それが取材のことを指しているのだとすぐに気づいた。
「いやあ、がっかりなんかしてませんよ」
「そうか部屋に入った時、君の背中が妙にしょんぼりしてたから、がっくり来てるなと思ったんだが・・・その元気なら結構だ」
富美子の流産が原本の頭にしっかり貼りついている。けれども、父親たる野島が、そこから離れようと努力しているのだ。原本は話題の転換に積極的に協力しなければならぬと思った。
「チーフ、そのことなんですがね、ありゃおそらく本物のベトナム帰りですよ。それをどうしてボッツリ中止にしちゃうのか、僕には全然理解できないできないんですよ」
「自分で追いまわしている事件は、はたで見るより大きく見えるもんだよ」
「しかし、事は憲法に関する重大事件ですよ。これを抜いたら本年度の十大ニュースの筆頭間違いなしでしょう」
「そりゃ我々にすりゃそうかも知れんが・・・」
「チーフはあんまり乗り気じゃないようですね・・・興味はないですか、自衛隊問題には」
野島は小鼻にしわを寄せ、進をからかうように言った。
「興味って言うと・・・どんな興味だい」
「海外派兵ですよ、憲法違反ですよ、決まってるじゃないですか」
「それなら俺は興味ないね、正直の所」
「へえ、そりゃまた、どうしてです」
「どうしてって・・・」
野島は退儀そうに腕を持ち上げて、首筋をポリポリかいた。
「軍隊はすでにあるんだろう。それだったら戦争があったっておかしくはないだろう」
「ちょっとひねりが甘いですね」
「そうかな」
「そうですよ」
ふふふと、野島はひとりで笑った。
「俺はね、九条論争ってのは馬鹿らしくてね。やる気がしないんだよ」

「なぜ」

「うん、もともと、戦争を放棄しようってのは冒険だったんだ。かけだったのさ。まあ戦争に負けて、どん底状態だったから考えついたかけだったんだろうがね。他の国から攻められても、もう取られるものは何もないってわけでな・・・。しかし、俺は信じてた。軍備を全廃した文化国家の設立をね」
「へえ、そうですか」
「へえって奴があるかい。まじめに聞けよ」
「まじめですよ」
くしゃくしゃになった袋から、しわだらけの、煙草を出し、指でしごいてまっすぐにしながら、野島は話を続けた。
「平和憲法ってのは、もともと実験なんだよ。どこの国もやった事がないんだから、先行き何が起こるかわかったもんじゃない。しかし戦争だけは起こらないだろう、そう思って、当時の日本人は賛成したんだな」
「実験ですかあれは」
「そうさ、まわりの国が軍備を持ってる。日本だけが非武装なのは却って戦争を起こすもとになるなんてのは、だから憲法の当初にあった実験精神を、根本的に否定していることになるな。・・・中国でも、ソ連でも日本を侵略したけりゃすればいいんだよ。・・・君は覚えていないかな、鬼畜米英ということばをさ。ルーズベルトの頭に角が生え、チャーチルには牙が生えていた。鬼畜に占領されても、要するに日本は大したことはなかったんだから、他の国に占領されたって、たかが知れてるよ」
原本は鬼畜米英ということばを知らなかった。しかし、他国と戦争をするより他国に占領された方がいいという考えは、確かバートランド・ラッセルじゃなかったか、と思い出した。
「そういう覚悟でできた憲法なのに、いつのまにか、また周囲の国際情勢からみて自衛なんてことになっちゃ、馬鹿らしくて話にならん。ペテンにかけられたようなもんだ。人間、金ができると道徳的に不潔になるもんだが、国家も同じだな。
不潔な政府がペテンを奨励すると、いくらか暮らしが楽になった国民が、喜々として自分からそのペテンにかけられに行って、自衛隊賛成なんて言い出すんだから、まったく嫌になる。馬鹿らしいってのはそのことさ。豚を相手に議論できんよ。げに捨て易きは高邁なる道徳にして、拾い易きはおぞましき物の具・・・どうだ名文句だろう」
珍しく、野島が長口舌をふるった。原本は一世代前の雰囲気が、何となくわかるような気がした。
「それは、誰のことばです？」
「今のか、俺が即席に作ったのさ」
「道理で、さえない文句だと思った」
野島はスパスパと忙しげに煙草の煙を吐いた。そうすると、俺も豚の仲間なのかなと原本は思った。
「それになあ」
と野島は続けた。

「片方に憲法九条があって、もう一方に軍隊がある状況だって、これも実験だよ。軍隊をとるか、憲法をとるかで、互いに争う時期が、いつかはやってくることが約束されたようなもんだ。先行きがどうななるか、見通しのつかん点では非武装中立と全く同じだよ、再軍備論も。昔通りに国土を軍隊が守っいるような幻想の上に安心したがる奴が多いが、実際は危険なかけだろう。日本全土を実験台にしてかけるんなら、俺は戦争の可能性が少ないかけを選びたいね、今でも」

「しかし、今さら自衛隊を解散するわけにも行かないでしょう。政府が、万一、そんなことしたら、クーデター騒ぎだって言うじゃないですか」
「だからさ、そういうことを考えると、阿呆らしくて、馬鹿馬鹿しくて嫌になるのさ。日本のデカダンスの淵源また実にここに存すってわけさ」
「また名文句」
野島は苦笑して、うーんとのびをすると、ふっと暗い影を表情に浮かべた。どこまでまじめに話したやらわかったもんじゃない、と原本は思った。興味がないなどと言いながら、結構いきり立って話すところを見ると、興味は人一倍あるに違いない。それならば、俺の取材の話をもっとまじめに聞けばいいのに、何となくすり抜けられたような気分だ。しばらく黙っていた野島が、ひとり言のようにつぶやいた。
「富美子の奴め、サバサバした顔しやがって」
沈んだ声で、それまでの話とは何の脈絡もなく、野島の話題が飛び移った。娘の話は後にしようと、自分で行った癖に、ダラシがないねえ、と進は思う。
「警察へ引っぱられて泣きっ面でもしてるかと思ったら・・・まったくいつの間にあんな娘になっちゃったのかねえ」
「一緒にパクられた男はどうなったんです。
太田っていう奴は・・・」
「またブタバコだよ・・・富美子とは同窓で何度か家に来たことのある子でね、まじめでおとなしい子だったんだが・・・近頃の若い奴等のやることは俺にはよくわからんよ・・・あんなことやってて絵がかけるもんかねえ」
「俺は無性に寂しい。というよりとりとめもなく、空中に漂っているような気分なんだよ原本君。まったく父親ってのは何なのだい。
娘がどこでなにをやらかしたのかもわからず、いきなり警察へ呼び出されて、流産間際の身柄を引渡されてさ、聞けば、デモに参加した後反戦同盟の副議長と潜伏中を踏み込まれたって言うじゃないか。世の中いつからこういうことになったんかね。我が娘の昨日のことが親父の俺にさえ、想像もつかないなんて・・・別に・・・珍しいことじゃないだろうが。
俺は比較的冷静に我が子を観察してきたつもりだったが、あの娘が政治的に過激な方に傾こうとは想像さえしなかった。親馬鹿なのかねえ。・・・自分の身の守り方さえ知らない娘が・・・俺の手の届かない所で、傷つけられ、踏みつけられたと思うと・・・情無いねえ。守ってやりたいのに、俺にはどうしようもない。どうしようもなく傷ついてからしか帰って来ないんだからなあ。見ちゃいられないよ、危っかしくて。
あなたが、富美子を甘やかすからこういうことになるんです。これからは、富美子のことを、あなたにも一緒に真剣に考えて頂きます。あたしばかりに家のことを任せっ切りになさったのがいけないんですと、いつもはおとなしい女房が俺に毒づいたっけ。これから考えたんじゃ遅いんだよカアチャン。人間て感情的になると、思考も言葉も画一的になるんだな。今のカアチャンのセリフは不良行為で補導された少年の母親の決まり文句だよ、と思いながら、今はそんなこと考えちゃいけない時なのに・・・と妙に気持ちが落着かないんだな。

富美子は麻酔からさめぎわに、ひとしきり「痛い、痛い」とうなされたが、意識が完全に戻ってからは、ほとんど口を利かない。と言って思いつめた風でもない。白い顔をして髪をバラリと枕に投げ出して寝ているところは、我が娘ながら色っぽいと思ったねえ・・・。それだけ、娘が元気に見えたってことかな。・・・三つの時、ハシカにかかり真っ赤な顔をしてハァーハァーと喘いでいた時は、俺にこんな余裕はなかったな、とちらと思い出したっけ。

子供が小さい時は、子供は親の肉体の一部なんだよな。大きくなってしまったら、もう遠くの方へ行ってしまうんだなあ・・・このまま、もしも富美子が死んだら・・・と思った時始めて、幼児に抱くような切実な感情が、俺の心に湧いたっけ・・・育っちまった子供が、親の所へ戻って来ることがあるなら、そりゃその子が死んだ時だってことが、俺にはよくわかったよ。あきらめだよ・・・あきらめだ・・・生きて元気でいる限り、子供は親の所へ戻ってなど来るもんか。まして親の所へなんぞ・・・」

「チーフは割に古いですね。絵をアトリエの中で画くなんて思ってる手合いは、近頃じゃ少ないんじゃないですか。大きな舞台の上で、ヌードになって、身体中に絵具をぬたくって逆さ吊りかなんかになって、それで書き割りみたいなキャンバスへボイーンと体当りをするなんてのが、近頃の流行なんだから・・・」

「面白いかね、そういう絵は・・・」

「さあ、見る奴よりも、やってる方が面白いんじゃないですか。型にはまって、ちんまり金をもうけるよりも、やりたいことを、やり抜こうってところには、僕も大いに同感なんですがね」

「ふっふっふ」

野島が笑った。何がおかしいのか原本にはわからないままに、原本は何となく笑った。

ふっと、自分の取材に注ぎ込んだエネルギーが空虚なものに思われてくる。派兵しようとどうしようと、それが俺に何の関係がある。

何が現状と変わるんだ。気違い相手に・・・か。いいじゃないか、どうせ読者の退屈しのぎにしかならん記事なら、気違いだろうと、馬鹿だろうと・・・

「やあ」
大杉が笑いかけたので、河井も思わず頬をゆるめようとしたが、筋肉が思うようにゆるまなかった。刺すような視線が、河井の笑いをさえぎった。大杉の横に座って、陶器のように無表情なあいつ。
河井は、二人と向い合って置かれた椅子に腰を下ろすと、窓の方を見たまま黙っていた。
ガラス窓から午後の日が射し込んでいる。窓際に吊るした鳥籠で、カナリヤが透き通るような声を震わせている。
「始めましょうか」
張川が言った。
「そうだな・・・記録の用意はいいね」
大杉は張川と河井、それに記録係の金沢三尉を順に見まわした。笑いの影が消えたその顔には、極めて曖昧な、言ってみれば表情のさまざまな残滓が頼りなげに漂っていた。
「心得ているだろうが、今度のことについての調査には、君の協力が是非とも必要なのだ。君の知っていることは、その一切をこの場で、我々に話してほしい。いいね」
河井は窓を向いたまま、返事をしなかった。
大杉は張川と顔を見合わせ、査問開始の合図をした。
「特殊編成中隊をベトナムへ派兵する計画の立案責任者は誰でしたか。その姓名を言って下さい」
張川は当初から内容に踏み込んだ。型通りの人定尋問を省くように、大杉から注意を受けていたからである。調査の内容如何では、この会合そのものが全て存在しなかったことになるかも知れないのだった。
「派兵ではない・・・演習だ」
跳ね返すように河井が答えた。身構えた固い声だった。
「では、その演習の立案責任者は」
「自分だ」
「その計画は上官の許可決裁を受けましたか」
河井は答えなかった。張川はこだわらずに質問を進めた。
「ここにあるのは、決裁書のコピーですがこれによると、昭和三十Ｘ年Ｘ月Ｘ日付けで上原陸将の決済の下に処理されていますが、上原陸将は貴官の直属上官ですか」
「その通りだ」
「では、この計画の責任者は上原氏ですね」
「その決裁書をちょっと・・・」
「どうぞ、よく御覧になって確認して下さい」
河井ははじめて二人に視線を向けた。細い、一見眠たげな瞼の中で光る感情のかげりのない、無機物の光沢に似たまなざしに、大杉はある感動を覚えた。陸軍士官学校の生徒だったころ、べら

んめえ口調で講義する妙に崩れた所のある教官がいて、不思議な人気を集めていたが、その教官の視線に良く似ている。歴戦の勇士だというその教官は、右腕に貫通銃創を負ったため、腕の上げ下げにぎこちない所があったが。

「この書類は確かに私が書き、上官に決裁を仰いだものだ」

「するとこの演習計画については、当然上原氏も知っていたわけですね」
「いや、それは違う。その書類にもある通り、計画は米軍との共同演習を沖縄方面で行うというだけのもので、これは例年、演習に行く時提出する書類と同じものだ。上原氏もそのつもりで決裁したものではないかと思われる」
「すると、途中で計画が変更したのですか、それとも、始めからベトナムへ行くつもりの計画だったのですか」
河井はじっと前方を見て、考え込んだ。次に出た言葉は張川を驚かせた。
「そんなことを聞いてどうしようと言うんだね。どっちだって同じ事じゃないか」
「河井君・・・」
大杉が何か言いかけるのを、張川はそっと掌を上げて制した。河井はそれを見逃さなかった。ここへ来るまで、相手が顔見知りの大杉ならと、何となく安心していたのだがどうやら、それは間違いであったようだ。相手は大杉ではなく、この張川という奴らしい。
「河井さん、何故、どっちでも同じことだとおっしゃるのか、説明して下さい」
「説明するまでもないだろう。こちらが見たいと思ったって、米軍の方でそこは都合が悪いからこっちにしてくれと言われれば、予定を変更するのは当然じゃないか」
「なるほど・・・今までに、その種の予定変更は何度くらいありましたか」
「覚えてないな」
「では、念の為申し上げておきましょう。記録に残っている限り、演習予定地が上官の許可無く変更された事例は一件もありません」
「そうかね。他の部隊の事はよく知らなかったが・・・」
「書類について、もう一件だけお訊ねします。沖縄方面とありますが、この「方面」とはどこまでを指すのですか」
「わからんね。そんなことは。いつもそう書いているから、それに従ったまでのことだ」
「書式ではなく、河井さん自身の判断ではいかがですか」
「そう、米軍統治下の琉球列島全部と、その領海及び近海、ということになるかな」
「その中にベトナムは含まれませんね」
河井は小鼻の脇に微かに笑いらしきものを浮かべただけだった。
「次の事項を質問する前に、隊長から何かお有りでしたら」
と張川が言った。大杉は軽くうなずいた。
「うん、この計画についての、米軍との関係について説明して貰いたいな。つまり、米軍の要請があって、それに従って行ったのか、それとも、こちらからベトナム行きを持ちかけたのか」
「まあ、両方だね、こちらの方も何となくそんな気がしていたし、米軍の方でもその気があったと言う所かな」
「隊長、その件については、後程の質問事項に挙げてある筈ですが、その時では遅いですか」
張川に質問をさえぎられて、大杉はむっとした顔をして口を閉じた。
「特殊編成中隊は、どういう目的でいつ頃編成されたのか説明して下さい」
「目的は国内遊撃戦要員を養成すること、編成は二年前だ」

「この中隊の存在が、防衛年鑑、その他に公表されていないのはどうしてですか」
「秘密だからに決まっているよ」

「警務隊に対しても秘密を守らねばならないのですか」
「いや、そういうわけではない。国内戦専門の隊の存在を一般に知らせるのはどうかという配慮から秘密にしてあるだけだ」
「おかしいですね。自衛隊そのものが、海外で戦えないわけですから、もし戦闘があれば、全て、国内戦である筈で、この中隊だけが国内戦専門というわけではないでしょう」
「いや、国内戦と言っても、対ゲリラ戦という意味だ」
「しかし、対ゲリラ戦の訓練は一般隊員にも実施していることは御存知ですね」
「もちろんだ」
「では何故、この中隊だけを特別に訓練する必要があるのですか。他に目的があったのではありませんか」
「他に・・・どんな目的があったと言いたいんだね」
「それをお聞きしているのです。お断りしておきますが、これは私的な会合ではありません。職務によって行う質問ですから、河井さんも、できるだけ協力して下さい。事実をありのまま述べて頂きたい。故意に虚偽のお答えをなさらぬよう、一言申し上げておきます」
パチッパチッと微かな音がした。張川が口を閉じ、ふっと部屋の中の音が消えた時に、その音が河井の耳に響いた。カナリヤがえさをついばんでいるのだった。パチッ、とくちばしで噛み割られた粒餌が、乾いた音を立てて河井の耳の中をくすぐった。
「特殊編成中隊の隊員は」
という張川の声が、遠くの世界からの声のように、ぼんやりとしか聞こえなかった。
「ほとんどが住居地を持っていない。これは偶然とは言えませんね。連絡先もない。係累もない。こういう隊員ばかりを集めた目的をお聞かせ下さい」
「・・・・・・・・・」
「実戦に参加させる意図が編成時からあったのではないのですか」
「軍隊の実力というものは、実際に戦闘させてみなきゃわからんものさ」
「すると、実戦に参加させる目的で、編成されたと仰有るんですね」
「そうは言っておらん。しかし、多大の公費をかけた自衛隊が、有事、どれだけ働けるかが、我々にも不明だというのでは、話にならんだろう」
「戦闘経験の必要性の有無をお聞きしているのではありません。中隊編成の意図を・・・」
「どうとでも、勝手にとり給えっ」
河井は鋭く言い放って、横を向いた。
「勝手では困るのです。いかなる目的で特殊編成中隊ができたか、これをはっきりさせて頂かないと、後の質問へ進めません」
「では答えよう。でき得る限り、実戦に近いゲリラ戦を経験させ、ゲリラ戦における戦術上のデータをこの中隊から得るのが目的だ」
「でき得る限り、と言いますと、この中隊がベトナム戦へ参加する可能性は当初からあったのですね」
「演習、ないし見学としてベトナムへ行く可能性はあった。ただし、ベトナムと限ったわけでは

なかったが・・・我々としては、ゲリラ戦の生きたデータを手に入れられれば、どこでも良かった」
「その演習、あるいは見学の際、必然的に死傷者が出ると言う想定があった。その為、係累のない隊員が、特に選ばれた、そう解釈してよろしいですね。

「そうだな、万一の場合に対する配慮が、全然無かったとは言えない」
（俺は自衛隊の大方の意志を実現したと思っていたのだが・・・今訊問されている俺は、一体何なのだ。まるで反逆罪でも犯したような具合だ。間違ってはいないはずだ。俺が泥を被らなければ、他の誰かがやらなければならない事なのだから。結果が悪かったのは、仕方がない。勝敗は時の運というが・・・失敗だった、米軍を信じ過ぎたのは。そうなんだ。だからこそ、自衛隊がもっとしっかりしなくてはならないのだ。何故、俺が犯罪人として追求されねばならないのだ、同じ自衛隊員の手によって・・・）
「隊員は、それぞれ自分の役割を納得していたのですか」
「納得していた・・・と思う。個人個人に会って直接確かめたわけではないが、各隊各班の長から説明させておいた」
「戦術プラン作成上のいわば実験材料となることにですか」
「言葉を慎め」
河井の頬の筋肉が小刻みに震え血の気の引いた唇から、熱く熱した声が、棒のように突き出された。
「冷静にお願いします」
張川は兇器に似た怒声を冷たく払い落とした。
「実験材料とは何ということを言うか。日本のために、貴重な生命を落とした隊員を遇する道を心得て貰いたい、同じ隊員ならば・・・」
「河井君、そう興奮せずに・・・」
という大杉の声は、冷静への意志を堅持しようとする張川と、それを灼き尽くし溶かし去ろうとする河井の中間に、糸くずのように頼りなく舞い上がって消えた。
「実験材料と言いたいなら言うがいいさ。しかし、あえてその材料になろうとし、身を捨てた隊員をおとしめる資格が、君にあるのか、そんな権利は誰も持っていない筈だろう、どうなんだ。ええ、どうなんだ。・・・大杉君、僕はこんな態度で取調べられるのには堪えられないね。何とかしてくれないか」
大杉はその言葉に、首を振って拒否を示した。
「この会合は・・・取調べじゃない、誤解しないで貰いたいんだが・・・君も知っているだろうが、長官の特別命令によるものだ。関係者は極少数に限定されている。会合に出席する者も、ここにいる者だけで、事故による欠員の補充も認められていない」
「わかってる・・・しかし故人を侮辱されることにはどうにも堪えられん。張川君、少し気をつけて物を言ってくれたまえ」
「わかりました。できるだけ気をつけましょう」
（俺が死者を侮辱したって、とんでもない、俺は死者を正当に遇したいと思えばこそ、お前さんには少々聞き辛いだろうことも、あえて聞いてるんじゃないか。お前さんがいくらそうやって、喚いたって、闇から闇へ葬られた隊員が浮かばれるわけじゃあるまい。センチになって救われるのはお前さん一人だけだ。
俺は手加減などしないぜ。お前さんの一人よがりで、何が起こったかを、お前さん自身によく知

って貰う為にもな。）

「僕は言いたいんだよ。張川君は実験材料だと言った。或る面では、そう言われても仕方のない所があったことは認めよう。しかしだ、しかしだよ。その実験材料に誰かがならなきゃならんだろう。俺は嫌だ、私も嫌だというのでは、自衛隊はいつまでたっても、高級アクセサリーの段階を抜け出せないではないか。実用の防衛力を蓄えられないではないか、我々の職務は、責任はどうなるんだ」

「私見を言わせて頂けば、自衛隊全部が実験材料なのではありませんか。何も一部の隊員が人目を盗んでやることではないと思います。防衛一筋の正規軍という考え自体がすでに実験的なのですから、その点を一般国民に納得させた上で、ベトナムでも、どこででも演習するべきでしょう。大切なのは国民の合意ですよ。さらに・・・」
「ちょっと待て。記録を中止しなさい」
金沢が速記の手を止めて、声を掛けた大杉の顔を見た。
「張川君、君のご高説は、いずれ聞くとして今日の仕事に移ろうじゃないか。金沢君、今の張川君の発言部分は記録から除くこと。その間十分間休みを取ろう」
大杉は右瞼の裏に鈍い痛みを感じた。じわじわと職種を延ばした痛みの余波が、顔の右半分に粘りついている。何となく身体全体がだるかった。
長官が、今日の調査結果を読んで、どう思うかは知らないが、それが簡単に公表されるものではない、とこの仕事を命じられた時にも考えたことを、痛む瞼を抑えながら再確認した。要するに無駄な仕事なのだ。適当にやっておけばよい。張川の訊問はやり過ぎのきらいがある。と言って、それと注意するわけにもいかない。なぜあんなにしつこく非常に追求するのだろう見境というものがない。
河井は鳥籠の針金を軽く叩いて、カナリヤを驚かせていた。赤みがかった黄色の縮れ毛が、細い体に巻きついていて、それがチョン、チョンと止まり木と針金の間を目まぐるしく移り飛ぶ様子は、あっちでボン、こっちでボンと火の玉が立つ情景を連想させた。鳥籠の針金の向うは窓、窓の向こうはビル、殺風景この上なしの東京の空だ。ベトナムは美しい国だった。木々の緑も深く鮮やかだった。稲田の広がりも見事だった。その稲の中からロケット砲が飛んでくるなどと、例えばあの国が全くの平和状態であったとして、想像ができる者がいただろうか。いたとしても、誰も一顧だに価しない妄想として、泡のようにその場で消えること間違いなしだ。
最も狂気に近い妄想こそ、最も現実に近寄った予感かも知れない。少なくとも、日本の国内でロケット砲が飛び交うぐらいのことは、もはや想像とさえ呼べない程の、近い将来のことと覚悟しておくべきだ。俺はそう思う。目前の平和など、幻想にすぎない。あのビルも、自動車も、道も、破壊されつくして赤茶けたくず鉄の塊が、一時仮の姿をとっているに過ぎない。仮装という奴は人を焦立たせ、せき立てる。
張川は、奥平からの報告のことを思い出していた。どういう形ででも、オノサワという患者をこちらに引取らねばなるまい。隊員として認定しないままに、身柄を移す方法はあるだろうか。隊長は、当分手を出さない方が良いというが、新聞記者が嗅ぎつけている以上放っておいては、却ってまずいのではないか。隊長さえ納得すれば、打つ手はあるはずなんだが・・・。

「さあ、始めようか」
という大杉の声で、四人はまた定席に着いた。
「記録の訂正は終わったね」
「はい、命令通りに、張川一尉の最後の発言部分を削除致しました」
大杉と金沢の応答の間に、迂回していた「時」が、張川の中でも、河井の内部でも、再び方向を

立て直して直進を始めようとしていた。張川は調査項目をメモした紙片を手繰っている。河井は、正面にいる大杉の額の辺に視線を止め、張川の訊問を待っていた。
「特殊編成中隊の経理については、まだ書類が来ていませんので、今日の質問からは省きたいと思いますが・・・」

「やむを得んな」
と大杉はうなずいた。
　「それでは、中隊の演習と米軍との関係についてですが、このプランの作成過程のどの段階から米軍がタッチしてきたのですか」
「どの段階と言われても・・・ちょっと返事の仕様がないな」
「では、中隊の演習プランは誰が立案するのですか」
「私だ、先刻も答えただろう」
「一人で、ですか」
「そうなんだが・・・この中隊の編成時から、米軍の連絡将校が常駐している。そいつらと打ち合わせしながらプランを作っていくというのが現実だ」
「演習場にベトナムを使用することを初めに提案したのは、その連絡将校ですか。それともこちら側ですか」
「私の方からだ」
「それで、米軍はその提案を受け入れたのですか」
「そうだ」
「すぐにですか」
「そう、すぐにだね」
「おかしいですね。河井さんが提案し、連絡将校が納得した位で、ベトナムへ千五百人からの隊員が入国できるものなのですか、米軍は検討期間も置かずに受け入れたのですか」
「そうだ」
張川は次の質問を発する前に、大杉の顔をちらと盗み見た。大杉は目を閉じ、拳を額にあてていた。
「では、その米軍連絡将校の氏名階級をお聞かせ下さい」
「米軍海兵大隊少佐、ウイリアム・オークレイ」
「隊長、この場にそのオークレイ」少佐の出頭を、求めるわけには行きませんか」
大杉はもの憂そうに目を開いて、
「駄目だ。米軍に関する部分は省略せよという命令だ。出頭させられない」
と答えた。
　「米軍側では、すでに、中隊をベトナムへ迎える準備が整っていた、と考えていいわけですね。そうでなければ、一将校の判断で受け入れられることではありませんから・・・」
「それは向うに聞いてみなければわからないね」
河井は答えながら、一瞬大杉の方を見た。
「では、この点については、長官からなり、外務省を通してなりして、米軍の意向を確かめて頂くことにしましょうか。米軍としても、自衛隊が海外で戦闘できないことをすでに承知のはずなのに、あえて協力した上は、何か考えがあっての事と思いますから」
「それは、できないよ、張川君」
と大杉が、あいまいな笑いを片頬に浮かばせた。

「では一体、私達はここで何をしているんですか。この件で重要なのは、中隊側の問題ばかりではない、むしろ米軍の動向に問題があることは隊長もお聞きの通りです。その米軍に手をつけてはいけないと言われ河井さんに何も話して貰えないとなると、質問はこれでおわりということですね」

ひじかけ椅子の上で、大杉は二、三度腰をよじって、尻の落着き具合を確かめた。そのこめかみが、ぐりぐりと動いた。怒ったようだ、その怒りを外に出してくれれば、あるいは、河井の心に何か変化が怒るかも知れない。さあ、怒鳴るなり、卓を叩くなり、何かやって下さいよ。いつものように怒りを抑えて、だらしのないえびす顔なんかしないで、思い切って、俺を怒鳴るんだ。さあ。

「河井君」

椅子を後ろに押しのけて立ち上がった大杉は、卓を回って、河井と直接に向かい合って立った。

「この問題が自衛隊内部の事として片がつくかつかないかは、非常に重大な事だと私は思っているんだ。もしこれが日米両国の正式外交ルートを通じての情報交換ということになれば、それが洩れた場合、政府の立場が極めて困難になる恐れが出てくる。

もう一つ、自衛隊の存在そのものが、強い批判を受けることになるだろう。長官もこの点を考えて、あえて、米軍当局との接触を禁じられたのだと思う。しかし、一方では、できるだけ正確な事態の調査を希望されているのも、同じ理由からだと思える。一番良いのは、君が全てを話してくれることだ。そうすれば、万事丸く行くんだ。話す気になってくれないかな」

河井はひざを組み重ね、両手をだらりと体側に下げたまま、大杉の口元あたりにぼんやり視線を漂わせていた。大杉は河井の回答を待った。

「どうしてだい」

眠そうな河井の声がした。唇をあまり開かずに、低いくぐもった声だった。

「えっ、何が」

大杉は耳を近づけようとした。その耳を平手で叩きつけるような鋭い声がほとばしった。

「どうして、自衛隊が批判されねばならないのかと聞いているんだ」

「そりゃ君、言わなくてもわかってるだろう。自衛隊に対する国論は・・・」

「俺に世論調査の結果でも講義してくれるつもりかな。先刻から聞いていりゃ、長官長官とまるで全能の神様みたいに言うじゃないか。間違えてもらっちゃ困る。俺は長官の為に自衛隊に奉職してるんじゃない。国民全部の為だ。一年か二年で首をすげ替えられる政治家共がどうなろうと俺の知ったことかい。言えと言うならいくらでも言ってやるさ。

そのかわり、記録削除など金輪際するなよ。・・・俺は今も言ったように、政治家なんてこれっぽちも信用していないんだ。どだい現代戦のイロハすら知らない政治家ばかりじゃないか。防衛能力を高めるために何が必要で、どうすればいいかわかっちゃいないんだ。わかれというんじゃない、予算の分捕り位が分不相応の奴等ばかりなんだから、後は口を出すなと言いたいんだよ、俺は。

世論がどうの、憲法がどうの、国会がどうのと、手かせ足かせに猿ぐつわまで噛まされて、それで立派な軍隊ができたら、手品師以上だよ。世論や憲法で戦闘ができるか。たまさか閲兵式かなんぞに来やがって、景気のいいことをぶち上げてりゃ、そりゃ本人は気持ちが良いだろうが、空煽りされるこっちはいい面の顔さ。

「悪口はそれくらいにして、本論に入るわけにはいかんのかね」

河井が悪態を並べている間、背中を向けて立っていた大杉が、振り向いて言った。

「どうせ、俺はクビになるんだから、言いたいこと位言わせろよ。ただな、お役所仕事のつじつま合わせの片棒をかつぐのは御免だぜ。都合のいいことだけ聞き出して、具合の悪いことは聞く耳を持たぬと言うんじゃ、俺としても話す気になれないからな。どうだ、もう一度念を押すが、俺の話をカットなんかしないだろうな」

「もちろんカットなんかしないさ」
と大杉が言った。
「オークレイは面白いことを言ったよ。沖縄の施政権を日本に返すかどうかについてはだ、自衛隊の能力によるだろうと言うんだ。もちろん奴の後にゃ司令官がいるし、その後にゃハワイの総司令部が控えているよ。基地を沖縄から外すことにゃ、日本の偉いさんが反対するだろう。いわば安保体制の最後の人質として離すわけにゃいかんだろうと、これはオークレイが言ってたよ」
「人質？何の人質ですか」
「いざという時に、日本だけが攻撃対象にならんように、必ず米軍が出動するための、いわば抱き合い心中用の基地というわけさ。これがアメリカ人の一般的な考え方らしいぜ。だから、その基地を守る自衛隊は大丈夫か、ゲリラの攻撃なんぞ食って占領されることはないか、中国あたりに乗っ取られやせんかと心配するわけなんだろう」
「ずい分妙な考え方をするもんですね。沖縄基地が米軍自身の為に、何も役に立っていないようじゃありませんか」
「それが外交というもんじゃないか。奴等は天性外交家というより商売人だな。俺だって奴の言うことを丸呑みにしたわけではないよ。誰だって核攻撃の対象になるようなものを四六時中ふところに抱いているのは気味が悪いだろうし、こっちからくれとねだったものでもない。要らなくなったからって、これはプレゼントだからと押しつけられたって迷惑だ、要らんものはさっさと持って帰れと俺は言ってやったよ、もちろん冗談だがね」
「その摂渉は、どの程度の権限の下にやっていたのですか」
「権限ね、オークレイはとにかく米軍の連絡将校さ。俺は特殊編成中隊の隊長ということだな、それがお互いの権限さ」
「だとすると、沖縄の返還問題を討論するには、少し・・・」
「わかるよ、役不足と言いたいんだろう。しかしな、沖縄なんて小さな島のことは、アメリカさんは純粋に軍事問題だと思ってるのさ。あの島のことで日本政府が大騒ぎするから、付き合い上大統領あたりが何か一言二言言ってるが、要するに、ハワイの司令官が必要だと言えば、大統領はそうするだろうし、不要だと言えば、ああそうかと言ったようなものだとオークレイは言ってたよ。
要するにオークレイの言い分はこうだ。沖縄を変換するには、米軍としては、これが絶対に共産勢力のものにならないという保証が必要だ。強い軍事力だな。この見極めさえつけば、かなり早い時期に沖縄の返還が実現するだろう。だが、米軍としては、今の自衛隊がどの程度の能力を持っているのか判定に苦しんでいる。ベトナムあたりで、演習をしてその能力を示す気がないか、というわけだ」
「その話が交わされたのは、いつ頃ですか」
「四十年の六月頃だったと思うがね」
「それで、あなたは、オークレイ少佐の話をどう思われたのですか」
「そうだなあ、沖縄に関する部分は、俺とほぼ同じだったと思ったね。沖縄は軍事的には重要な

位置にあるが、他には殆ど取り柄のない島だからね。住民だって、たかだか百万足らずだし、ろくな産業も無いしな。軍事面での解決が無い限り、いくら政治家がじたばたしても沖縄は日本には帰って来ないだろう。逆にその点さえ話がつけば、極簡単に日本に帰ってくるだろうとね」

「なるほど、ではその点でオークレイ少佐とあなたとの間では意見の対立は無かったわけですね」

「ああ、完全に一致していたね」

「 しかし、演習の場所がベトナムになっただけで、果たして防衛能力の有無が米軍にわかるもんでしょうか。やはり演習ではなく実戦に参加することを予定していたの
ではありませんか、その点はどうなんでしょう」
　「そりゃ君、現に戦争している所へ行くんだからね、多少の覚悟は必要だ。商社の連中だって、大使館の連中だって、万一の時の覚悟はしているんで、何も隊員だけが危険なんじゃない。国内だって、演習中にケガをしたり、死んだりするだろう。同じことさ」
「そりゃ乱暴すぎるようですね。問題の質が根本的に違うでしょう」
「演習である限りは同じことだよ。どこでやろうと演習は演習さ」
「米軍も演習のつもりでしたか、援軍のつもりではなかったのですか」
「わからんね、あっちは演習も実戦も、オペレーションで済ませるからな。現に戦争をしているんだから、あれこれ区別する必要はないわけだ」
「すると、こういうことも考えられるね」
と大杉が言った。
　「 米軍の方では援軍と考え、こっちは演習と考え、両方の考えが食い違っていた・・・どうかね、そんな場合は考えられないかね」
　「あったかも知れんが、わからんな」
　「わからんじゃ困る。とにかくこういうことになった以上、どっちだったと、はっきり答えて貰わなければな・・・」

　「はっきりと」
という大杉の言葉で、河井は二十年前の終戦時のことを思い出した。それは無理だよ、大杉さん。あんただってあの時に、俺に
　「陛下がもし、本当に降伏なさったとしたら、貴様どうする気だ」
と言ったじゃないか。
　「そんな筈はない」
と言う俺に重ねて
　「貴様や俺のようなものに、どうして大御心がこれこれの筈はないなどと断言できるか。全ては陛下のお決めになることだ。俺達が決めることじゃない」
と怒鳴ったっけ。
　松代近くの皆神山のどてっ腹をえぐりながら、俺はそこにこもって、米軍を迎え撃つ日の事しか考えられないようになっていた。突貫工事が進むに連れて、皆神山だけでなく、松代から東条村にかけての一帯が、巨大な要塞地帯となりつつあることを俺は感じた。熟しかけた稲穂の上を、真夏の風が青い航跡を引いて通過する田園風景に、俺はいつももう一枚の絵を重ねて見ていた。戦車と野砲と追撃砲が、所構わず大地を掘り起こし、人間が蛙のように、腹の皮を引き裂かれてへたばっている絵を。
「降伏なんて・・・そりゃ側近共がやったことに違いない。陛下が降伏なさる筈がない。我々は陛下の大御心を心として、君側の奸を除いて、徹底的に戦い続けるべきだ」

それは偽りのない、心底からのことばだった。
　天皇が天皇である限り、降伏はあり得ない。それは、俺にとってあたり前すぎる程あたり前のことだった。大杉は、あの時すでに、天皇の人間界への引き下ろしを済ませていたのだ。

降伏するかもしれない天皇が、どうして現人神であり得ようか。他人の心はわからないというのと違いはない。他人は人間であり神ではない。大杉は大御心を推し量るのは間違いだと言ったが、しかし誰にでもその思うこ所が瞭然と理解されてこそ神意と言うべきではないか。
「降伏は陛下の御心なのか、それとも側近共の私意なのか、どっちなのです。はっきり答えてください、隊長」
そうあんたに、大杉大尉殿に聞いた俺が、今回は逆に攻められる側に回ったってことだな。あの日俺が裏山に行って、青竹を何本も切り倒したことを、あんたは知らないだろう。切ったばかりの竹の切口に滲み出てくる脂の色もあんたは知らない。あの鋭く白い堅固な輪が、どうしてか、今でも時々目に浮かんで来るよ。天に向かって突き立てた、あの真白な爪が・・・

「演習プランはどうなっていたのかを具体的に説明して下さい」
張川が言った。
「サイゴン北方の基地周辺でゲリラの掃討を見学するというだけのことだ」
「その基地を地図で示して頂けますか」
「それはできんな、俺はベトナムの地理には詳しくないんだ。大体の所はわかるつもりだが、正確にはわからん」
「演習に参加した隊員は千五百人でしたね。全員が、その基地に行ったのですか」
「いや、実際には五百人程だった。あとは演習を中止した」
「なぜです」
「基地が包囲されて隊員を輸送できなくなったからだ」
「ちょっと質問を前に戻しますが、隊員の出国については外務省に届けてありますか」
「届けは不要だ」
「なぜですか。ではどうやって出国したんですか」
「米軍基地から、他の米軍基地への移動には。外務省の許可などいらないことになっている」
「それは米軍の移動に関しての話でしょう」
「我々は、米軍と共同演習をしていたから米軍に便宜を図って貰ったのさ」
「演習へ出発したのは、何処からですか」
「横田基地からだ」
「それは地位協定違反じゃないですか」
「しかし、移動したのが米軍だとしたら、適法じゃないか」
「しかし、自衛隊は米軍じゃないんですから」
「米軍は自国の軍隊を運んだつもりかも知れん。後になって、外交問題になるようなことはしないだろうし、証拠も残しておらんだろう」
「では、横田基地から出発した隊員達は、自衛隊員としてではなく、米国軍として出発したのですね。少なくとも米軍の書類の上では・・・」
「そういうことになるな」
「ではその隊の指揮権はどこにあったのですか。あなたですか、それとも米軍ですか」

「私の権限で、演習中の指揮権を米軍に委譲した。理由は現地の状況が私には不明だったからだ。それに、演習に必要な兵器、弾薬の補給を米軍に委ねたこともあった」

「兵器や弾薬の補給と言いますと、隊員達の出発時の装備はどの程度だったのですか」
「全員、ＭＩと実弾三百発を携行した」
「演習地でどんな兵器が支給されるはずでしたか」
「支給というより、隊員達の演習を戦車隊や野砲部隊が援護するということになっていた」
「こちらの思うように使わせる、というのではないのですね」
「ロケット砲、迫撃砲、重機関銃等の支給はあった。支給されたというより、基地に着いたら、配置されていたという方が正しいだろう」
「何故自衛隊の兵器を輸送しなかったのですか」
「米軍側から、必要な兵器はできる限り現地で補給するという申し出があったからだ。向こうでごろごろしているものを、こっちから苦労して運ぶことはないだろう。それに、重砲や戦車を伴う演習はプランに無かった」
「しかしプランに無かったというのに、米軍側からそれほどの援護を申し出たというのは何故ですか」
「場所が場所ですから、演習中不測の事故が起こりかねない。その時には米軍がその処理にあたる、ということだ」
「指揮権が米軍にある場合、もちろん演習中の作戦命令は米軍から出るわけですね」
「そうなるな、当然」
「その命令が、演習としてのものか、実戦のの命令か先刻のお話ですと見分けがつかないんじゃないですか」
河井はポケットを探って、煙草を取り出しゆっくりとふかした。張川は待ったが、答えは無かった。何か言いたげに、大杉が顔を上げたがそのまま黙って、二、三度河井と張川の顔に視線を送った。
張川の沈黙は、時間の経過と共に、自然発生的なものから意図的なものに変化していた。
（河井に答えさせるのだ。それまで口を利かんぞ）
だが河井は平然としているように見えた。沈黙の中を流れるものの密度が急激に濃くなって行った。
「質問を変えましょう」
待ち、苛立ち、憎しみに転化しようとする感情を、抑えて、河井の沈黙による質問の中断を無視する冷静さを、張川は保とうとした。
「いや、先刻の問題に答えを出しておこう」
と河井が言った。張川は突き上げてくる怒りを奥歯で噛み潰した。
「演習中にベトコンあるいは北ベトナム軍の攻撃を受ける可能性は十分考えた。その場合は、指揮者の判断によって、演習を即時に戦闘に切り替えることになっていた。場所柄当然のことと言えばそれまでだが・・・」
「戦闘に入るかどうかの判断は、米軍指揮者の権限に委ねられていたのですね」
「そうだ」
「米軍の指揮下に自衛隊を戦闘させる権限が、あなたに与えられたいたのですか」

「無いね、だが自衛隊の根本戦略は日米一体の原則に立脚している。現在の装備、兵員、法規全ての面からみてそう言わざるを得ない。違いかね、君の意見を聞きたいが」

「その点に関しては、同意見です」
「では、日米一体となった連合軍の指揮は誰がとることになっているのかね。実際に作戦行動を取る時、我々に命令を下すのは誰なんだね。総理大臣か、長官か、とんでもない。政治家共が、米軍の具体的な配置と行動に即応して、我々に命令を出せる筈がない。しかも、我々は日本を防衛する義務を負わされているんだ。具体的にどうしたらいい。日米連合軍の指揮権は、結局の所、米軍に帰するとみるのが軍事的常識と言うものだろう。俺はその必然性に従ったまでだ」
「そんなことは、君や俺が考えることじゃない。もっと高度な政治的判断から決められることだ、我々はその判断に従っていればいいんじゃないのか」
大杉が言った。
「高度かどうかは知らないが、薄汚い政治の駆引きの道具にされるのは俺は真っ平だね。俺達は兵隊ごっこをしてるんじゃない。命を張ってるんだからな」
「自衛隊の主体性、いや日本の主体性が、その論理ではどうなるのか。今の話では全く主体性が消えてしまっているように思われますが・・・」
張川が言った。河井が微かに笑ったように、張川には見えた。
「戦に敗れて何の主体性かね。負けない戦をする為に武力というものはあるんじゃないのか。主体性の為にあるんじゃあるまい。有事、敗戦の憂き目を見ないように努力するのが我々の任務だと思うがね。主体性なんてものこそ、その辺の政治家のヒマ潰し論議に任せておけばいいのさ」
「しかし、あなたは負けたんじゃないですか」
きつく閉じて寄せられた眉根と、八の字結ばれた唇の脇に、河井の苦渋が滲みでた。
「負けたのではない。俺は負けん」
河井の声は冷え切った風の感触で、張川の胸を通り抜けた。のどの奥の暗がりで生じた事を想起させる低いかすれ声だったこともある。が、
「負けたのではない」
ということばには深い想念の闇の中から、ぬっと頭部を持ち上げた亡霊の気配が感じられた。
「負けてないと仰有るが、では五百人の隊員はどうなったのですか」
という張川の声を聞いていると、

「負けない、負けないなんて言ってたのにどうしたのよ」
という女の声が、河井の耳の底によみがえってくる。女は善光寺の門前から松代へ、週に二回将校用の慰安婦として出張してきた。ほほ骨が高く、切れ長の目に腫れぼったい一重瞼で、いつも遠い所を見るような目つきをしている女だった。唇にしまりがなく、エッと言うような形に開きっ放しの口だったが、それが河井の欲情をかき立てるのだった。
敗戦の日の二、三日後、照美というその女に会った時、女が言った。
「負けない、負けないなんて・・・」
「負けやせん、絶対に」
まだ、河井の心中に、抗戦部隊があれば、合流する気持ちが強く残っていた。
「いくら負けても怪我さえなけりゃ、晩にゃ私が負けてやろか。前にお客に来たお関取が教え

てくれたの。でも、戦争に負けちゃ将校が怪我無しってわけにも行かないでしょ」
「見ろよ、怪我なんか一つもないぜ。玉の肌ってやつさ」

酔っていた事もあって、河井は、帯を解くと、浴衣の前を開き、下帯まで外してみせた。照美はゲラゲラと笑い転げていたが急に真顔になって、
「あんた、聞いた。兵隊はハンキン、下士官以上はゼンキンですってよ」
「ゼンキン？何だ、それは」
「抜くんですってよキンを、アメリカ軍が。兵隊は一つ、下士官以上は二つともだって。もう戦争しようなんて気を起こさないように、抜いちゃうだって」
有り得ることだった。すでに敗北したが、友邦ドイツでは劣等民族を絶滅する為に、不妊手術を施したと聞いている。
「バカな、そんなことがあるか」
と言いながらも河井は気力が萎えて行くのをどうすることもできなかった。
「いくら帝国陸軍だっていばってもさ、タマがなくちゃ戦争はできないわよね」
ヒヤッとする両掌に、やがて米軍によって除去されるかも知れないものを包みこんで、照美は、じわじわともみほぐした。やがて何の感覚もないままに、衰えた陽根から、女の掌へ、白濁した廃液が糸を引いて滴り出て行った。敗北感が河井の皮膚を抜けて、内部を襲ったのは、その時だった。水洩りのように、ケラケラ笑いが途切れてはぶり返し・・・

「あれは負けたんじゃない」
「何故です。その理由を聞かせて下さい」
張川のどこかに、勝ち誇った響きがあった。
「米軍との連絡が悪かったのだ。俺達が着いた時には、基地はすでに包囲されていたのだ。気がつかなかったが、米軍はすでに主力の撤去を始めていたのだ。俺達は基地の外へは一歩も出られなかった」
「順序よく話して下さい。あなたは基地が包囲されていることをいつ知ったのですか」
「到着の翌日だ」
あの日、演習の打ち合わせに、オークレイの宿舎のある地下壕へ行くと、オークレイの姿は見えず、同じ壕に寝泊まりしている将校が、
「オークレイはサイゴンへ引き上げた」
と言った。
「何時戻ってくるか」
と聞くと、その将校は首をすくめて
「さあ、いつだかね。少なくとも敵が包囲を解くまでは、戻ろうにもできないだろう」
と答えた。
「包囲されているのか」
聞き返す河井に
「何だ、まだ聞いてないのか。事前に連絡しないなんて、オークレイもどうかしているな。そのうち何か連絡があるだろう。敵の攻撃は、いつ始まるかわからないから、あまり外に出ない方がいいぜ」

とその将校は片目をつむってみせた。基地の隊長の所を訪ねると、隊長はすでにこの基地にはいなかったので留守をあずかるマックスという大尉に言った。

「私の部下は、基地内にテントを張って寝ているが、聞けば、敵の攻撃が近いそうだから、地下壕を使用させて頂きたい」
「空いている壕を自由に使っていい。きれいに使ってくれよ。部下にきちんとするように注意しといてくれ」
壕はあちこちで空になっていた。河井は隊員にそれぞれの壕を割り当ててから、隊長室へ取って返した。
「オークレイ少佐の所に電話したいのだが、どこにいるか知っているか」
マックスは、仏頂面をした。
「知っているが、何のようでかけるのかね」
「重要な話が有るんだ。急ぐんだ」
「どんな用だ」
「話しているひまはないんだ。オークレイ少佐を呼び出してくれないか」
「俺がオークレイに代わって、君の話を聞こう。ここの責任者は俺だから・・・勝手に司令部へ電話をさせる訳にはいかない」
「じゃあ聞くがね、我々の演習はいつから始まるのだ。それに、基地の中に大砲が二、三門しかないようだが、このまま攻撃を受けたら、防ぎ切れないのではないか。君たちは引き揚げつつあるようだが、我々をどうするつもりなのか、答えてもらえたい」
「その点については、明日オークレイがここに来て、直接君に話すだろう」
「明日、今日のうちに敵の攻撃が始まったらどうする」
「大丈夫、敵の主力はまだ、近くに迫っていない。それに奴等は大砲を持っていないから、基地のすぐ近くまで来てからじゃないと、攻撃を始めないんだ。まだ二、三日は大丈夫だ」
「君の話を信用してもいいのか」
「大丈夫、俺がこうしているじゃないか。もっとも、明日は俺もサイゴンに戻る。それからバンコックで休暇だ」
マックスは陽気に首を振って笑った。
明日、こいつも引き上げるとすれば・・・オークレイは本当に来るのか。河井は胸の底が冷たくなった。置き去りか。
土のうを高く積みあげた防壁の所々で、米兵が見張りをしている。河井も上がってみた。防壁の外側を鉄線があって、権木らしい茂みがかすんで見える。敵らしい姿はどこにも見えない。横も後ろも稲田だけだった。基地は稲田の真ん中に、刺のように突き刺さっていた。
豊かな稲の実りが、基地を包囲していた。
「包囲されているとわかってから、あなたはどうしたのですか」
「基地責任者のマックス大尉の指揮の下に、部下を配置した」
「機関銃座にも、迫撃砲座にも、空席が目立っていた。滑走路にひっきりなしに着く輸送機が、それらの兵器を米兵と共に積み込んでは飛び去って行く。マックスの所へ戻って言った。
「我々の輸送のことが決まるまで、空いた兵器を残しておいてくれないか。我々は小銃しか持って来ていないのだ」

マックスは目を丸くした。
「小銃だけ？小鳥でも撃ちに来るつもりだったのか」
「重火器類はここで支給されることになっていたんだ」
「そんな話は聞いてないな、よし、司令部に聞いてみよう。心配するな、きっと大丈夫だ」
マックスは電話を取り上げた。しばらく呼び出しを続けたが、応答が無いらしい。
「駄目だ、また電話線を切られたらしい。苦労して埋め込んどいたのに・・・」
「無線は無いのか」
「無線でサイゴンを呼ぶのは無理だろう。しかしやってみよう」
マックスは兵を呼んで、無線で呼ばせた。
「駄目らしいな、混信がひどい。後でまた呼び出すが・・・取りあえず、空いている所へ君の部下を配置しておいてくれ」
「弾丸は」
「近くの壕に積んである筈だ。確かめておいてくれ」
マックスと話していると、不安が昂じるばかりだ。包囲されているとも知らぬ隊員達は壕から出て、基地内を珍しそうに歩いている。小隊長を集めて、ゲリラの主力が接近中だから、支持があるまで壕を出るな、と伝えさせた。
壕を回って弾丸の量を調べたが、とても全部の壕を回り切れない。それに、米兵のいる壕を調べるわけには行かないから、そこに弾薬があっても、河井には判らないのだった。
基地の周囲は、五百名の兵員では到底防備しきれない広さだ。迫撃砲の砲身は、一見自衛隊のものよりも長いように見えた。今の角度のままで発射するとどの辺に弾丸が落下するのか、見当がつかない。できるだけ早く、ここから隊員を引き揚げなければならない。
河井はそう思った。基地内にいる米兵は、見た所二百人以上ではない。このまま戦闘に入るわけにはいかない。これでは戦いにならない。
「包囲されているのに、現地軍の指揮に任せたのですか。それでは戦闘参加を始めから認めた認めることじゃありませんか」
「俺だって包囲されていると初めからわかっていたなら、そんな所に行くわけがない。到着したら、包囲されていたんだよ。仕方ないじゃなないか、向こうさんに任せる他に、何か良い方法でもあるかね」
「基地の包囲が何時から始まったのか、ご存知ですか」
「それほど前からの事だとは思えないが、はっきりしたことはわからん」
「米軍当局には聞かなかったのですか」
「聞いたよ、もちろん。しかし米軍の方でも何時からと、はっきり言えないんだな。何しろ、田に出ている男の人数が少し多いなと思うと、それがすでに敵なんだ。田や畠の中にちょいちょいと細工して引揚げる。また翌日やってくる。段々人数が多くなって、おかしいなと思う頃に道路が切られる、通信はやられる。それで、突然迫撃砲やロケット弾の雨が降るって工合らしい」
「包囲されたらことに気付いてから、演習計画を中止するか、変更する余裕は無かったのですか」

「向うで何も言わないものを、こちらとしてはどうしようもないよ。それに、ベトナムには、前線も後方もないんだ。どこでも同じような工合らしい。どの基地も恒常的に半包囲状態で、向うがその気になれば、翌日は完全に包囲されてしまうのだと、オークレイが言ってたな。包囲されても、攻撃されるとは限られない。どこかの戦闘を援護するための陽動作戦のことも珍しくないってことだ」

眼窩の周囲からほほ骨にかけて、うっすらと脂が浮いていた。河井はそれを時々、指でじかにこすりとって、確かめるように、見つめた。
「攻撃はいつ始まりましたか」
「到着して四日目の朝からだ」
「その時、あなたは、そこにいらしたんですね」
張川の問いに、答えが返って来なかった。顔を上げると、河井の濡れたように光っている目が、張川をにらみ据えていた。
「どうぞ、戦闘の模様を話して下さい」
ガタリと椅子をずらして、河井が立ち上がった。こちらへ向かってくるのかと、張川は思わず掌に力を入れた。が、河井はくるりと振り返って窓際へ歩み寄った。
窓の引手に吊るしてあった黒布を外し、すっぽりと鳥籠に冠せる河井を大杉がとがめた。
「勝手なことをしないで貰いたい。席に戻れ」
「少しくたびれたよ。・・・それに、こんな殺伐としたお話、この小鳥に聞かせたくないからな」
黒布を冠せていた河井の手が、イテッ、急に引っ込められた。畜生、という罵声と共に小鳥が河井の手を突付いたらしい。
河井は再び指を出し、小鳥を誘った。一羽だけ籠に入れられて発情期を迎えた雄の小鳥は、いきり立っていた。肌のように柔かい色のくちばしで二度目の攻撃に移った瞬間、河井の人さし指の爪がその出鼻を弾き返した。急所にカウンターを食ったカナリヤは、暗い籠の中で、しばらくバタバタと不規則な羽音をさせた。
「カナリヤはおとなしい鳥だと思ってたらこいつは飛んでもない気違いだ」
河井は突かれた指を見て、苦笑いをしながら席に戻った。小鳥の飼い主である大杉は、唇を歪め不快を露わにした。
「翌日、オークレイがヘリでやって来た。そして、俺に、司令部まで来いと言った。北部戦線の数カ所でかなり大がかりな攻撃を受け、司令部はそっちへかかり切りで、我々の演習など眼中になくなってしまったというわけだ」
「それで」
「行かざるを得ないだろう。隊員を引揚げる為の輸送機や、引き揚げるまでの兵器、物質の手配を交渉しなけりゃならん、と俺は思った」
「そんなことは、すべて手配済みだったのではなかったんですか」
「俺もそう思った。オークレイは北部戦線のせいにしていたが、俺は奴のミスじゃないかと思う。ヘリの中で、北部戦線のきまりがつくまで、基地の防衛を、我々でやるわけには行かないかと言った。無理だと俺が答えると、そうだろうなと馬鹿にしたような笑い方をしてから、君の要求を司令官が容れてくれるといいんだが、と独り言のように言いやがった。
サイゴンの司令部じゃあ、何があったか知らんが、三時間半も待たされて、やっと司令官なる人間に会えたと思ったら（君のことはオークレイから聞いた。君の希望も理解している。できるだけ君の希望通りにしようと思うが、細かいことはオークレイにきいてくれ給え）てなことを言わ

れて、握手で追い出そうとしやがる。

俺がろくろく口もきかんうちに、次の客が入って来る始末だった。帰り際になって、やっと、隊員を安全な所へ運ぶ為に、輸送機を回して欲しいと言うと、司令官はこう言ったね、
（安全な所なんて、ベトナムには存在しない。輸送機は四、五日のうちに基地に回せると思う。現在は北部戦線への輸送で足りないくらいだから）というわけさ」
「ずいぶんひどい話じゃないか」
と大杉がうなるように言った。
「ひどい。そうだな、ひどいと言えばひどいが、まあ今のまま日本に何か起こったら、こんなことになるのが落ちじゃないかと、俺はつくづく思ったね。自分が戦争してる時に、他人の世話なんかしちゃいられないってことだよ」
「結局どうなったのですか」
と張川が聞いた。
「どうもならなかったよ。俺がサイゴンへ行ったのだけが無駄になったわけだ。その晩はサイゴンの宿舎に泊って、翌日基地に帰ることになってたんだが、その夜明けから基地が攻撃されたんだ。飛行機はもちろん、ヘリも近付けない、とオークレイが知らせに来た」
「すると、あなたは戦闘の現場にはいなかったんですね」
「いや、俺はオークレイに頼んで、基地へ帰してくれと言った。飛行機が駄目ならヘリでも都合してくれと言ってね。オークレイも救援が出るかも知れない、まだ引き揚げが残っているからと言って、空軍基地へ連れて行った。
ところが、、空軍基地では、基地へ救援にヘリ十二機がすでに出発したと言うんだ。五百人をヘリ十二機でどうやって救出できるのかと聞くと、あの基地には精々百五十人しかいない筈だと係りの将校が言うんだ。つまり我々は数のうちに入ってないし、五百人の隊員がいるという連絡すら受けてないらしいんだ」
「信じられませんね、とても」
と張川が呟いた。
「嘘だと言いたいのかね」
「決してそんなつもりではありません。けれども、オークレイ少佐は一体何をどこに連絡手配していたんですか。これでは隊員を死地に連れ込んだだけじゃありませんか」
「結果としてはそうなったが、始めからの目的はそうではなかったんだ」
「もちろんそうでしょう。始めから隊員を殺すのが目的だなんてナンセンスですよ。で、結局、基地の隊員はどうなったかを、あなたは確かめられなかったんですね」
「その方法が無かったんだ」
「オークレイ少佐や司令部からは何か聞かれませんでしたか」
「圧倒的に優勢な敵の砲撃で、救出不可能だったと司令官は言った。ただな、救出ヘリで脱出した米兵が、
（ジャップが詰めかけたんで、もうちょっとでこのヘリも飛べなくなる所だった）
というようなことを話してるのが耳にはいった。うん、救出ヘリで誰か隊員が帰って来ないかと空港で待っていた時だ。ヘリも半分近くは落とされたらしい」

「そのジャップが云々と言うのは、どういうことでしょう」

「俺も聞きたかったが、オークレイが飛んでって兵隊達を黙らせてしまったから、細かいことは聞けなかった」
「ちょっと待って下さい」
張川は手元の資料を確かめてから言葉を続けた。
「これは仮定に立っての質問ですが、もし隊員が、ベトコン、あるいは北ベトナム軍の捕虜になったとしたらあなたはどうなさるつもりでしたか」
「うん」
と河井が言ったように思えたが、張川にははっきり聞こえなかった。河井のこめかみが、ピリピリとひきつっている。
「そうなったらなったで、仕方がないだろうなあ」
弱々しい声だった。
「もし隊員が捕虜になったら、あなたはどう処置されますか」
「わからん、仮定の話は。基地の戦闘では捕虜は出なかったのだから」
張川はファイルから一枚の紙片を引き出した。
「これは、ベトコンのパンフレットの一部を翻訳したものですが・・・読んでみます・・・Ｔ基地の戦闘で、侵略者はその残忍な本性をむき出しにした。
我が勇敢なる解放戦線兵士の攻撃を受けた基地の侵略軍は、苛烈な攻撃に堪えず、ヘリコプターで逃げ出そうとした。しかも敵のヘリコプターは、全員を乗せずに逃げ出したばかりか、積み残された兵隊が我軍に降伏しようとするや、上空から機関銃とロケットの掃射を浴びせて、皆殺しにしたのである。Ｔ基地を占領した我軍が調べたところ死体の半数は、アメリカ軍の弾丸によって死んだものであることがわかった。
哀れな犠牲に供された兵隊達は、韓国人であった。アジア人を使えるだけ使った後で、豚のように撃ち殺すアメリカ侵略軍の本性を見て、我軍の兵士は、余りの残忍さに目をそむけない者はいなかった。・・・Ｔ基地に韓国軍はいたのですか」
「いや・・・我々のいた間には見なかった」
「するとこの韓国軍というのは・・・」
「君、敵のパンフレットだろう、それは。そんあ百パーセントでっち上げのものを、信じたりしないだろうね」
「もちろんです。全部なんて信じやしません。しかし、このパンフは最近ある筋から手に入ったもので、刷られて幾らも経っていないものです。それに、ヘリコプターでの救出なんて、あなたのお話と一致する所もあるようですね」
「そんな馬鹿な、嘘だそれは・・・」
声の激しさとは、およそそぐわない、不安な目つきで河井は叫んだ。
「嘘だと言い切れますか。あなたが現場におられなかった以上、嘘だと断定する根拠は無い筈ですね。・・・しかし何故、いもしない韓国軍がここに忽然と出てくるのか、それが僕には不思議なんですよ。・・・出発の時、隊員の階級章や、身分証明書、認識票などは所持させたんでしょうね」

　河井が答えるまでにしばらく時間があった。声にならない程、低くかすれた答が河井の口から発せられたのは一分近い沈黙の後だった。

「持たせなかった」
「なるほどね」
とうなずいた時、張川は、軽い目まいを感じて瞼を抑えた。
「どうだ、もう暗くなったが、そろそろ飯にしないか」
と大杉が言った。抑えていた手をのけて、目を開くと、濃い宵闇が、ベタリとガラス窓に貼り着いていた。
「いや、今日はこれ位にして、明日、細かい事をもう一度お聞きしたいと思います。何故、こんなにあからさまに、地位協定を踏みにじったのか、私には理解できない。一応、今日の結果を整理して、明日不明な点をもう一度説明していただきましょう」
「よし、そうしよう」
大杉が卓上のボタンを押すと、係りの兵が入って来て、河井を両側からはさむようにして、部屋から連れ出した。
「ああ、芯が疲れた。君もご苦労だったな」
立ち上がった大杉は大きく伸びをした。立ち上がったついでに鳥籠に近づき、黒布をそっとまくって中をのぞき込み
「こりゃいかん、落ちてるぞ」
とあわてて覆いを外した。
鳥籠の底に、黄色い餅のようにうずくまっているカナリヤが見えた。張川はゆっくり近づくと、小鳥は羽毛を小刻みに震わせ、時々くちばしをあくびでもするように、ゆっくり開いた。
「手当をすれば治るんじゃありませんか」
「いや、もう駄目だろうね。こうなってしまっちゃ・・・」
小鳥は微かにくちばしを開いて、桃色のトゲに似た舌をチラチラとのぞかせて、せわしない呼吸を続けた。時々薄く透通った瞼を開き、黒い目玉をくるりと動かしたが、それは死に頻している生物のものとは思えない、無邪気で平和な光を宿していた。

　翌朝十時きっかり、隊長室に、河井が連行されて来た。河井は入口で立ち止まり、大杉と張川をじろりとにらんでから、大股に椅子へ近付いた。
　「昨日に続いて、質問を行います」
 張川は調書を手繰りながら宣言した。
　「五百人の隊員の全滅に至った過程について、あなたはオークレイ少佐や、他の米兵から詳しい事情を知らされたんじゃありませんか」
　「それはもう、昨日話した」
　「ここですね」
 張川は調書を手にして読み上げた。
　「（ジャップが詰めかけたんで、もうちょっとで、このヘリも飛べなくなる所だった）と米兵が話した。そのあとオークレイが飛んで行って話を止めさせたんですね」
　「そうだ」
　「問題はそのあとです。どうして五百人もの隊員が死んだんでしょう。昨日のお話では、基地には有効な火砲類もなかったようですね。ろくに抵抗もできなかったんじゃありませんか。つまり、捕虜になる機会があったのでは」
　「いや、そんなことはない。勇敢に抗戦したと言うことだ」
　「誰がそう言ったんですか」
しまった、という表情が走る。
　「オークレイ少佐ですか」
と張川がたたみかけてくる。河井の口は開かない。
　「オークレイ少佐から聞いたんですね」
 張川は再び念を押した。
　「そうだ」
 河井はうめくように答えた。
　「他に聞いたことを話して下さい」
　「それだけだよ」
 張川は唇を噛んでしばらく考え込んだ。
　「では別の角度から質問します。あなたが基地を留守にした時に、指揮は誰がとることになっていましたか」
　「副官だ」
　「米軍の基地司令官じゃないんですか」
　「演習に入る迄はこちらが指揮をとるのが当然じゃないか」
　「なるほど・・・基地が攻撃された時、米軍の司令官は現地にいたのですか」
　「さあ、わからん」
　「基地が包囲されていることは、隊員にも知らされていたのですね」

「俺が知らせた」

河井は明らかに用心して答えているようだった。
「隊員が勇敢に応戦したそうですが、もしそうだとして隊員に戦闘を命令できるのは、副官ですか、米軍の基地司令ですか、どっちです」
「そりゃ副官だろう。英語で命令されてもわからん奴が大部分だから」
「では、副官が隊員に、ベトコンや北ベトナム軍との交戦を命じたとおっしゃるんですね。そういう風に訓練されていたわけですね」
「違う」
河井はきっと張川をにらんだ。岡っ引きめ、何が何でも俺達を戦争屋に仕立て上げようとしてやがる。
「それは誤解だ。実際に命令する場合、日本語でなければ通じなかったろうというだけの話だ」
「しかし、応戦したんでしょう」
「相手から攻撃されれば、場合によっては止むを得んだろう。正当防衛だ」
「相手国にこちらから出かけて行った場合でも、ですか」
そうだと答えれば、五百人を法に背いた罪人の立場に落とすことになる。違うと答えれば、交戦の実態を、オークレイに聞いた実態を追求されるに違いない。それぞれに堪え難い事だ。
「ところで、救援ヘリが基地を離れた時、隊員はもちろん基地に残ったわけですね。ヘリに乗ってなかったわけですから」
「そうだな」
「すると残った隊員は単独で、外国の軍隊と交戦を続行して全滅したことになりますね」
(決断の時だ。と河井は自分に言い聞かせた。このままでは張川の思う壺だ。憲法違反、海外派兵の陰謀・・・畜生、自衛隊員の中にこんなアカがいるとは気がつかなかった。捨身で部下の汚名を雪ぐだけだ。もうオークレイの奴を、いやアメリカをかばい切れない。もともと裏切ったのはあっちなんだから・・・)河井は動揺する心の静まるのを待った。
「外国の部隊と・・・その通りだ。しかし・・・」
素直にことばが口から滑り出ない。張川は終始変わらぬ表情で答えを待ち受けている。
「隊員の相手は、ヘリだったのだ。救援のヘリが、隊員を射ったのだ」
河井の期待したほど、張川の表情は動かなかった。
「米軍のヘリが隊員を射った。そうオークレイ少佐が言ったんですね」
「そうだ」

「撤退の折には負傷兵が優先することを、どうして教えておかなかったのかね」
というオークレイの声が、耳の奥からよみがえってくる。
「駄目な兵隊達だ。ナンバーテンだ。役に立たないどころか邪魔になる。君の部下は我が軍のヘリを全滅に導こうとしたんだぜ」
「そんなはずはない。間違いだろう」
「負傷兵を運び入れているヘリに、君の部下が群がって、無理矢理乗り込もうとした。ヘリは

出発できず、三機も敵の砲弾に当たって爆発した。一体君はあの兵隊達に何を教えていたんだ」
「どうして私の部下をヘリに乗せなかったのだ」
「ヘリに？冗談を言うな。敵前で作戦を妨害したらどうなるかは知ってるだろう。射ったよ。ヘリから追い払うために」

「射った？米軍がか」
「血迷った君の部下は、ヘリに向かって発泡したんだ。その発泡でまた二機が墜落し、役四十人の米軍人が死んだ。八方をやめない君の部下を、ヘリは機銃とロケットで沈黙させたそうだ。気の毒だが河井、仕方がなかった。しかし一部の者はなかなか勇敢に応戦したそうだ。結局はベトコンの敵ではなかったろうがね」

「どうしてまた、米軍が隊員を射ったりしたんですか」
河井は、きりっと奥歯をかみしめた。
「敵前逃亡、抗命、反逆。米軍に言わせればそうなるんだろう。隊員を乗せるだけのヘリがなかった。だから米軍が銃でおどして隊員を乗せなかったんだ。
オークレイはそこまで言わなかったが、要するに、米軍の撤退が最優先だったということだ。隊員が憤慨して発泡したらしい。それで・・・やられた」
「敵前逃亡？逃げたのか」
と大杉が軽蔑を露骨に声に出した。
「逃げる他に方法があるかね」
河井はそっぽを向いて吐き捨てるように言った。
「逃げた上に、ヘリに発砲するとはね・・・」
大杉は嘲笑の追撃をかけた。河井は黙って侮辱に堪えている。しかし、その膝頭が微かに震えているのを、張川は見逃さなかった。
河井がかたくなに心を閉ざしていた理由の大半がわかってみると、張川は昨日ほど河井を憎む気にはなれなかった。むしろいたずらに河井の心を傷つけて喜ぶ大杉の態度が、憎らしかった。
「敵前逃亡ということはあり得ないでしょう。演習時における仮想的というものはあるが、実際に敵が存在しないのに敵前逃亡というのはおかしい。私はそう思いますが、隊長いかがですか」
大杉は唇をゆがめて黙り込んだ。
「河井さん、あなたのお話のように、副官の指揮下にあった隊員に対して、米軍が独自の判断で作戦妨害と判断し、隊員を射殺する権利というものが認められていたのですか」
「権利や義務で戦争ができるものかね。戦場では戦場の論理が人間を支配するんだ。味方でなければ敵だ。敵は殺すべき対象さ。米軍に向かって発砲すれば、立派に米軍の敵だよ。射たれても仕方がないだろう」
「仕方がない、あるいはそうかも知れない。が、そうなると、米軍に射たれる前の隊員達は、米軍にとっては何だったのですか。敵ですか味方ですか。あなたの説では戦場では第三者は存在しないようですから、二者のうちどちらかということになりますね」
「もちろん敵じゃないな」
「すると味方、友軍ですね」
「そうだな」
「友軍だとすると、ヘリに対する隊員の行動は、叛逆であり裏切りであり、利敵行為だという

ことになる」

「だから・・・仕方がないと言っただろう」
「では、誰に対しての叛逆であり裏切りなのですか・・・米軍に対してですか」
「もちろんだよ」
張川は大杉の表情を横目でうかがった。退屈そうな顔に変化はない。今は、河井個人の罪を追求する気はほとんどない。もっと大きなもの、河井をつまずかせた巨大な怪物を告発しようとしていた。
その転機がどこであったかを検討する余裕はないし、必要も感じない。河井に質問しているうちに、自然に固まってきた。
その自然さと、対象の巨大さ、深さが、自己の転回の正しさの証であった。ただこの変化は、途中で大杉に悟られてはならなかった。
「もう一つ・・・基地を攻撃してきた敵と、隊員とは事実上交戦状態に入ったかどうか。この点についてオークレイ少佐は何と言ってましたか」
「一部の者が、自然発生的に応戦したような話だった」
「すると組織的な交戦はしなかったのですね。そうすることで、救援ヘリの第二陣を待つことも可能だったのではありませんか」
「そんな事ができるはずがないじゃないか」
「何故できないのです」
「バカな。外国軍隊との交戦は憲法で禁止されているからさ。聞くまでもないだろう」
大杉がうなずいて言った。
「つまり、ベトナムなんかへ出かけたのが間違いだ。そんな演習計画を立案した事自体、そもそも間違いなんだよ」
まずいな、と張川は眉を寄せた。河井は憤然とした。
「間違いならそれでもいい。しかし、ではどうすれば隊員を強化できるんだ。我々は日本を防衛する義務があるんだ。それで飯を食っているんだから、花見がてらの演習でお茶を濁すわけにはいかんよ。可能な限りで、隊員を強化せにゃならんじゃないか。
責任逃ればかり考えていちゃ、兵隊は強くならんよ。それが駄目なら、何かいい方法を考えてもらわにゃならんね。大杉さんあたりに知恵をしぼってもらおうか」
河井は皮肉な笑いを片ほおに浮かべた。
「話を整理しましょう。河井さん、そうすると、隊員は交戦しなかったわけですね」
「できんのだよ。演習に行ったんだからな。単独で外国の軍隊との交戦を命令するわけにはいかんし、隊員にもその気はなかったろう」
「しかし、それではお話が矛盾しますね。米軍にとって隊員は味方だった。ところがその味方は敵と交戦できなくて、却って米軍のヘリを射ち落とす。こんな味方があるでしょうかね。
味方として機能する可能性が全くない味方。叛乱の可能性だけを持った味方・・・これはもう味方とは言えないんじゃないですか　」
河井は親指でしきりに目をこすっている。疲れたらしい。休息にするかと思った時、河井の投げやりな声がした。

「理屈はどうでも勝手につけてくれ、文句はいわんよ」

いかん、こんなところで、投げ出されてたまるか。張川は迷った。どうしたら、この男を最後まで燃え立たせておけるか。
ハサミがある。片刃は軍隊の精強へ向かう論理で研ぎすまされている。もう一方の刃は憲法九条だ。武力否定の鋼が光っている。二枚の刃の間に自衛隊が浮遊している。どちらの刃にも触れないように。二枚の刃がぎりぎり自分の首に食い込まないように。
張川は自分の考えをそんな図式に整理してみた。首をすくめてヒョコヒョコ漂う自衛隊が、強くなるはずがない。その点では河井と通ずるところがある。河井ははねまわって刃の間に自らの首を突っ込んだ。ハサミの存在が不合理であることを示す、いい実例だ。
河井は衆人環視の中で二枚の刃にはさまって首を落とされねばならない。そのためには、最後まで首をしゃんと延ばしていてほしい。途中で、わけのわからぬ泥沼の中に首をすくめてはいけないのだ。どうすればいいか。
「河井さん、ベトナムへ行った隊員の中に小野沢という二士がいたかどうか、御存知じゃありませんか」
河井はちょっと考えてから
「わからんな」
と答えた。
「実は、その隊員が、米軍負傷兵に混じって帰国したらしい。らしいというのは、本人かどうか確認できないからです。精神に異常をきたしてましてね」
「帰って来た？そうか、一人でも帰ってくれればと思っていた。そうか」
河井はほおが心なしか緩んだ。
「しかし、喜んでばかりもいられないと思うのです。すでに、二、三社の新聞社では嗅ぎつけたらしい。このままいくと、あなたが、つまり自衛隊が、勝手に国外へ兵を出し外国軍隊と交戦し憲法を無視した、と避難するでしょうね。
その結果は、自衛隊が今日まで営々と築き上げてきた信頼感が一気に崩れるでしょう。国民は不信の眼を隊員に向けるに違いない」
「うん」
と河井はうなずいた。が、いつまで待っても、百パーセントの信頼なんぞ得られるものかと思えばこそのベトナム行きだ。今さら張川ごときに教えられるまでもない。と微かに苦笑をもらした。批難したい奴には避難させたらいいではないか。信じたくない奴に、無理に信じて貰う必要もあるまい。
結果がどうあれ長い目で見れば俺のやったことは正しいに決まってる。歴史が判定してくれるのだ。有象無象が何を言おうと俺の知ったことか。
「そうだ、そういえばその小野沢のことどうなっているのだね」
大杉が心配げに声をかけた。
「はあ、警察病院に移されたようです」
「警察病院ね、まずいんじゃないのか」
「大丈夫です。強度の分裂症で、全治の見込みは全くないようですから」

「だが、折をみて、何とかせにゃならんだろう」
と大杉がつぶやいた。張川は聞こえないふりをして黙っていた。河井が物憂そうに聞いた。

「その小野沢って隊員が、どうしてベトナム帰りとわかった。何か証拠でもあるのかい」
「いや、運び込んだルートと、小野沢の症状からそう判断しただけです。しかしまず間違いないでしょう」
河井の顔に赤みがさした。
「何か、持ち帰った荷物はないか」
勢い込んで問いかける河井の変化が、張川の警戒を呼び起こした。
「何か、お心当たりのことでも・・・」
「いや、別に・・・しかし差支えなかった教えてくれてもいいだろう」
張川は大杉を見た。
「いいだろう。所持品のリストを教えるぐらいなら」
「では・・・」
米軍から送付された書類は、審査関係のファイルに綴じ込んで、手もとにおいてある。
「衣類、水筒、雑のう。中にボールペン、手紙、ノート等」
河井がピクリと眉をあげた。
「ノートね。中を見たんだろうな、もちろん」
「いや、リストにはのっていたが、雑のうの中にはノートはなかった。何かの間違いでしょう。米軍が手帳と混同したのかも知れないが、なぜそんなことを聞かれるのですか」
河井は二、三度ひとりでうなずいた。
「米軍の間違いか・・・かも知れんな。しかし、うちの中隊には日記みたいなものを書いているのがずい分多かったよ。労働記録なんて題を表紙に書いたりしてな・・・他の中隊より演習量が多いといって文句を言う時の種子にするんだな。・・・ベトナムでも書いてた奴が二、三十人はいただろう。
俺に質問するより、そういうノートを読んだ方が早いんじゃないかね。もしそんなノートがあったらの話だがね」
「張川君、早急に野戦病院に連絡して、小野沢の所持品リストについて調査したまえ。特にノートについて念入りに・・・」
大杉が上ずった声で命令した。張川はインターホンで連絡を指示した。
「張川君、雑のうの中は念入りに調べたんだろうね」
「はあ、それはもちろん」
「なあに、慌てることはないさ。どう転んでも、週刊誌のトップ記事ぐらいにしかならんだろう。ひょっとすると、長官あたりが議会でキュウキュウ言わされるかも知れんな。それもたまにゃ薬じゃないか」
河井はうんとのびをしながら言った。
「何をバカな・・・」
大杉は河井をにらみつけたが、当の相手は素知らぬ顔で横を向いた。
面倒なことになったと張川は息をつめる。
「河井さん、もし自衛隊が国民の不信を買うようなことがあると、あなたの苦心も水の泡にな

るんじゃありませんか」
「俺の苦心？別に苦心なんかした覚えはないがね」
「しかし、隊員を強化しようとなさった」

「それが仕事だからな」
「そうです。だが強化の目的を果たさず、隊員は全滅した。国民は一局面を見るのみです。強化の努力を見ず、違法の面ばかり見たがります。そうなれば今後は、隊員の強化訓練も思うようにできなくなるんじゃありませんか」
河井は素直にうなずき、沈んだ声で言った。
「そうだろうな・・・が、どっちにしろ俺にはもう関係ないことだよ」
インターホンのブザーが鳴り、秘書の声が流れた。
「米軍から返事がありました。このまま報告を続けてよろしいでしょうか」
「続けなさい」
張川が答えた。
「先日退院した日本人患者の所持品リストにはミスがないそうです。特に照会したノートはＢ６判のもので、当番の米兵が確認しているそうです。以上」
大杉はきっと唇を結んで、目を光らせた。何事か善後策を考えているらしい。張川は既に決心していた。　ノートは一般の手に渡る前に探し出さなければならない。だがそれ以前に、河井に納得させねばならないことがあった。
しかも悠長に時間をかけているわけにはいかない。即刻納得させ、査問を打切ってノートの追跡を手配しなければならない。
「隊長今までの調べで、ほぼ河井二佐の業務上過失致死が証明されたと思うのですが」
危険な賭けだった。果たして、大杉は目をかっと開いて、まじまじと張川を見つめた。
「君と意見が違って残念だが、河井君の場合は自衛隊内規違反として処置し、重過失致死には当たらないものと判定する」
重過失致死が成立するならば、河井を一般裁判所へ告発しなければならない。自衛隊内規違反なら、隊内処分でけりがつく。張川の狙いは河井を一般の裁判所へ引き出すことにあった。
「河井さんは、五百人の隊員を死地に追い込んだことの責任をお認めになりますか。業務上重過失致死の事実をお認めになりますか」
張川は河井の瞳の奥をじっと見つめながら答えを待った。
「待て、先の判定は委員長としての最後のものだ。河井君に対する査問をこれで打切り以後の処置は上級審理の決定に委ねる」
上級審理はすなわち隊内処分である。張川が立ち上がった。
「隊長、それは違法です。重過失致死は隊内処分の範囲をはるかに越えた事件です」
「決定だ、すでに決定した。君の査問の結果はすべて上級審理に送付する。提訴するならそこでするだろう」
「河井さんの責任表明をまだ聞いてません。河井さん、どうなんです」
張川は祈るような心で河井を見た。河井は張川の真意を測りかね、大杉と張川の表情をうかがった。
「俺が、責任を感ずると言ったらどうなるんだ」
「関係ない。すでに上級審理は決定済みだ」

大杉は抑えつけるように言い切った。
「あんたにゃ聞いていないよ。そっちの一尉殿に聞いてるんだ。俺を訴えたがってるようだが、どうしてだい。え、そんなに俺が憎いのか」

「違います」
張川は衝動のままに一気にしゃべった。
「あなたの部下を殺したのは、米軍でもなければベトコンでもない。憲法九条です。平和憲法だ。あの憲法が五百人の隊員を殺したのですよ。あなたを裁きたいのじゃない。
あの憲法の悪を、裁判で一般国民に知らせなきゃならない。自衛隊の未来はそこにしかないじゃありませんか」
しゃべりながら、張川は失望を深めていた。言ってどうなる。事はすでに終わったのだ。
「なるほど」
河井はため息を吐いた。張川を見つめる目が、やや和んだようだった。やがて
「若いね、張川さん」
ということばが張川の鼓膜に、油のように粘りついた。
パタリとファイルを閉じながら、張川は、死に損ないめが、と心の中でつぶやいた。
「張川君、ノートを頼むぞ」
という大杉の声が追い打ちをかけた。返事をする気持ちにもならなかった。

９章 背に刺さる矢

　ざくろの実のような肉塊の中心に、満はゾンデ（金属の探り棒）を突き刺した。
　「痛い」
　患者の少年は、反射的に腕を引こうとした。骨髄炎の傷はふさがりにくい。が、とろけて膿になり、外に流れ切るまで、じくじくといつまでも口を開いている。一方生命体の原則として、異常な溶解を補おうと激しく肉が盛り上がって、とろけた骨の通路をふさごうとする。ふさがれては治りが遅れる。ゾンデを通して膿の通路を開かねばならない。
　「男だろ。少しぐらい我慢しろ」
　満は少年の手首を握って、強引に膿盆の上に引き出した。少年は脅えた目で満をうかがっている。ゾンデを抜いた跡から、黒みがかった血が、チューブから押し出された絵具のようにどろりと流れて膿盆に滴った。
　「先生、今日は荒っぽいなあ」
痛さに涙を浮かべて、少年が言った。
　「こうしなきゃ、治らないんだよ」
　もう三ヶ月も通っているのに、この少年の傷は一向に閉じようとしない。そろそろ肉をかき落とさなきゃ、と思いながら、ついのびのびになっていた。傷口を洗ってガーゼを替えるだけで、自然に治癒するのを待っていたのだが、もうそれも限界だ。今日やってしまうか。
　手術とも言えないほどの手当だが、手術は手術だ。肉をそぎ落として、新しい骨に囲まれている死骨と膿をかき出してしまうだけだ。麻酔も注射もするほどのことはない。手術中に外から傷口に浴びせるだけで済むだろう。カルテをもう一度のぞく、十四歳。中学生か。我慢できるだろう。我慢させちゃえ。ほんの十五分か二十分で終わりだ。今日がいい、と満は思った。
　確かに少年の言うように、心が荒れている。荒れているというよりも、落ち着かないのだ。こういう時の方が、俺は思い切った処置ができる。痛いだろうなどと変な同情から、中途半端で手を引いたりしないからだ。
　看護婦にうながされ、心細そうな目で満を見ながら、少年は手術室へ入っていく。
　用意のできるまで、一息入れようと診察椅子に背をもたせて煙草に火をつけた。するとこの半月程の間、満を落着かせない、あの不安がまた激しくつのってくる。立上がって背後の窓を開く。
　大丈夫、誰も俺を中をうかがってはいない。誰かにつけまわされているような気がしてならない。何度も自分に言い聞かせた自己診断を、改めて繰り返す。

（これは一種の強迫観念だ。奥平につけられたことのショックから、まだ抜け出せないでいるのだ。第一、つけられたり監視されたりする原因が俺には無いのだから。小野沢というあの戦争偏執狂も、結局、警察に渡さなきゃならなかった。行先を知りたきゃ俺をつけるまでもなく、警察に問い合わせればいいんだから・・・）

反戦同盟は、小野沢を受け入れる余裕が無かった。満の話を聞いた医師の同盟員が連絡をとったが、精神に異常を来しているだけに、かくまう方策が見つからないということになった。無理のない話だった。

後々何かの役に立つかも知れないからと警察に引渡す前に、患者の写真をとり、田代からカルテを借りてコピーをとった。それは反戦同盟に渡してある。
患者は警察病院に戻るだろうし、カルテも田代の所に原本がある。どう考えても狙われるような原因はないと満は思う。もしや小野沢とは全く別の事で・・・と思い返してみても、心当たりのことは何もなかった。
偶然が重なり合って、俺の神経を消耗させるのか、それとも、神経が消耗しているから、何でもないことが特別の意味を持っているように見えてくるのか・・・どっちにしろ、暇を見て精神科の診断を受けた方がいいかも知れん。
「先生、煙草の灰が膝に」
看護婦に注意され、あわててガウンのすそを払い、手術室へ入って行く後で、看護婦の声がする。
「この頃、中島先生どうかしてるんじゃない」
「彼女のことで、頭がいっぱいなんですって」

誰かが見ている、と感じた初めは、左江子とゴーゴーバーへ行った時だった。確かに誰かが満を見ていた。満の背中を爬虫類の分泌する粘液のような視線が、しつこく追いかけてくる。
だが、その視線の射手は、転げまわる音の塊と、揺れ動く人混みの中に溶け込んでいて、突止められない。左江子はゴーゴーに浸り切っていた。左江子のゴーゴーは一定の段階を踏んでスタイルが変わる。マラソン風に始まり、阿波踊りスタイルになり、陶酔境に達すると、唇をすぼめて、フィッフィッといいながら、片足ずつ横にはねてはのばすスタイルになる。
「サア公のゴーゴーは犬ションスタイルだ」
と満はひやかすのだが、左江子は一向に改める気配がない。
いつの間にか、満と左江子の間に、金髪の大男がはいり込んでいた。尻が女のようにふくらんで、その尻で巧妙にリズムを刻んでいる。外人は左江子が気に入ったらしく、ヘイヘイと間断なく掛声をかけ、左江子の注意を引こうとしているようだった。満はボックスに引き揚げて左江子を待った。
あの視線が気になって、このまま踊りは続ける気にはなれなかった。左江子が戻ったら店を出るつもりだった。
どういうことになったのか、左江子は例の金髪をつれて戻って来た。金髪は
「アナタノコイビト、ステキネ、ダンスジョウズ」
とお世辞を言い、コークハイを三つ注文して
「コレ、ワタシノペイデス」
おごってくれるつもりらしかった。
ジョージ・メルトイアーと名乗ったその米国青年は、カタコトの日本語をあやつる一方で、左江子の掌や肩をさりげなく撫で続けた。満は左江子はにらんだが、左江子は気がついたのか、つかないのか、されるままになっている。
そのうち手洗いに立った満が、激しいステップで踊っていた黒人の背中に押されて、ジョージ

の座っていた椅子の背に思わず手をついた。固く重い感触が掌に伝わった。満の首筋を戦慄の電流が流れた。拳銃。掌をすぼめると、体形はいよいよはっきりした。満は、ジョージが脱いだブレーザーのポケットの上に手をついていた。

視線の射手とジョージが、重なり合うのかどうかはわからない。ただ、掌の感触が、それまで一時的に忘却していた、あの視線の記憶を、強く呼起したのは確かだった。しかし・・・あれは・・確かに拳銃だったのかどうか・・・日が経つにつれて、はっきりしなくなる。
小野沢を引き渡してから二日後の夜だった。
それから三日経って、満の部屋から大学ノートが、三冊消えた。病院から帰ると、左江子が座布団の二つ折りを枕に、週刊漫画誌の読みさしを顔にのせて眠りこけていた。
明日は大学病院で臨床講義の助手を勤めなければならない。教授の指示に従ってＸ線写真のさしかえをしたり、患者の身体の位置を学生が見やすいように変えたりする。講義の大部分は学生時代に習ったことだが、時たま珍しい疾患を持つ患者や、新療法に関する講義がある。満は仕事の合間にそれをノートする。
そういうノートがすでに五冊ほどたまっている。明日の講義に持って行く、使いかけのノートを捜した。ブックエンドの端に五冊、まとめて立てておいた筈なのに、見えない。引出しをあけて見る。きちんと重ねておいた筈の、新薬の説明書、医療機器のパンフレットなどが、地震にでもあったように崩れ、散らばっている。
机の上に重ねてある辞書や参考書の位置がずれている。もっと机の端に重ねておいたはずだ。それに本を重ねておいたはずだ。本を重ねる時、必ず右側の背を揃えておくのが癖なのに、見れば本の背は相当激しく出入りしている。
「サア公、起きろよ。おい、起きろったら」
左江子はフッと目を開いて、そのまま天井の一角を見つめている。
「俺のノート知らないか。・・・ここにあった奴」
「ノート？」
まだ本当にはさめきらない声で、左江子は問い返す。
「そうだよ、明日いるんだ」
「ミツ坊のノートなんか知るもんか。読んだってちっとも面白くないもの」
「この机の上、いじらなかったか」
左江子は両脚を天井めがけてはね上げ、えいっと反動をつけて起き上がった。ブルーのパンティが丸見えだ、馬鹿め。
「全然興味ない。ノートなんか知らない」
「何時頃ここに来たんだ」
「うん、一時間位前かな・・・なんだまだ四十五分しか経ってないの」
「だったらお茶ぐらい沸かしときゃいいだろう。エロ漫画みて、よだれ垂らして寝るばかりが能じゃアンメエ」
「ほんとだ、うっかりしちゃった」
ぴょんと立ち上り、やかんをぶらさげて流しに行く。ああやれやれ、これが女子大生なんだから・・・
ガスに火をつけている左江子に
「なあ、サア公がここに来た時、変わった子となかったか」

「そうねえ・・・そういえばあやしい男がそこの窓から逃げ出して行く所だった」
「ふざけんな。まじめな話だ」

「だって・・・しつこいんだものあんまり。そんなに大切なの、そのノート」
まるで埒があかない。
疑念がじわじわ脳のひだにしみ渡る。泥棒。どうして・・・何を・・・ノートを盗んでどうなる。まさか俺の所に泥棒なんか・・・いや本はノートは。泥棒だとするといつだ・・・昨日はノートを見たんだから、今日だ。昼間だ。左江子の来る前・・・いや、俺が帰ってきても眠ってるんだから、泥棒が入ったくらいじゃ目がさめないぞ、こいつは。眠ってる間にか・・・まさか・・・どっかに置き忘れたかな、鞄の中は・・・ない・・・
「お茶よ・・・何を考えてんの」
「いや」
満はぼんやりした目を左江子に向ける。
「早く飲んで・・・ねえ」
ねえ？　あっもう目がうるんでやがる・・・それどころじゃないよ・・・ノートはどうでもいい。どうしてなくなったか・・・それさえわかれば・・・本当に、どうして・・・
左江子はさっさと蒲団を敷き始めた。どうしてこうムードがないんだ、こいつは。蒲団にもぐりながら、一皮むくようにシュミーズを脱ぎ、横になってもぞもぞして、するうち枕元にポイとパンティを放り出す。またブラジャーのホックを外させるつもりかよ。
仕方なく、満は電灯を消して、左江子の横にすべりこむ。ノートはどうなったのかと頭の中でつぶやきながら、掌は自然に左江子の固くしまった乳房をもみほぐしている。得体の知れない不安が、満の背中を霧のように包む。やり場のない怒りに似た衝動が、満を突き飛ばす。
「痛い、そんなに強く噛んじゃあ」
一体、誰が持って行ったんだ、あのノートを。

翌日、大学を出たのは夕方の五時頃だった。エンジンがなかなかスタートせず、少しいじってたが故障の箇所がはっきりしないので、修理工場に連絡し、何ヶ月ぶりかで、国電バスを利用して帰宅することにした。
下宿近くのバス停で満が下車する時、満に続いてあわてて下りる男を見て、おやと思った。どこかで見覚えがある。ニッカボッカーをはいて、赤黒く日焼けした首にタオルを結びつけた、労務者風の身なりである。
その男は下車すると、停留所のすぐ脇の路地に曲がって姿を消した。会ったとすれば今日だ。無意識の中に残存している感覚が、そう語りかける。満は今日会った人物と、その場面を時間を追って再生してみる。話は簡単だ。大学病院の中で会う機会は絶対ない。・・・とすれば帰りだ。
自動車が故障し、ボンネットを上げてエンジンをいじっている時か。自動車は病院の通用門の脇に停めてあった。初診の患者は正門から入って診察票の交付を受けねばならないが、二度目からは、通用門から直接、各科受付に行く方が便利な場合が多い。通用門の出入りはかなりにぎやかなのだ。
エンジンの点検に約二十分かかった。その間、頭をボンネットの中に突込み放しだったわけで

はない。何度か首を外に出して、工具を捜したり、故障箇所の見当をつけたりした。その時網膜に映った通行人の中に、労務者スタイルがあったかどうか。薄暗い世界を、灰色の人物達がゆるゆると動きまわる。

車の脇に立った満も、その中の一人物だ。満は薄明の世界を凝視する。顕微鏡の焦点を合わせる時のように。だが焦点はなかなか合わない。ぼんやりとした輪郭だけが記憶の中をうごめいている。顔も表情も、存在することだけは確かなのだが、その本体はどうしても顕現してこない。拡大するにつれ、灰色の人物はますます灰色になり、のっぺら坊に近づき、蒙蒙とした霧の中に溶解してしまう。

ある考えが稲妻のように光って、満の記憶再生作業を中断した。あの労務者はどこからバスに乗ったか。いや、バスの中でそれと意識せずに労務者の姿を見ていたのではないか。それが下車の時に、どこかで会ったという意識を呼び起こしたのではあるまいか。バスに乗ってからの記憶の方が先決問題だ。

満はバスの中で週刊誌を読んでいた。しかしずっと視線を紙面に集中していたわけではない。コラムや、漫画の一区切りの時にふとあたりを見回さないとは言えない。またバスが停車し、客の乗降があれば、無意識のうちに前をよぎる人間には目をやるものだ。その中に労務者はいなかったか。微かに記憶の中に浮かび出てくるものがある。地下足袋とすそのしまったズボンだ。対面する空席ではない。満の座った同じ側の席、それも一人か二人の乗客が間にはさまってる。

グイと股を開いて、通路の中ほどまでふんばったニッカボッカーだ。なぜ覚えているのか。そう、老婆が乗ってきて、支柱をつかみそこね、よろけて倒れそうになり、手をついたのがニッカボッカーの膝だった。そうだ、それで席を譲ってやればいいのにと思ったのだっけ。ニッカボッカーの表情は全然見えなかったが、譲ったのは彼ではなく、その向かいに座っていた女学生だった。

さあ、思い出したぞ。老婆の乗ったのは、始発駅から四つめの停留所だろう。そうだ、ガラス窓の向うに社務所の茂みが見えていたような気がする。バスは始発駅ですでに満席だったから、多分、労務者もそこから乗ったに違いない。だが、それは不確かで、途中で乗って座る可能性も否定できない。

とにかく見覚えがあったのは、労務者そのものではなく、その一部であるニッカボッカーだったのだ。しかし、俺はどうして、大学病院の帰りにまで記憶をさかのぼらせたのだろう。なぜ最初にバスの中の記憶を探らなかったのか。

満は自分の記憶装置の作動順序の中に、狂いがあるように思われた。狂いは自分の心理に発しているようだった。何をそんなに脅えているんだ。満は舌打ちをした。見覚えがある、から一気に大学病院まで記憶がさかのぼったのは、病院から自宅までつけられたのではないかという懸念の無意識の中の反応に違いなかった。

いわば影に過ぎない自分の脅迫観念が、見覚えのある労務者という影を生んだに過ぎないのだ。下宿への道を歩きながら満はそう自分に言い聞かせた。

しかし・・・下宿のある路地へ入る前に、満は背後を振り向かずにはいられない。チラリと影が動き、電柱の影に隠れた、ように見えた。確かにあの労務者風の男だったようだが、日暮れの闇に妨げられ、はっきりしない。まだ、電柱の影から出てこない。あそこは、たしか駄菓子屋の前あたりだ。よし。

満は今来た道を大またに引き返した。男と向かい合ったら、相手が飛びかかって来たら、偶然

ここにいるだけだと言ったら・・・わあーんと唸りを立てて、結論のない仮定条件が満の頭の中でごった返した。霧の中に潜んでいる者と、向い合って立つこと、とにかく対面すること、それはもう意志ではなく、肉欲に似た衝動となって、満を電柱に突き進ませた。

　電柱の後は空虚だった。駄菓子屋の蛍光灯が、ガラス越しに足元を白く照らしている。誰もいない。満は店の中をのぞいた。客はもちろん店番の老婆の姿も見えない。奥で食事でもしているのだろう。やはり実体のない影だったのだ。満は自分自身にそうつぶやきかけて、内面の反応に集中した。
　緊張はゆるまなかった。不安は再び対象を失ったが、消滅するどころか、満自身の中に対象を見出そうとして大ゆれにゆれ動いていた。

　錯覚だ、見間違いだ・・・　いや確かに誰かが隠れた。俺の目は鋭い。両眼とも一・二の視力だ。見間違いだなんて・・・幻視か、俺は神経が不調なのか・・・いやいや、そんなはずはない、理由がない、理由が・・・どっちなんだ。俺が狂ってるのか、それとも実際に、俺は狙われているのか・・・出てこい・・・出て来てくれ、お願いだ。こんな宙ぶらりんの状態は我慢できない。・・・しかし、何が出てくると言うんだ・・・。現実にいない者が出て来るはずはない・・・現実なのか、幻想なのかどっちなんだ・・・

「何か御用ですか」
いつのまにか店先に立った老婆に、うさん臭そうな声をかけられた。
　「あっ・・・ええ」
　満はせんべいを書い、ついでに電話を借りて、左江子を呼び出そうとした。　左江子の湿ったぬくもりの中で、凝固したこの混冥を、柔らかくもみほぐし、吸い取り、なめつくして欲しかった。左江子は寮にいなかった。今日は会えないと言ったのは、満自身だったことを思い出す。
　店を出る満の背後で、チャリッと金具が鳴ってカーテンが引かれ、明かりが消された。駄菓子屋の店じまいの時刻だった。
　あれは皮膚感覚ではあるまいか。他人に見られている時の反応は。光が究極においてエネルギーであるならば、人間の視線にも同じことが言えはしないか。何かのエネルギーが放射され、それが皮膚に当って反応するのではあるまいか。そう思うほど、満は誰かに見られていることを感じる。
　エンジンの直るまでの四日間に、宿直の日を除く三日間とも、国電の中で、自分に注がれる強い視線に気がついた。背の肌がこそばゆくなり、時には痛痒くなるような気分だ。第六感などという形而上的なものではない。正に皮膚感覚だ。
　満があたりを見回すと、ふっとその感覚が消え、相手の視線がそれたことがわかる。しかも相手の居場所は、さっぱり検討がつかない。背後にいることだけは確かだ。あるいは、前にいても視覚にさえぎられて、皮膚が反応を察知できないのかも知れないし、身体の前半部には、そんな感覚器官がないのかもしれない。とにかく背中だ。
　左江子には毎晩下宿に来させることにした。勤務の終わる頃、病院に迎えに来るようにした。自動車の修理が終わっても事情は同じだ。
裸の視線を浴びせるかわりに、奇妙な自動車が、毎日跡をつけてくる。一度は満の車を追い越してすぐ停車したので、満は危なく追突するところだった。すぐブレーキを踏みバックして脇を通

り抜けようとすると、中から外人が出てきて、手をふり停車させようとした。はっとした。その顔つきが、ジョージ・メルトイアーだったからだ。はっきりとはわからないが、満はメルトイアーの名が浮かぶが早いか、反射的にハンドルを切って脇道へ逃げ込んだ。
めくら滅法に裏道を抜け、跡をつけられていないのを確かめてから、助手席の左江子に
「おい、今の外人、この前サア公がゴーゴーつき合ってやった奴だろ」

と聞くと
　「ええ？何」
と寝呆け声を出した。寝てやがったのか、全く豚みたいによく寝る女だ。こっちが必死で相手をまこうとしているのが、隣に座っていてわからない人だろうか。女ってみんなこんなに鈍く図々しくでき上がっているんだろうか。
　「外人、そうかなあ、忘れちゃった」
　「よく寝られるなあ、ひまさせありゃ、クウクウ、クウクウ」
　「だって、ここん所、ミツ坊毎晩すごいんだもの、あたしだって参っちゃうわ」
　何が参っちゃうだ。喜び勇んで乗り込んで来るくせに・・・。満は焦立っている。不安をいやすはずのセックスのあまりの単調さに焦立っている。焦立ちが過度の刺激を求める。しかし、左江子の肉をどう扱おうと、究極においては、自身を押し入れ、放出する以外のことではなく、その根源的な単調さを思うとどうにも腹が立って、大根でもごぼうでも、ハムでも手当たり次第に、腹の暗く湿っぽい穴ぼこに詰め込んで窒息させてやりたくなる。
　手術は簡単に終わった。溶け切らない骨片が三個、膿の中に浮いていた。
　「ほら、持って帰れよ、記念になるぞ」
　少年は気味悪そうに、一センチ程の骨をつまみ上げる。骨は病菌に冒され蜂の巣になっている。記念になぞなるものか。多分一週間かそこらで、溶けて消えるだろう。少年はチリ紙の間に骨をはさんだ。この少年も当分は骨髄炎とお別れだろう。今日の手術はうまくいった。自分の骨を、自分の目で、正気で見ることのできる幸運にめぐり会えたにしたのは、少年の顔色はあまりさえない。
　「無理をするとまた他に出るからな。気をつけるんだぞ」
　「はい」
　比較的端正な顔立ちをした少年であった。背骨でも、腰骨でも、顔のど真ん中でも、病菌がついたらそれまでだぞ。どんな可愛い顔でも、骨を創り、筋肉を切り裂かなきゃならんのだぞ。骨はスカスカになっちゃうんだぞ・・・
　しかし、満はそうは言わない。少年は右の手首、左の肩の付根、左股、右腰に骨髄炎の傷跡を残している。細い体で、病魔の跳梁に堪えているのだ。
ある日どこかの関節の付近が重く痛み、筋肉が腫れ、傷口が開いて膿が流れ出す。そんな不安を長い間堪えてきたのである。
　俺よりこいつの方が先輩かも知れん。不安に対して、従順に堪えるという点では・・・
　一緒に勤務を終えた内科の医師が、途中まで車に乗せてくれと申し出た。その医師を助手席に乗せ、病院の近くのコーヒー店で待っていた左江子のを拾った。医師は繁華街の入口で降り、左江子が助手席に移った。車が走り出すと、間もなく左江子が
　「ねえ、シートのすきまにこんなもんが入ってたわよ。こないだミツ坊がなくなったって騒いでたノートじゃないの」
　チラと横目でみると、表紙が馬鹿に汚い。
　「違うよ、もっといい奴だ」

「そう」
左江子はペラペラとノートを繰った。

「日記みたいだな・・・きたない字」
「日記？」
信号待ちの所で、ノートを受取りさっとのぞいてみる。確かに満のノートではない。ベトナム・・・サイゴン・・・戦闘・・・輸送機・・・などという単語が、所々に見られる。
どうして、こんなものが俺の車に乗っていたか。だいたいリアシートはこの頃使ってないんだ・・・最近使ったのは、今日を除けば・・・小野沢・・・ノート・・・
途中レストランに寄り、ハンバーグを食べた。ハンバーグをほほばりながら、もしこのノートが、小野沢のものなら、原本へでも預けるよりしょうがない。とにかく中を読んでみなければ、と膝の上で開いてみる。
「何さ、そんなもの、後で読めばいいじゃない。消化に悪いわよ」
左江子は卓の下から手をのばしてノートをさらった。
「なあサア公、俺に何か変わったことが起こったら、この新聞記者に連絡するんだぞ」
添え物のポテトフライをくわえたまま、左江子は目を瞠った。
「変わったことって何？ねえ」
あわてて飲み下して身体をのり出し、満の置いた名刺を除く。
「いや、もしもって話だよ」
満はある予感を覚えていた。このノートが、邂逅であり、解答であり、運命であるような。その予感の奥深くに、本能的な生命のおののきのようなものがあった。が、すぐに芝居がかったことを言う自分がばかばかしくなってくる。どうもいかん。すぐ何でも小野沢と結びつけたがる。やっぱり神経がおかしいのかな。
「なあ、俺今日このノート読まなきゃならんから、サア公は寮へ帰れよ」
「なによ、急に・・・どうしたの」
左江子の小鼻がふくらんでいる。怒ってやがる。
「だから、ノートを読むからさ」
「読むんならあたしと一緒だっていいじゃない。どうして一人でなきゃいけない？」
満は通りかかったウェイトレスにコーヒーを注文する。左江子に言い返すことばを探した。一人でじっくり読みたい、という感情だけがあって、理由は何もない。
「それにあたしがそのノートを見つけたんだもの。あたしにだって読む権利があるわよ」
と言いながら、左江子はコップの水をチュッとすすった。
それもそうだ、と満は妥協した。それに、自分の思うほど大したノートじゃないかもしれない。誰かが置き忘れた使い古しのヤクザなノートかも知れないんだ。そういう可能性の方が大きい。
一度目覚めかけた、生命体の裸の感触が、けだるい日常感覚に柔かく包込まれて、再び眠り込もうとしていた。

１０章 密室への離陸

Ｘ月Ｘ日
　根釧原野をもう三日間もかけまわらされた。へとへとだ。戦車隊の奴らがうらやましい。少し眠ったと思うと、すぐ「敵襲、散開、前進」とくる。・・・酒が飲みたい。飲んでぐっすり眠りたい。
Ｘ月Ｘ日
　スナイパー（狙撃兵）にならないかと隊長に言われた。面倒臭い練習は嫌だから断わる。誰かが鴨を射ったそうだ。禁猟区だが、射ったものは仕方がないだろうと焼いて食ってしまったそうだ。霧にまかれて、ずぶ濡れになる。あと二日で帯広に帰れる。
Ｘ月Ｘ日
　札幌でパチンコ。昼ラーメン。夜、鶏の蒸し焼きにビール。喫茶店に入ると、高校生らしいグループがゴーゴーを踊っていた。うらやましいとは思わないが・・・
Ｘ月Ｘ日
　演習中に隊員が一人死んだ。迫撃砲の発射訓練中に、砲身が爆発したのだ。顔の右半分と脇腹が吹っ飛んでいた。この頃、演習が厳しくなった。実弾使用がめっきりふえた。
Ｘ月Ｘ日
　外出を禁止された。外部との個人的連絡は隊長を通せという令が出た。他の隊に比べて、この特殊編成中隊の訓練が激しすぎると不満を言う者が出て来たので、そのせいかも知れない。

　左江子が足をからませてくる。
　「ねえ、寝て読んだら」
　「うん」
　「ねえ」
　「うるせえな、だから帰れって言ったろ、もう少し待ってろ」
　自衛隊員の日記に違いない。だが、こんなんじゃあ、どうということもない退屈な日記だ。

Ｘ月Ｘ日
　昨日沖縄につく。対戦の基本訓練を受ける。落とし穴、ブービートラップ、地雷、竹槍。模範を示したサージャンは、さすが歴戦の勇士だけあって、軽くさばいていた。しかし、日本であんなゲリラ戦が展開される可能性があるだろうか。それにしても、ガランガランとブービーが鳴るたびに、身体が固くなった。本当ならあれで身体が粉々になっていたわけだ。自衛隊はまだだめだ。もっと訓練を積まなければ。
Ｘ月Ｘ日
　また移動だ。定まった本拠を持たず、あちこち移動するのが本職だとは言うものの、少しは落着きたい。十日も一所にいれば長い方だ。今度は東富士で四日間だという。斎藤がスナイパーの一員になった。

「どう、なんか、面白いこと書いてある」
「別に」
うん、と左江子が背中を叩く。

「そんなの明日だっていいじゃないの、はやく寝ようよ」
それもそうかなと思いながら、十二、三枚続けてページを繰る。

Ｘ月Ｘ日
　十九時半集合、トラックで空港に向かう。直ちに離陸。発信基地は不明。たぶん横田だろう。機内は約八十人の隊員で満員。離陸直後は雷雲が密集していたが、すぐに通過したようだ。
　目的地はベトナムと知らされる。みんなびっくりして顔を見合わせた。米軍と共同演習を行うそうだ。演習を妨害するものがあれば米軍が排除するということだが、危険すぎる感じだ。
Ｘ月Ｘ日
　何をしに来たかわからない昨日今日だ。暑くてやり切れない。演習はまだ始まらないらしい。隊員は壕の中でゴロゴロ寝転んでいる。米軍の数がまばらで、敵に攻撃されたら、ひとたまりもあるまいと皆で話し合った。
Ｘ月Ｘ日
　我々のいる基地は完全に包囲されていることがわかった。米軍はどんどん輸送機で引き揚げていく。河井司令がサイゴンへ行ったという噂だ。自分だけ逃げ出したと怒る隊員もいる。
完全に隊の規律が乱れた。副指令の命令を聞いて、戦闘配置につく者はほとんどいない。先刻隊員の一人が、無反動砲の点検中、誤って発射した。誰もがどうしていいかわからず、身体も言うことを聞かないようだ。一刻も早くこんな基地は脱け出したい。

　満は蒲団の上に起き上がった。
　「ちょっと触るな、大切なとこだ」
　左江子の手が下からパシンとノートを払い落とした。
　「何をするんだ、サア公」
　左江子は黙ってにらんでいる。
　「バカヤロ、さっさと寝ちまえ」
　「いやなこった・・・どうせバカですよ、あたし帰る」
さっさと洋服を着始めた。この時刻じゃ寮はしまってるだろうと思ったが、今さら引止めるわけにもいかない。
　「ああ、帰れ帰れ、始めからそう言ったじゃないか」
　「なにさ、一寸ぐらいもてたからって、のぼせ上がっちゃってさ。ミツ坊の代わりぐらいどこにだっているわよ」
　「そいつあ、お互いさまだ」
畳を踏み鳴らして室を出ていく左江子の後姿に、チェッと舌打ちをする。どうせすぐ引返してくるだろう。あいつもヒステリーを起こすなんて人並みの所があるんだなあ。

Ｘ月Ｘ日
　悲惨な一日が終わった。何から書けばいいか。とにかく明け方から砲撃が始まった。百四、五

十人いた米兵が必死に応戦にあたった。絶え間のない迫撃砲、ロケット、機関銃の雨に、壕から顔を上げることもできなかった。

五メートルと離れない所に弾が落ち、土のうに叩きつけられ失神した。気がつくと、すぐに股間に冷たいのを感じた。小便がもれたのだ。恐ろしい戦闘だった。怪我をしないのが不思議でならないほどだ。
救援ヘリは米軍しか乗せなかった。銃を構え、我々を寄せつけまいとするので、呆然とした。扇形に開いて銃を構え、扇の要にあたるヘリに、一歩一歩後退していく米軍兵士が赤鬼のように見えた。
「畜生、こりゃ一体なんてこった」
と誰かが泣き声をあげるのが聞こえた。それを機に、隊員達の銃が日を噴いて、次々にヘリを焼いた。すでに飛び上がったヘリが、我々に攻撃されているヘリを援護するためか、ロケットや機関銃を発射しつづけた。
みんな死んだ。生きているのは、俺と小野沢の二人だけだ。

小野沢・・・到頭出て来た。やっぱりそうか。左江子にせつかれて飛ばし読みしたところを読み返そう。その前にコーヒーでもいれるか。
ノートに集中していた神経が解放され、とりとめのない想念がボンヤリした脳膜にきれぎれに浮かんでは消えた。時計を見ると十一時半だった。とりあえず、明日、原本にこのノートを渡そう。新聞社でどう扱おうとそれは俺の知ったことじゃない。万事これで解決だ。
ミシッと廊下がきしみ、こっそりと戸を叩く音がする。サア公だ、ザマミロ、やっぱり帰ってきたろ。
「今あけるから待ってろ」
鍵を外し、戸を開くが早いか、外の人物がするりと部屋に滑り込んだ。もう一人、満の前に立っているのは見知らぬ男だった。浅黒い顔でスポーツ刈りの頭髪だった。その男は無言のまま、満を胸で押すようにして、室の中に一歩踏み込み、後手に戸をしめた。
先に飛び込んだ男は、あのノートを手にしている。
「君たち誰だ。何のようで・・・」
「黙って・・・騒ぐと・・・やるぜ」
ほとんどつぶやくような、感情のかげりの全くない、むしろ陽気にさえ聞こえる声だった。違和感の後を追って、悪寒が満の背筋を這い上がった。
「どうだ」
陽気な声が聞いた。
「これだ、間違いない」
「よし、じゃあ行こう」
男は改めて満に向き直った。男の目は殺戮に際しても無表情な爬虫類の光を宿していた。
「これ、もちろん読んだね」
「読んだらどうだって言うんだ」
ノートを手にした男が、満の背後に立ちはだかった。満は本能的に部屋の内部に入ろうとしたが、男はどかなかった。

「一緒に来てもらおう。逃げるのは勝手だが、命がけだってことを忘れずにな」
「どこへ連れてこうと言うんだ」
男達は答えなかった。
「君たち警官か」

男達はちらと顔を見合わせ、冷笑を浮かべた。
「一緒に来ればわかるさ」
捜査令状も逮捕状も示さずに踏込む警官はいない筈だ。満の身体がこわばった。足が震えた。助けを求めようとしたが、のどがひきつって声が出ない。叫べば下宿の人達がすぐに起き出すだろう。
一人が満の腕を取り、もう一人が背中を押した。満は必死で抵抗した。腕を振り回し足を突っ張った。壁にかけた 鍋に腕がぶつかり、ガラガラと音を立てて転がった。その途端ワァーという喚き声が満ののどからほとばしった。
「どうしました」
隣の部屋から声がかかり、戸があいた。他の部屋からも住人が首を出した。二階から降りてきた管理人のばあさんの顔を見て満はほっとした。
「放せ」
まだ放さないでいる男の手を振り切ろうとした。
「中島さんどうしたの」
ばあさんは呆れ顔で聞いた。
「警察の者です。公務執行妨害の容疑で中島を逮捕します」
スポーツ刈りが内ポケットから警察手帳らしいものを出した。
ばあさんは満を険しい目でにらんだ。下宿の人達も、取り巻いた輪を急速に解いた。
「嘘だ。逮捕状を見せろ、逮捕状を・・・」
だが、周囲の目は全く反応を示さなくなった。満は彼等の視線の中で、珍種の動物に変身しつつあった。
「許してくれ、かんべんしてくれ。俺は何も・・・」
恐怖が頭骨の中で膨張し、破裂しそうだった。満は絶叫した。絶叫は孤独を深め、背負い切れぬ孤独がさらに絶叫を呼び起こした。
男達は口笛を吹き出しそうな快活さで、子供を扱うように満を外に引き出した。裸足でパジャマのまま、二人は外に待たせた車まで満を引きずった。満は二人のするがままに引き回された。車に押し込まれる時、ちらと前方に半月が見えた。薄赤く濁った月だった。
スポーツ刈りが満の隣に座った。ハンケチにビンの薬を垂らしている。クロロホルムらしい。
「さあ、これで眠ってもらおうか」
男は薬で濡れたハンケチを満の手に渡した。強烈な芳香が鼻をさす。
「早く！余計な手間をかけさせるな」
拒否すれば、力づくで眠らされるだろう。満の内部は粉々に砕けていた。踏み止まり抵抗する気力はどこにも残っていない。
ハンケチをじっと眺めた。息をつめ、ハンケチを鼻にあて、座席に崩れ込んだ。薬が瞼を刺激する。惨めさに涙がとめどなく流れた。と、拳で軽くみぞおちを突かれた。うっと息がつまり、反射的に息を深く吸い込んだ時、鼻を覆ったハンケチを上から強く圧しつけられた。どうして俺がこんなめに・・・

知りすぎたからさ・・・誰だ、誰なんだ・・・知ってどうするだと・・・卑怯な・・・何を俺の血管にたらしこむんだ・・・頭が痛い、燃えるようだ・・・赤くなった、目の前が・・・頭の中が真っ赤だやめてくれ・・・暗いなあ・・・目を開いていても・・・見えない・・・何も・・・見えない・・・どこなんだ、ここは・・・地下室・・・顔を見せろ・・・アルコールだな・・・静脈に入れているのは・・・殺すつもりか・・・お前は・・・小野沢・・・ちがう、そんなはずは・・・誰だ、メルトイアーか・・・奥平か・・・違うな・・・読んでないよ、俺の他には・・・左江子・・・バカな・・・あいつが読むと思うのか・・・俺だけだ・・・しゃべらんから・・・許してくれ・・・黙ってないで・・・火が・・・どうするんだ・・・ライター・・・目を焼くのか・・・なぜ・・・びっくりした・・・ノートか・・・なぜ・・・

瞼が重い。目を半分開いているのがやっとだ。すぐ近くから男の声がする。
「君の他に誰が、このノートを読んだのだ」
声の主は姿を見せない。三個のライトから発する光の束が、分厚い壁となって声の主を隠している。
「誰も・・・」
と満は首を振ったが、途中でがくんと前に垂れ落ちそうになる。意識はさめているのに、肉体はさめきってないらしい。
「君の恋人は読んだんじゃないのか」
「いや」
と答えながら、全く同じ質問を何度も繰返されているような気がする。
「どこに隠しておいといたんだ」
「リアシートから見つけたんだ」
「小野沢から預けられたのか」
「いや」
股から足首が温かくなった。すでに腰のまわりはぐっしょり濡れている。尿意もなく放出しつつある自分がそこにいた。少し頭がはっきりしてくる。
「君はもちろん、あのノートの内容を真実と考えているだろうね」
「いや、わからない」
「何故だ、はっきりしているじゃないか」
「偽物かもしれない。ただのいたずら書きかも知れない」
別の声が間を置かずに満を襲う。
「小野沢に会ったな」
「会った。いや、小野沢と言うらしい人物だ」
「小野沢の症状を、医者としてどう判定したのだ」
「強度の精神分裂症」
「病因は？」
「わからない」

目を射すくめる壁の背後から、小声のやりとりが聞こえ、すぐ静まった。 両腕は肘掛けに固定され、右の静脈には、点滴注射の針が入っている。キリッとコックのきしる音がした。針の先から滑り込んでくる白熱した金属線が、血管内で急激に膨張して延べ板になる。口の中が炎をくわえたようだ。

薄赤い霧が目の先を覆い、見る見るうちに真紅に変化し、くるくる回り出す。赤い大渦巻の底からかすかに声がする。

「小野沢の病因は」

誰かが答えた。

「戦闘恐怖症だ」

誰だ、俺の声色を使う奴は・・・

渦の底に、ポツッと黒点が見え、するするとせり上がってくる。穴だ。底抜けのすりばちだ。

「死んだか」

遠くで声がした。

死んでたまるか、こんな所で・・・暗闇が肌を伝って滑り落ちて行く・・・手足を突っ張る・・・逃げてやるぞ・・・この穴から・・・どうしても・・・人殺しめ・・・暗いな・・・空に浮かんでいるみたいだ・・・火が・・・明かりだ・・・人殺しめ・・・逃げよう・・・逃げなくちゃ・・・どうしても・・・

原本進はＸＸ警察署の塚本刑事に会った。左江子から電話で連絡を受けなければ、サツ回りは断りたいところだった。塚本刑事は、

「まあ、大体はクラブの皆さんにお話したとおりです。その後はまだ捜査は進展していないようなわけで・・・何しろ警察の名を語るような大胆な奴なんで・・・」

大胆な奴は捜査し難いような口ぶりだった。

「中島君の身辺についてはどの程度調べてあるんですか」

「そうですね。無給医局員、故郷は山形、それに・・・近頃は反戦同盟の札付きと仲よくなったようですな・・・そんなところですか」

「反戦同盟・・・へえ、そうですか。でそっちの方も洗ってるんですか」

「それはまあ、念のためといいますか・・・」

「鋭意捜査中です」

何故、中島満が、田代の所でちらりと会っただけの俺に、連絡しろと行ったか。その理由を探ることは、この問答からはできそうもない。大体、中島の失踪を警察に嗅ぎつけられてから、連絡するとは、左江子というあの女もどうかしている。

帰りがけに記者クラブへ顔を出す。
「例の中島の蒸発の件は、警察じゃどんなめどで捜査しているんです」
原本よりも二、三才若い記者が進の顔を見て椅子を持って来てくれた。
「中島？ああ、あれか。あんまり警察はのってないようですよ。そのうち中島が帰ってからゆっくり聞き出す腹じゃないですか」
「ふうん、ここの刑事は反戦同盟のことを何とか言ってたけど、関係あるのか」
「さあ・・・ただ例のデモの投石にからんで、幹部を調べることは調べてるんだが・・・直接関係がある様子も見えないなあ・・・」
「警察が中島を逮捕しなかったのは事実なんだろうね」
「そこまで疑っちゃ可哀想だし、中島って奴も秘密に拘引されるほど大物じゃないんでしょう」

原本は警察署の石段を下りながら、まだ自分の出番じゃないな、と思った。
そう思ったとたん、大きなあくびがのどの奥から這い上がってきた。白茶けた日光が、霧のように湿っぽく、アスファルトに粘り着いている。
原本はタクシーを止め、国会の記者クラブと行先を告げ、眠気のさしてくる瞼をごしごしこすった。

完